

第60回

全国国際教育研究大会愛媛大会報告書

—国際教育インフォメーション—



目次

巻頭言 全国国際教育研究協議会会長（東京都立北豊島工科高等学校校長）…… 中里 真一 ……	2
第 60 回全国国際教育研究大会 愛媛大会	
○大会概要	
○大会会長挨拶 …… 愛媛県立伊予農業高等学校 …… 福岡恵里子 ……	11
○開会行事主催者挨拶 …… 東京都立北豊島工科高等学校 …… 中里 真一 ……	12
○開会行事共催者挨拶 …… 独立行政法人国際協力機構 四国センター所長 …… 山村 直史 ……	13
○開会行事来賓挨拶 …… 外務省国際協力局審議官 …… 日下部英紀 ……	14
○開会行事来賓挨拶 …… 文部科学省初等中等教育局情報教育・外国語教育課 教科調査官 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官 …… 富高 雅代 ……	15
○愛媛大会高校生英語・日本語弁論大会	
英語弁論 …… 東京都立小石川中等教育学校 …… 片倉 宏海（外務大臣賞） ……	16
英語弁論 …… 長崎県立佐世保北高等学校 …… 高 旻惺（文部科学大臣賞） ……	17
英語弁論 …… 佐野日本大学高等学校 …… 高橋こころ（国際協力機構理事長賞） ……	18
英語弁論 …… 徳島県立徳島北高等学校 …… 潮 聡太（国際交流基金理事長賞） ……	19
英語弁論 …… 済美平成中等教育学校 …… 鳥羽さとみ（日本国際協力センター理事長賞） ……	20
日本語弁論 …… 仙台育英学園高等学校 …… カナヌラック ピアンジャイ （外務大臣賞） ……	21
日本語弁論 …… 宮崎学園中学校・高等学校 …… 朴 仁敬（文部科学大臣賞） ……	22
日本語弁論 …… 翔凜高等学校 …… 関 越童（国際協力機構理事長賞） ……	23
日本語弁論 …… 東海大付属高輪台高等学校 …… アフマド アルシェヒ （国際交流基金理事長賞） ……	24
日本語弁論 …… 広島県立瀬戸田高等学校 …… 岡本 アンシャリー （日本国際協力センター理事長賞） ……	25
英語弁論講評 …… 文部科学省初等中等教育局情報教育・外国語教育課 教科調査官 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官 …… 富高 雅代 ……	26
日本語弁論講評 …… 外務省国際協力局審議官 …… 日下部英紀 ……	27
○高校生国際理解協力研究発表	
研究発表 …… 高知商業高等学校（国際協力機構四国センター所長賞） ……	28
研究発表 …… 愛媛県立東温高等学校（国際交流基金賞） ……	32
研究発表 …… 東京都立五日市高等学校（日本国際協力センター賞） ……	36
研究発表 …… 宮崎県立宮崎南高等学校（全国国際教育研究協議会賞） ……	40
研究発表 …… 和歌山県立日高高等学校（国際理解・国際協力奨励賞） ……	42
研究発表講評 …… 独立行政法人国際協力機構 四国センター所長 …… 山村 直史 ……	46
○第 61 回大会案内 …… 宮城県仙台東高等学校 …… 千葉 明彦 ……	47
各地区からの研究報告	
○国際教育	
関東甲信越 …… 東京都立五日市高等学校 …… 中村 俊佑 ……	48
近畿 …… 和歌山県立星林高等学校 …… 山田 一騎 ……	58
九州 …… 宮崎学園中学校・高等学校 …… 伊東 望 ……	60
高大連携 …… 北海道教育大学 …… 石森 広美 ……	64
各団体紹介	
○独立行政法人国際協力機構（JICA）国際理解・開発教育支援事業紹介 ……	68
○一般財団法人日本国際協力センター（JICE）事業紹介 ……	74
○独立行政法人国際交流基金（JF）事業紹介 ……	76
○NPO 法人全国国際教育協会事業紹介 ……	79
全国国際教育研究協議会紹介 …… 東京都立五日市高等学校 …… 中村 俊佑 ……	81
あゆみ ……	86
各県事務局名簿 ……	87
あとがき …… NPO 法人全国国際教育協会 …… 木村 光宏 ……	88

全国国際教育研究協議会
会長 中里 真一
(東京都立北豊島工科高等学校)

日頃より全国国際研究協議会の活動にご理解とご協力をいただきありがとうございます。
本研究協議会は高等学校の先生方を中心に、国際理解教育や国際協力に関する研究と実践活動を広く推進しています。また、参加いただいている先生方は様々な教科の先生方が参加しており、それぞれの視点から意見を出し合い、学校における国際理解や国際教育の充実を図るべく活動を展開しています。

新型コロナウイルスによる感染症が2類から5類に変わり日々の生活がようやく落ち着き、学校現場でも平常通りの活動が行えるようになりコロナ前の日常が戻ってきました。国際研の活動もコロナ前の状態に戻すように努めてまいりました。各地区でも先生方、生徒の皆さんが活発に活動を始められた様子をうかがっています。コロナによる影響は悪いことばかりでなくよかったと思われることもありました。一番はオンラインでの会議等が活発に行えるようになったことです。またオンラインに慣れてきたおかげで突発的な事態にも対応することができてきました。今年度の愛媛大会はその成果の現れだと思えます。台風という事態にもかかわらず大会本部のほうで急遽オンライン開催に切り替え大会を運営することができました。対応していただいた愛媛大会事務局には感謝申し上げます。また急な対応にもかかわらず発表をしてくれた生徒の皆さんにも感謝いたします。

コロナ禍以降なかなか外に向けられなかった国際協力もまたコロナ禍以前のような状態に戻つつあります。今年度も国際協力機構が主催する「JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト」に多くの応募がありました。国際協力の在り方も今までとは違う切り口の素晴らしいエッセイが沢山ありました。応募していただいた生徒の皆さん、ご指導いただいた先生方に深く感謝申し上げます。

“SDGs”「持続可能な社会のための開発目標」。2015年に国連で提唱されて以来、国内でこの言葉はすっかり定着しました。2030年まであと6年。目標達成のために学校現場でも取り組んでいただきたいと思います。

最後になりましたがこのような社会情勢の中、本研究会の活動をご理解いただきご支援・ご協力をいただきました JICA をはじめ日本国際協力センター (JICE) などとは今後も継続した連携をお願いしていきたいと考えております。益々各校、各都道府県の活動が活発になりますよう今後ともよろしく願いいたします。

令和5年度は台風で対面での発表が行えませんでした。令和6年度は宮城県で全国大会を実施する予定です。関係各位のご参加をよろしく願いいたします。

第 60 回全国国際教育研究大会 愛媛大会

「愛顔でつなぐ世界～持続可能な世界を目指して～」

1 大会趣旨

IT 技術や SNS の発展により、私たちを取り巻く社会環境が複雑性を増す一方、地球温暖化に伴う気候変動により、自然環境は不可測性を増し、さらには武力侵攻や紛争により国際社会は不安定化しています。そのような予測困難な状況の中で起こった新型コロナウイルス感染症は、簡単に国境を越え、皮肉にも世界はつながっていることを証明するかの如く世界的蔓延を引き起こしました。私たち人類は、持てる限りの知恵と技術を駆使し、世界的規模で取り組み、この未曾有の危機を乗り越えようとしています。この成果は、地球に住む一人ひとりがコロナ禍を「自分事」として捉え、お互いを思いやり、人と人が一体となり協働することによって生み出されたものであり、世界が一丸となって世界的課題に取り組む意義を私たちに教えてくれました。

コロナ禍はまた、持続可能性の構築への意識が高まるきっかけにもなりました。2015 年の国連において全会一致で採択された『持続可能な開発のための 2030 アジェンダ(SDGs)』の目標達成のための行動計画も後半戦に入りました。私たちの生きる世界を持続可能にするために、高校生として自分自身がどうあるべきか、自分に何ができるのか、世界とどう関わっていくべきかを模索し、行動に移すことが求められています。

ここ愛媛は四国遍路の地であり、人の温かさに触れながら、自分自身と向き合う心の旅をするお遍路さんを国籍や世代、宗教・宗派を超え、温かく受け入れ見守る文化が古来より根づいています。そして伊予国(愛媛)は迷いから目覚める「菩提の道場」です。愛顔(えがお)あふれるここ愛媛に集う高校生が国際理解や国際貢献、SDGs 達成に関わる取組や研究、思いを共有し、交流を深めることを通して、世界の抱える諸問題を解決し、持続可能な世界の構築を目指し、高校生として何ができるのかを自由に語り合い、新たな気づきを得られる場所となることを願っています。

- 2 主 催 全国国際教育研究協議会
- 3 共 催 独立行政法人国際協力機構 特定非営利活動法人全国国際教育協会
四国高等学校国際教育研究協議会
- 4 主 管 愛媛県高等学校国際教育研究協議会
- 5 後 援 外務省 文部科学省 愛媛県 独立行政法人国際交流基金
一般財団法人日本国際協力センター 公益社団法人青年海外協力協会
愛媛県海外協会 公益財団法人松山観光コンベンション協会
一般社団法人愛媛県観光物産協会 公益財団法人日本教育公務員弘済会愛媛支部
株式会社国際開発ジャーナル社 愛媛県高等学校長協会 愛媛県教育委員会
香川県教育委員会 徳島県教育委員会 高知県教育委員会
- 6 会 期 令和 5 年 8 月 9 日 (水) ・ 10 日 (木)
- 7 会 場 松山市民会館 中ホール (愛媛県松山市堀之内)
- 8 参加対象 全国国際教育研究協議会加盟校の教職員及び生徒
第 60 回全国国際教育研究大会愛媛大会に出場する生徒・引率者及び保護者
国際教育(開発教育・国際理解教育等)に関心のある教職員・生徒・保護者等
国際教育(開発教育・国際理解教育等)に関わる関係団体・企業等の担当者等
国際ボランティア等に関係する教職員・生徒・担当者等
- 9 参加人数 申込数 376 名 (高校生・181 名 教員等 173 名 一般・保護者等 22 名)
オンライン参加アカウント数 198 (実際の視聴人数は申込数に近いと考えられる)

10 大会日程

< 1日目 > 令和5年8月9日 (水)

9:30 ~ 10:00	・受付
10:00 ~ 10:30	・開会行事 主催者挨拶 共催者挨拶 来賓挨拶 来賓紹介 功労者表彰 前愛媛県高等学校国際教育研究協議会会長 松永 泰 様 全国国際教育研究協議会 全国理 藤田 博雅 様 石川県高等学校国際教育研究協議会事務局長 助田 清華 様
10:50 ~ 12:00	・第43 高校生英語弁論大会 諸連絡
12:00 ~ 13:00	・昼食 / 休憩
13:00 ~ 14:00	・第23 回高校生日本語弁論大会
14:20 ~ 15:40	・記念講演 演題『後から来る人たちのために』 講師 高山 良二 先生 (認定NPO 法人 国際地雷処理・地域復興支援の会 (IMCCD) 理事長兼現地代表)
16:00 ~ 17:00	・講評 弁論大会審査結果発表 表彰式 記念撮影

17:10 ~ 17:50 ・全国事務局長会議

18:30 ~ 20:30 ・教育懇談会 ANA クラウンプラザホテル松山 本館4F ルビールーム

< 2日目 > 令和5年8月10日 (木)

8:30 ~ 9:00	・受付
9:00 ~ 10:15	・第12 回国際理解・国際協力に関する生徒研究発表会
10:30 ~ 11:45	・生徒：交流会 / ワークショップ 『世界がもし100人の村だったら』 ファシリテーター： 独立行政法人国際協力機構 四国センター 愛媛県国際協力推進員 大石 紗己 氏 高知県国際協力推進員 和田 安史 氏
	・教員：教員による研究発表 石川県立小松高等学校 福岡 輝樹 先生 高知県立高知農業高等学校 鍵本 佐知 先生 高橋 一史 先生 愛媛大学附属属高等学校 上床 孝樹 先生 愛媛県立松山東高等学校 森 恵美子 先生 武智 豊 先生
12:00 ~ 12:20	・講評 生徒研究発表審査結果発表 表彰式
12:20 ~ 12:40	・閉会行事 主催者挨拶 次期開催県挨拶 諸連絡 記念撮影

なお、台風6号が大会開催日に四国地方を直撃することが予想され、県内外の参加者の安全を確保し、大会を開催することが難しいと判断し、8月4日(金)、オンライン形式での開催に変更することを決定した。Zoomによるオンライン開催の日程は以下の通り。

令和5年8月9日(水) 接続確認

9:00 ~ 11:00 ・接続確認
13:00 ~ 15:00 ・接続確認

令和5年8月10日(木) Zoomによるオンライン開催

8:30 ~ ・入室開始
9:00 ~ 9:10 ・開会行事(大会会長挨拶・全国国際研会長挨拶)
9:20 ~ 10:40 ・英語弁論大会
11:00 ~ 12:00 ・日本語弁論大会
(昼休憩)
13:00 ~ 14:30 ・生徒研究発表(質疑応答なし)
14:40 ~ 14:50 ・閉会行事
15:00 ~ 15:20 ・英語弁論審査会
15:30 ~ 15:50 ・日本語弁論審査会
16:00 ~ 16:20 ・研究発表審査会
※日程の都合上、記念講演、教員研究発表、生徒交流・ワークショップは中止

11 来賓・役員一覧(敬称略・順不同)

(1) 来賓

日下部英紀	外務省国際協力局 審議官
富高 雅代	文部科学省初等中等教育局情報教育・外国語教育課 教科調査官 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官
田所 竜二	愛媛県教育委員会 教育長
山村 直史	独立行政法人国際協力機構 四国センター所長
樋田奈奈美	一般財団法人日本国際協力センター(JICE) 関西支所長
矢田部正照	特定非営利活動法人全国国際教育協会会長
高田 幸一	特定非営利活動法人全国国際教育協会副会長
斎藤 宏	特定非営利活動法人全国国際教育協会理事
幸田 雅夫	特定非営利活動法人全国国際教育協会事務局長
吉岡 稔	愛媛県海外協会事務局長
川本 昌宏	愛媛県教育委員会事務局指導部高校教育課長
池田 哲也	愛媛県高等学校長協会会長
濱田 昌秀	愛媛県観光スポーツ文化部観光交流局観光国際課国際交流グループ担当係長
中村 正直	愛媛県教育委員会事務局指導部高校教育課教育指導グループ指導主事担当係長
森 洋明	愛媛県教育委員会事務局指導部高校教育課教育指導グループ指導主事
林 大樹	愛媛県総合教育センター教育開発部企画開発室指導主事
高村 謙介	愛媛県観光スポーツ文化部観光交流局観光国際課国際交流グループ主任
アダム・ハースト	愛媛県立松山南高等学校 ALT
松永 泰	前愛媛県高等学校国際教育研究協議会会長

(2) 役員

大会顧問	中里真一	全国国際教育研究協議会会長 東京都立北豊島工科高等学校長
大会会長	福岡恵里子	愛媛県高等学校国際教育研究協議会会長 愛媛県立伊予農業高等学校長
大会副会長	日野右子	愛媛県高等学校国際教育研究協議会副会長 愛媛県立新居浜西高等学校長
	石崎一水	愛媛県高等学校国際教育研究協議会副会長 愛媛県立今治北高等学校長
大会参与	三好浩行	愛媛県高等学校国際教育研究協議会監事 愛媛県立大洲高等学校長
	重松聖二	愛媛県高等学校国際教育研究協議会監事 愛媛県立宇和島東高等学校長
大会運営理事	高崎雅人	香川県高等学校教育研究会国際教育部会会長 高松第一高等学校長
	向井佳子	国高等学校国際教育研究協議会会長 徳島県高等学校国際教育研究協議会会長 徳島県立名西高等学校長
	山田憲昭	高知県高等学校国際教育研究協議会会長 高知県立高知東高等学校長
大会運営委員	餅真由美	香川県高等学校教育研究会国際教育部会事務局長 高松第一高等学校教諭
	酒井理恵	四国高等学校国際教育研究協議会事務局長 徳島県高等学校国際教育研究協議会事務局長 徳島県立名西高等学校教諭
	橋田行弘	高知県高等学校国際教育研究協議会事務局長 高知県立高知東高等学校教諭
大会実行委員	田中貴子	愛媛県立今治西高等学校教諭
	井門敬宏	愛媛県立今治北高等学校教諭
	森恵美子	愛媛県立松山東高等学校教諭
	河野省治	愛媛県立松山南高等学校教諭
	永山恭子	愛媛県立松山中央高等学校教諭
	二神美智子	愛媛県立東温高等学校教諭
	十川隆行	愛媛県立上浮穴高等学校教諭
	竹崎仁思	愛媛県立松山西中等教育学校教諭
大会事務局長	河野千秋	愛媛県高等学校国際教育研究協議会事務局長 愛媛県立伊予農業高等学校教諭
大会事務局	高石貞彦	愛媛県立伊予農業高等学校教頭
	岡本繁幸	愛媛県立伊予農業高等学校教諭
	伊藤宏哉	愛媛県立伊予農業高等学校教諭
	山田裕二	愛媛県立伊予農業高等学校教諭
	杉山宏之	愛媛県立伊予農業高等学校教諭
	森田淳子	愛媛県立伊予農業高等学校教諭
	宇都宮愛子	愛媛県立伊予農業高等学校教諭
	開田明	愛媛県立伊予農業高等学校実習助手
	竹岡由加	愛媛県立伊予農業高等学校実習助手

12 審査結果

【第43回高校生英語弁論大会】

賞名	学校名	発表者名
外務大臣賞	東京都立小石川中等教育学校	片倉 宏海
文部科学大臣賞	長崎県立佐世保北高等学校	高 旻惺
国際協力機構理事長賞	佐野日本大学高等学校	高橋こころ
国際交流基金理事長賞	徳島県立徳島北高等学校	潮 聡太
日本国際協力センター理事長賞	済美平成中等教育学校	鳥羽さとみ
全国国際教育研究協議会会長賞	島根県立松江北高等学校	若村 杏
全国国際教育研究協議会会長賞	岡山理科大学附属高等学校	中山 翔斗
全国国際教育研究協議会会長賞	和歌山県立日高高等学校	寺井 巴菜
全国国際教育研究協議会会長賞	愛知県立岡崎西高等学校	赤羽 晏奈
全国国際教育研究協議会会長賞	八戸聖ウルスラ学院高等学校	浅坂 凜々

【第23回高校生日本語弁論大会】

賞名	学校名	発表者名
外務大臣賞	仙台育英学園高等学校	カナヌラック ピアンジャイ
文部科学大臣賞	宮崎学園中学校・高等学校	朴 仁敬
国際協力機構理事長賞	翔凜高等学校	関 越童
国際交流基金理事長賞	東海大附属高輪台高等学校	アフマド アルシェッヒ
日本国際協力センター理事長賞	広島県立瀬戸田高等学校	岡本 アンシャリー
全国国際教育研究協議会会長賞	愛媛県立松山東高等学校	ブルヤス ルシール
全国国際教育研究協議会会長賞	愛媛県立松山東高等学校	ブンニサー パーニパトムポン

【第12回高校生国際理解・国際教育に関する研究発表会】

賞名	学校名	団体名
国際協力機構四国センター所長賞	高知商業高等学校	生徒会執行部
国際交流基金賞	愛媛県立東温高等学校	国際理解研究同好会
日本国際協力センター賞	東京都立五日市高等学校	ESS 国際交流部
全国国際教育研究協議会賞	宮崎県立宮崎南高等学校	ユネスコ部
国際理解・国際協力奨励賞	和歌山県立日高高等学校	ミャンマーとつながりたい!

第43回 高校生英語弁論大会 開催要項

- 1 目的 将来を担う高校生が、国際理解、国際交流、国際協力、国際ボランティア活動などに関する主張を英語で発表することにより国際教育への興味・関心を高めるとともに国際感覚豊かな高校生の育成を目指すことを目的とする。
- 2 日時 令和5年8月9日(水)(大会第1日)
- 3 会場 松山市民会館 中ホール(愛媛県松山市堀之内) TEL 089-931-8181
- 4 大会規定
 - (1) 弁論内容
弁論内容は、国際理解・国際交流・国際協力・国際ボランティア活動等に関するもの。演題は自由。高校生としての主張を含み、未発表原稿であること。国際協力、国際交流などに関する生徒自身の体験(授業や部活動などで学んだことや主体的に調査研究した事柄も含む)を通じて考えたことや、地球環境や世界平和などに関して自分の考えを英語で弁論することが望ましい。在外経験や留学体験のある生徒は、その経験や感想にとどまらず、自分の経験と諸問題などと関連させた弁論を行うことが望ましい。
 - (2) 参加資格(以下のすべての条件を満たしていること)
 - 各都道府県の国際教育研究協議会に加盟する高等学校及び中等教育学校の生徒
 - 各都道府県の国際教育研究協議会及び各ブロックにおける選考会を経て選出された生徒
 - 英語を母語としない生徒。または日常生活で英語を使用していない生徒。在外経験は特に問わない。
 - (3) 参加者
各ブロックの代表1名(関東甲信越静地区は2名)及び開催地区の代表1名計9名。
ただし欠員が生じた場合は、各ブロックの次点など大会事務局で調整する。
 - (4) 弁論時間
4分30秒以上、5分以内であること。ただし、時間に満たない場合および時間を超過した場合には減点の対象となる。
 - (5) 発表方法
 - 小道具は使用せず、ジェスチャーや声などを使って工夫するものとする。
 - 発表時には、原稿を持ち込まないこととする。
 - 原則として、発表内容は提出済の発表原稿と同一内容とする。
 - (6) 審査内容 次の項目を総合して審査する。
【論旨70点】トピックの選択(10点)・文章構成(20点)・内容の独創性(20点)・説得力(20点)
【態度15点】姿勢(5点)・視線(5点)・熱意(5点)
【音声15点】声の大きさ(5点)・発音(5点)・流暢さ、抑揚、リズム(5点)
 - (7) 表彰

外務大臣賞	(1名)
文部科学大臣賞	(1名)
国際協力機構理事長賞	(1名)
国際交流基金理事長賞	(1名)
日本国際協力センター理事長賞	(1名)
全国国際教育研究協議会会長賞	(若干名)
 - (8) 審査員

外務省	日下部英紀 様
文部科学省	富高 雅代 様
独立行政法人国際協力機構(JICA)	山村 直史 様
一般財団法人日本国際協力センター(JICE)	樋田奈奈美 様
愛媛県教育委員会	中村 正直 様
愛媛県立松山南高等学校	アダム・ハースト 様

第23回 高校生日本語弁論大会 開催要項

- 1 目的 将来を担う高校生が、国際理解、国際交流、国際協力、国際ボランティア活動などに
関する主張を日本語で発表することにより国際教育への興味・関心を高めるとともに
国際感覚豊かな高校生の育成を目指すことを目的とする。
- 2 日時 令和5年8月9日(水) 大会第1日
- 3 会場 松山市民会館 中ホール(愛媛県松山市堀之内) TEL 089-931-8181
- 4 大会規定
 - (1) 弁論内容
弁論内容は、国際理解、国際協力、異文化理解、多文化共生に関すること。演題は自由。高校
生としての主張を含み、未発表原稿であること。単なる感想や異文化体験でなく、本人の体験を
通して、態度や行動に変容があり、多文化共生のための国際相互理解を深める視点や地球的な
視点で述べられている弁論が望ましい。
 - (2) 参加資格(以下のすべての条件を満たしていること)
 - 各都道府県の国際教育研究協議会に加盟する高等学校及び中等教育学校の生徒または
留学生
 - 各都道府県の国際教育研究協議会及び各ブロックにおける選考会を経て選出された生徒
 - 加盟校に在籍する外国籍の生徒または日本語を母語としない生徒または日常生活で日本語
を使用していない生徒。在日期間が8年以内の生徒。
 - (3) 参加者
各ブロックの代表1名(関東甲信越静地区は2名)及び開催地区の代表1名計9名
ただし欠員が生じた場合は、各ブロックの次点など大会事務局で調整する。
 - (4) 弁論時間
4分30秒以上、5分以内であること。ただし、時間に満たない場合および時間を超過した場
合には減点の対象となる。
 - (5) 発表方法
 - 小道具は使用せず、ジェスチャーや声などを使って工夫するものとする。
 - 発表時の原稿の持ち込みは問わない。
 - 原則として、発表内容は提出済の発表原稿と同一内容とする。
 - (6) 審査内容 次の項目を総合して審査する。
【論旨70点】 トピックの選択(10点)・文章構成(20点)・内容の独創性(20点)・説得力(20点)
【態度15点】 姿勢(5点)・視線(5点)・熱意(5点)
【音声15点】 声の大きさ(5点)・発音(5点)・流暢さ、抑揚、リズム(5点)
 - (7) 表彰
 - 外務大臣賞 (1名)
 - 文部科学大臣賞 (1名)
 - 国際協力機構理事長賞 (1名)
 - 国際交流基金理事長賞 (1名)
 - 日本国際協力センター理事長賞 (1名)
 - 全国国際教育研究協議会会長賞 (若干名)
 - (8) 審査員
 - 外務省 日下部英紀 様
 - 文部科学省 富高 雅代 様
 - 独立行政法人国際協力機構(JICA) 山村 直史 様
 - 一般財団法人日本国際協力センター(JICE) 樋田奈奈美 様
 - 愛媛県教育委員会 鎌田 千代 様

第12回高校生国際理解・国際協力に関する研究発表会 開催要項

- 1 目的 高校生の国際理解・国際協力・国際ボランティア等の活動報告または研究発表とする。各活動の振り返り・まとめの場とするとともに、多くの人に活動を知ってもらい、国際理解・国際協力・国際ボランティアの連携・発展・活性化を目指す。
- 2 日程 令和5年8月10日（木）（大会第2日）
- 3 会場 松山市民会館 中ホール（愛媛県松山市堀之内） TEL 089-931-8181
- 4 大会規定
 - (1) 発表内容

高校生の国際理解・国際協力・国際ボランティア等に関する内容で、日本語による活動報告または研究発表とする。視聴覚機器等を使用して8分以内で発表した後、発表内容に関する5分程度の質疑応答がある。発表生徒は各校1～6名程度とする。個人の研究発表も可とする。
 - (2) 参加資格

各都道府県の国際教育研究協議会に加盟する高等学校及び中等教育学校の生徒
 - (3) 参加者

原則公募で行う。発表団体数は6校程度。
 - (4) 発表時間

8分以内であること。ただし、時間を超過した場合には減点の対象とする。
 - (5) 審査内容

【発表の内容70点】	動機・問題発見（10点） 研究のプロセス（10点） 国際的視野（10点） まとめ・今後の課題（10点）	継続性（10点） 問題意識・創意工夫（10点） 地域環境・地域創生（10点）
【発表の仕方30点】	発表準備と機器活用（10点） 質疑への応答（10点）	話し方や態度（10点）
 - (6) 表彰

国際協力機構国内機関長賞	（1名）
国際交流基金賞	（1名）
日本国際協力センター賞	（1名）
全国国際教育研究協議会賞	（1名）
国際理解・国際協力奨励賞	（若干名）
 - (7) 審査員

独立行政法人国際協力機構(JICA)	山村 直史 様
一般財団法人日本国際協力センター(JICE)	樋田奈奈美 様
全国国際教育研究協議会	中里 真一 様
全国国際教育研究協議会	玉置 瞬 様
愛媛県教育委員会	鎌田 千代 様

第 60 回全国国際教育研究大会 愛媛大会 大会会長挨拶

愛媛県高等学校国際教育研究協議会

会長 福岡 恵里子

(愛媛県立伊予農業高等学校校長)

皆様おはようございます。愛媛大会の会長を務めます愛媛県立伊予農業高等学校校長の福岡と申します。よろしくお願いいたします。

今回の全国大会で、皆様にご愛媛に来ていただくことをとても楽しみにしておりましたが、今回台風の影響で急遽このような形で行うことになりました。現在もまだ被害の状況は続いています。九州・四国・中国地方の皆様、ぜひ安全を確保した場所から御参加くださいますようくれぐれもお願いいたします。いろいろなリスクを考え、かなり早くに決断はさせていただきましたが、それでも各方面に多大なる御迷惑をおかけしたこと、心よりお詫び申し上げます。本日のオンライン開催に関しましても、当初は全く予定しておりませんで、準備期間がわずか6日間と大変短い時間でした。しかしこの大会のために準備をしてきた生徒の皆さんの発表の場を、何とか最低限でも確保する必要性を強く感じて本日を迎えております。大会中いろいろな不具合が生じる可能性もあります。また、進行中の不手際に関しましてもぜひ、温かい目で見えていただいて、御協力いただけると有り難いです。

そして日程を変更したにもかかわらず、本日御多用の中、外務省国際協力局審議官 日下部 英紀様、文部科学省初等中等教育局教科調査官 富高 雅代様を始め多くの審査員の方々、そして御来賓の方々にもオンラインで御参加いただいております。心より感謝申し上げます。

現在の世界情勢は、とても不安定です。軍事侵攻や環境問題など一筋縄では解決することが難しい課題が山積しています。今の時代に高校生として何ができるのか、今後この地球に住む一人の人間としてどのように生きていくのが望ましいのかを、この大会を通じて考えるきっかけとしていただければ幸いです。

本大会では午前中、英語弁論大会、留学生等による日本語弁論大会、そして午後からは研究発表を予定しております。本大会のテーマは「愛顔（えがお）でつなぐ世界～持続可能な世界を目指して～」です。画面の向こうで一人でも多くの笑顔が広がっていくことを期待いたしますとともに、参加されたすべて皆様にとりまして有意義な時間となることを心よりお祈りして開会の挨拶といたします。

【第 60 回全国国際教育研究大愛媛大会 開会行事 主催者挨拶】

全国国際教育研究協議会 会長 中里 真一
(東京都立北豊島工科高等学校)

ただいま、ご紹介いただきました、全国国際教育研究協議会会長の中里真一でございます。第 60 回全国大会国際教育研究大会愛媛大会の開催にあたり、全国国際教育研究協議会を代表して、一言ご挨拶申し上げます。

今年 5 月に新型コロナウイルスが 2 類から 5 類に変わりようやくコロナ以前の日常が戻ってきています。2020 年初頭から新型コロナウイルスによってもたらされた災禍は日本のみならず世界中の人たちに大きな影響を及ぼしました。人の往来はなくなり世界中に閉塞感が蔓延しました。しかしマイナス面ではなかったと感じています。科学技術による急激な進歩・発展があった 3 年半であったとも思っています。時間や空間の距離を縮め世界との距離を急激に近くしたとも言えます。その技術発展により本日の全国大会も実施することができています。しかしその一方で改めて対面でのコミュニケーションの重要性も認識されたことも間違えありません。私たちの周りでは「テレワーク」や「オンライン会議」が当たり前になってきましたが、やはり対面で直接空気感を共有しながら仲間や友人とアクティブに議論し問題を解決していく必要性に改めて気づくことができた 3 年間であったと思います。

一昨年の長崎大会での YouTube でのオンライン開催、昨年度の関東地区合同大会での Zoom での発表という経験があり、さらにオンラインでの授業や会議に慣れてきたこともあり台風という自然災害にも急遽今回のような Zoom による緊急開催ができました。全国の皆さんが本日の愛媛大会を楽しみにそれに向けて準備をしてきたことに少しでもこたえられるように愛媛大会の事務局を中心に急な変更に対応してくれました。意見交換はできませんが全国の皆さんの声を聴きたいと思います。

第 60 回全国国際教育研究大会愛媛大会のテーマは「“愛顔”でつなぐ世界～持続可能な世界を目指して～」です。こんな時代だからこそこのテーマの「“愛顔”でつなぐ世界」を改めて考えてほしいと思います。遍路の地・慈愛溢れる愛媛での大会だからこそ“愛顔でつなぐ”ことを改めて考えたいと思います。コロナ禍前の SDG s の考え方とコロナを経ての考え方も変わってきたと思います。こんな時代だからこそできる国際交流や SDG s にかかわる諸課題について発信できればと思います。

そして皆さんにとってこの愛媛大会が、新しい国際協力、国際化を意識できる時間になってくれることを期待しています。

最後に、本大会を開催するにあたり、ご尽力を頂いた先生方、本大会会長である愛媛県高等学校国際教育研究協議会会長 愛媛県立伊予農業高等学校・福岡恵理子校長先生をはじめ、主管の愛媛県国際教育研究協議会の先生方、並びに、本大会の事務局長の愛媛県立伊予農業高等学校の河野千秋先生をはじめとした多くの先生方のご尽力で本日ここにこの大会を迎えることができましたことに感謝申し上げます。また、急な変更にもかかわらずご対応いただいた大会関係者の皆様、審査委員の皆様には深く感謝しております。さらに共催者である独立法人 国際協力機構、愛媛県教育委員会をはじめとして、外務省、文部科学省、独立行政法人国際交流基金、一般財団法人日本国際協力センターなどの諸機関や各都府県教育委員会などの多くの皆様方に対して、日ごろから本会の活動に御支援とご理解を頂いていますことに厚く御礼申し上げて、ご挨拶とさせていただきます。有難うございました。

【第 60 回全国国際教育研究大愛媛大会 開会行事 共催者挨拶】

独立行政法人国際協力機構 四国センター 所長 山村 直史

ご紹介いただきました JICA 四国所長 山村直史です。

本日、明日と、「第 59 回全国国際教育研究大会愛媛大会」が開催されますことに心からお祝いを申し上げます。また本大会の開催にあたりご尽力されました全国国際教育研究協議会の皆様に深く敬意を表します。

また、弊機構が実施しております JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテストにおいて、応募勸奨や審査員のご協力・ご支援を頂きまして、この場を借りてお礼申し上げます。

さて、世界は大きく変化しています。ウクライナをはじめ、世界各地で様々な紛争が起き、多くの死者・避難民が発生しています。この紛争は新型コロナウイルス感染症が未だ収束しない中で始まったということもあり、世界経済にも大きな打撃を与えています。また、気候変動に起因するとみられる自然災害も、世界各地で増加しています。日本でも少子高齢化・自然災害など多くの課題に直面しております。

これらの危機を乗り越えて、世界の平和と安全、そして繁栄のためには、日本だけの努力ではどうすることもできません。様々な国や人々と協調・協力して取り組んでいくことがとても重要になっています。JICA は、一人一人が将来起こりうる様々な変化に対応し、自ら考え行動する力を身につけることが今求められていると考えています。本大会含め、開発教育／国際理解教育の実践的な教育研究を実施されている全国国際教育研究協議会並びに関係者の皆様は、このような JICA と同じ問題意識を抱いていただき、共に活動ができていますと感じております。

今日明日、高校生英語弁論大会、高校生日本語弁論大会、高校生国際理解・国際協力に関する研究発表会、それぞれの大会が開催されます。本大会を契機に、高校生の皆様がますます日本や世界の課題に対する考えを深め、行動していく力を伸ばし、これからの世界を担う若者として活躍されますことをご期待申し上げます。

終わりにになりましたが、重ねまして、今日この日までに多大なるご尽力を賜りました全国国際教育研究協議会の皆様々に心から感謝を申し上げましてご挨拶とさせていただきます。本日は誠にどうぞ宜しくお願い致します。

【第60回全国国際教育研究大会愛媛大会 開会行事 来賓挨拶】

外務省国際協力局審議官 日下部英紀

第60回全国国際教育研究大会愛媛大会の開会に当たり、御挨拶を申し上げます。台風の影響でオンラインでの開催となりましたが、高校生の皆さんにとって成果を発表する貴重な場となる本大会が開催されましたことを心より喜ばしく思います。それぞれの発表者におかれては、これまで取り組んできた成果を存分に発揮していただいたことと思います。

さて今年は、2030年を達成年限とする持続可能な開発目標（SDGs）の「中間年」に当たります。本大会でも、開催趣旨に示されているとおり、世界の諸問題の解決、持続可能な世界の構築のために、高校生として何ができるのか語り合い、新たな気づきを得ることを目的の一つとしていたと承知しております。

国際社会は歴史的転換期にあり、気候変動や感染症等の地球規模課題の深刻化、自由で開かれた国際秩序への挑戦と分断リスクの深刻化、これらと連動した途上国の人道危機等、複合的危機に直面しています。危機の克服には、価値観の相違等を乗り越えた国際社会の協力が必要であり、日本が国際社会の協力を牽引していくため、開発協力の役割は一層重要なものになっています。このような状況を背景に、今年6月、国際協力のあり方の指針となる開発協力大綱が2015年以降、8年ぶりに改定されました。

世界のどこかで起きた危機は、決して「対岸の火事」ではありません。日本が、途上国の開発を含む世界の課題解決に協力することは、国際社会での日本の信頼を高め、協力しあう関係を築く上でも重要です。また、開発課題が山積する中、様々な主体がその強みを持ち寄り、解決策を共に創り出していくことが必要です。

本大会を契機に、国際協力に対する理解が促進されるとともに、国際協力への参加の後押しにつながったことを大変嬉しく思います。本大会が国際協力の仲間作りにも寄与したことを願い、私からの御挨拶といたします。

【第 60 回全国国際教育研究大愛媛大会 開会行事 来賓挨拶】

文部科学省初等中等教育局情報教育・外国語教育課 教科調査官
国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官
富高 雅代

第 60 回全国国際教育研究大会及び第 43 回高校生英語弁論大会・第 23 回高校生日本語弁論大会が開催されますことを、心からお喜び申し上げます。

本年度は、4 年ぶりの対面開催が計画されていましたが、しかしながら、台風接近に伴い、急遽、開催形式を変え、オンラインで実施されることとなりました。

参加されるみなさんが日々考え実践してきたことを発表する機会や、自分自身の体験を踏まえ考えたことを英語や日本語で伝える機会を、形式を変えても作っていただきました事務局をはじめ、多くの関係者に敬意を表します。

記念すべき第 60 回大会のテーマは「愛顔でつなぐ世界～持続可能な世界を目指して～」です。これは、本年 6 月に閣議決定されました第 4 期教育振興基本計画の大きな二つのコンセプト、「持続可能な社会の創り手の育成」と「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」にもつながります。グローバル社会における国際交流活動、例えば、海外留学や外国人留学生の受入れ、地域社会の国際化、多文化共生の機会などは、ウェルビーイングの向上に資すると考えられています。

世界中の誰もがウェルビーイングを感じられる社会について考え、どのように創っていくのか、また、それをどう持続させていくのか。この愛媛大会は、参加する高校生が、自分自身の経験や考えを語り、それらを互いに聞き合い、皆で考え、行動に移していける仲間を増やす、そのような素晴らしい大会になることと確信しております。

最後になりましたが、本大会主催の全国国際教育研究協議会、共催の独立行政法人国際協力機構並びに特定非営利活動法人全国国際教育協会、四国高等学校国際教育研究協議会、本大会の主管である愛媛県高等学校国際教育研究協議会の皆様をはじめ、本大会の開催準備・運営に御尽力くださいましたすべての皆様に感謝を申し上げまして、挨拶といたします。

英語弁論【外務大臣賞】

Still, We Won't Give Up Having a Conversation

東京都立小石川中等教育学校 5年 片倉 宏海

In the debate.

“We agree with the increase in defense spending.”

History has proven that treaties are not unchangeable. Countries have broken every treaty that has been made between them. In fact, there was such a treaty between the U.S. and the Soviet Union banning nuclear weapons. For a long time, it seemed stable, but that treaty was broken in 2019 due to Russian violation. Let me repeat it again. Treaties can be broken. Considering the changes in the circumstances around Japan, it may seem like the right decision to adapt and increase its defense spending.

The opinion stated is a part of the argument I used when I participated in an English debate for which the topic was “Should Japan increase its defense spending?” During the debate, I mentioned that it is our natural right to have the ability to defend ourselves.

Hmm, is that true? Late last year in Japan, the Japanese Cabinet made the decision to “acquire an enemy base strike capability.”

To begin with, the capability to strike enemy bases may result in minimal damage to one's own country by attacking the enemy's base when they launch an attack.

Let us analogize this situation to our school life. Imagine this together. Suppose I have a classmate who does something offensive to me. What would happen if I used my enemy base strike capability to attack the person who was intentionally bumping into me? If I got violent, I would be the one blamed, even if the person had wished to harm me. In addition, if I attacked them, they could use that as an excuse to attack me back.

How awful this situation is! We must not use enemy base strike capability. Is there any way to maintain peace on a permanent basis?

What I would like to propose now is a “conversation among citizens,” which is possible because of the youth's ability to gain an objective viewpoint through the Internet. If possible, I would like to establish a permanent UN-like organization composed of young people. Together, they would purely consider the interests of the country and the planet, just like the current UN. We raise issues and seek ways to solve them transcending national borders.

Last summer, I attended a three-week lecture at UCL, a British university. There, British, and Japanese students had the opportunity to work together to discuss solutions to eliminate food waste. I was surprised by the teamwork and positive attitude of the students, which exceeded my expectation. That active conversation completely transcended the boundaries of national borders. It showed me the possibilities of a world, even an ordinary person like me can exchange opinions with people from all over the world by making full use of the Internet.

What would happen if the people of Ukraine and Russia had a conversation regarding the current war? The anti-war voices from the people of both countries are growing louder. Now that each side has its own online environment, exchanges between each country's peoples could lead to some form of resolution.

Wars may never be eliminated, but humanity can still have a bright future ahead. We can change this world with our actions. But how? Yes, through conversation. So, I want to deliver these words to everyone, not only as the title of this speech, but also as a slogan to keep in mind no matter how tough the situation may be.

“Still, We Won't Give Up Having a Conversation.”

【要旨】

「私たちは防衛費増額に賛成だ。」英語ディベート大会にて出されたこの議題に、私は賛成の立場で挑むが、その主張は本心とは異なる。学校生活でいざこざが起こった場合に暴力を振るえばその行為が責められるように、敵基地攻撃能力は平和的解決をもたらさない。オンラインで海外の学生と食糧問題解決について話した経験から、若者の国境を越えた対話こそが、世界を変えることができると私は考える。

How To Drown Out the Noise

長崎県立佐世保北高等学校 3年 高 旻惺

When I was around 10 years old, something happened that was very shocking for me at that time. I don't usually talk about this story because it is a very delicate topic, but I believe it is something I must address. Let me explain what happened. At that time, just like it always has been, the relationship between Japan and Korea was quite bad. I grew up in a Korean household, so that topic was something I didn't want to hear about. However, one day, I found a news headline on the Internet that said a Korean man was arrested in Japan for a heist. I was hesitant to read the article, but my curiosity outweighed my reluctance, and I opened the page. What I saw there was a comment section filled with savage curses and discriminatory words against the Koreans in Japan. I mean, I understand that the man was arrested for a valid reason, but what those people in the comment section were doing was nothing more than irrational hate speech against the Korean community.

Before this, I used to think that discrimination against the Koreans was just something from the past, because I had always been surrounded by nice people who would never judge someone by their background. However, discrimination is still relevant in this society, and many people are hurt because of it. I didn't fully realize that fact until I read those comments just because I was lucky. That day, I understood what it actually meant to be a Korean in Japan.

There are many people who are fighting against discrimination. The Japanese administration has been tackling hate-speech, and various activists are trying their best to promote mutual understanding between different communities. This is something that we need to be thankful for. However, do you really think that these actions may eradicate discrimination someday? Will a peaceful world where nobody gets mistreated because of their background come true? I think we already know the answer. No matter how hard we try, there will always be those who try to attack others just to feel superior. They are never going to be silent. Even if you want to ignore them, those hateful voices will haunt you like a foul noise. You know, just like the loud noise of construction next door. You cannot completely silence it out. You need to deal with it somehow.

Then how are we supposed to deal with it? Well, there is only one solution I can think of. All we have to do is to listen to the voices of the ones who truly love us. It may sound so basic and naive, but I believe that this works pretty well. To tell the truth, I secretly used to feel inferior because of my background. I didn't want to be viewed differently from the others, and I was concerned that some people might have prejudice and look down on me because of my roots. But, true friends, they are the ones who always look at your true personality, beyond something superficial such as your nationality, looks or social status. "Man, it's so fun to be with you! You really are a smart guy!" Those words built my confidence, and I realized that I didn't need to be ashamed of myself at all. It was these words, the words from those who truly loved me, that drowned out the foul noise haunting me in my head. This is exactly what I want to share with the world. The voice that cancels out the noise.

The world is becoming border-less at a fast pace. The noise of conflicts and prejudice might be inevitable in the course of the change. But I want to build a world where everyone can be proud of themselves, regardless of their roots or skin color. People who promote hate and racism will never stop making noise, but neither will I. I will never stop speaking out loudly, with a great love, so that no one should ever be ashamed of their background. I believe that my voice—no, our voices will drown out the noise out of this world.

【要旨】

私が十歳の頃、日本では在日韓国人に対する差別が未だに続いていることを初めて知った。差別をなくすために努力をしている人たちがたくさんいる一方で、差別的な主張を行う人々がいつかこの世から完全にいなくなるだろうとは言い難い。差別に苦しむ人たちにとっての唯一の救いは、自分のことを本当に愛してくれる人たちの声だと思う。私もすべての人々が自分に誇りを持てるように、愛を以て声を上げ続けたい。

英語弁論【国際協力機構理事長賞】

Look at Me

佐野日本大学高等学校 3年 高橋 こころ

英語ペラペラでいいよね。

This is one of the many comments I hear almost every day since returning to Japan from The United States. My classmates at Sano Nichidai High School also ask many questions, like if American school life is really fun. When I get these comments, I always reply to them by briefly saying "Not so much" or "It was fun", but actually, there's something more I want to say.

Firstly, living abroad was fun but not just fun. In my case, out of the five years I spent in America, I struggled to communicate for three years. During these years, I can't recall a single day when I didn't cry at the end of the day. There were times when I couldn't even say "I need to go to the bathroom" to my teacher. Can you imagine spending every day like this when you're just 10 years old?

Secondly, you cannot 'naturally' learn another language. I know someone who had lived in America longer than I did, and returned to Japan without much improvement in her English. On the other hand, at my school, there are friends who can converse with native English-speaking teachers without ever having been abroad. What is necessary for language learning is motivation and effort.

Finally, even as a returnee, I'm not perfect in English. English classes and exams are stressful for me. I unconsciously try to fit the stereotype of returnees that my classmates have in mind, and I feel embarrassed if I can't meet their expectations.

I don't say stereotypes are all wrong. I am happy that people show interest in me because of the stereotypes such as "American schools are fun" and "returnees are proficient in English." However, I don't consider myself a "typical" returnee. There are about 60,000 Japanese children living abroad. It is literally impossible to categorize returnees into a single type. All have various countries of residence, years of stay, personalities, and abilities. If I were to give an example, it's like trying to stereotype the 50,000 high school students in Tochigi prefecture.

Stereotypes exist in society too. For instance, Japan's ban on same-sex marriage is based on the belief that marriage is only for procreation and that children can only be raised by opposite-sex couples. This narrow view closes off possibilities for marriage and parenting, disregarding those who choose not to have children or same-sex couples who can be loving parents.

Breaking free from stereotypes is really tough even at individual level. As for me, it's not easy to go from being "Takahashi, the returnee student" to just being "Takahashi, one of the classmates."

I have also been perceived through stereotypes in America, of course. Initially, they saw me as a quiet and passive Japanese person. However, by working hard and speaking up, they began to see the real me, not just someone from Japan. As a result, I made friends and built lasting relationships.

I like my classmates at Sano Nichidai. To them, I haven't expressed the thoughts that I am sharing with you here today, but maybe it's time to break out of my shell and have this conversation with my classmates too.

Everyone has fixed ideas, including me. Therefore, it is important to speak up and also ask ourselves, "Is this my idea or society's idea?" Japanese, high school students, returnees, women... stereotyping is always with us. However, by being conscious of our tendency to stereotype, we may begin to see the true nature of the person in front of us.

So through my eyes, look at me.

【要旨】

アメリカ合衆国に滞在し佐野日本大学高等学校に転入した経験から、級友に英語やアメリカの学校生活についてコメントを受けることがほぼ毎日あります。そんな時はいつも話を軽く流してしまいましたが、本当はもっと知ってもらいたいことがあります。今回のスピーチでは、帰国子女としての自分ではなく、クラスメートの一人としての自分を見てもらうために伝えたい事、をまとめました。

Beyond the Language

徳島県立徳島北高等学校 3年 潮 聡太

Do you know a man called Nigel Richards? He is the 2015 World French Scrabble Champion. For those of you who don't know what Scrabble is, it is a game in which you make as many words as you can with the given letters. There are many different rules, but basically the longer words you make, the more points you get. Having won such a competition, you would think that Richards would, of course, speak French. However, he does not speak French at all, and he only learned the words from a French dictionary in six weeks. He doesn't know what the words mean and wouldn't be able to carry out a conversation in French.

As Richards' story shows, there is a big difference between learning and using a language. Learning a language alone does not mean that you can communicate using that language or share a culture or society with those who speak it. In other words, speaking a language is a gateway to understanding other cultures.

This idea was something I learned quickly during my experience in Canada. I entered a local school in Ottawa from first to fourth grade without being able to speak or understand English. I felt confused and lost. There was a boy from Ethiopia, who would lick his hand and touch my clothes every time he saw me on the school bus. At that time, I really wanted to say "Stop" or ask "Why would you do that?", but I couldn't speak English confidently, so I held back. I knew the words "stop" and "why" at the time, but I did not know exactly what they meant, how strong the words were, or in what situations they were used, and I did not have the confidence to speak English. However, recently, I learned that spitting is an Ethiopian greeting. If I could've spoken English at that time, I would've been able to ask why he did that and exchange cross-cultural understanding.

Since then, cross-cultural understanding has been a point of interest for me. Last March, we welcomed Alif, an exchange student from Bangladesh, as a host family for a month. He has been learning English since he was little and speaks both Bangla and English. He was interested in Japanese history and culture but could not speak Japanese. We were his third host family in Japan. In that time, he told me about the struggles he had communicating in Japan, but also a lot about the history of Bangladesh and the current social and political situation. Through this, I became interested in Bangladeshi culture and society. If he or I had only learned English, and not used it, I don't think we would have had those conversations and shared a deeper understanding of our cultures with each other.

I also met a friend from Korea. When I first asked him if he was from Korea, he stressed, "I'm South Korean!" Back then, I didn't fully understand the ongoing conflict between North and South Korea. It is a perfect example of how language can reflect divides in culture and history. Before World War II, the two countries spoke the same language, and more importantly, used the language in the same way. However, over time, as the two countries have grown apart, the language has diverged. Now, North and South Korea are two very different places, with different societal and political systems. As the language has grown apart, so too has their identities and cultural understanding of one another.

These three personal experiences have made me realize how languages and cultures are profoundly connected. Language learning really happens when you put the textbook down and start utilizing it to express yourself, gain deeper appreciation of different cultures, and understand the complex power of language. For me, using English is not just a grammar and vocabulary exercise, it is a door to see the world from different perspectives. It is an opportunity for new discoveries and to go beyond the language.

【要旨】

言語は「学ぶ」だけでは不十分であり、「言語を使って外国人と交流すること」を通して初めて、その先にある文化の違いが見えてくる。幼少期の海外経験や留学生を受け入れた経験からも、言語と文化がいかに深く結びついているか、ということ学んだ。言語学習は、新しい視点から世界を見るための入り口であるとともに、言語の向こうにあるものを発見するための機会なのだ。

英語弁論【日本国際協力センター理事長賞】

Developing Our Personality

済美平成中等教育学校 5年 鳥羽さとみ

How does our personality develop? Is it influenced by your nationality? My opinion is yes. I can say it because my personality has changed by moving around the world.

I was born and raised in Ehime, Japan, until I was 10. I was a very active and friendly girl who participated in many different activities. Then I moved to Guadrajala in Mexico. My life there was very hard because I needed to learn Spanish in English even though I couldn't speak English! I was scared of myself making mistakes while talking. So I became a quiet and shy girl, from an active girl. I wished to have local friends there but I only had friends from around the world who were also not fluent in English.

After three years I moved to Saint Louis, Missouri in the U.S. I decided to try my best to have local friends, and tried hard not to care too much about making mistakes. My motto there was to "Try even if I may fail" and to talk brightly, friendly, and positively to people. I usually raised my hand to share my opinion to the class and everyone accepted my ideas.

In the U. S. there were many opportunities to express your ideas to people during classes by having a lot of presentations, debates, or projects. There are no "right" or "wrong" ideas, so I was not afraid of sharing my ideas clearly. I also participated in activities, for example, I joined the track and field club, and made friends and deepened my relationships. Thereby, I had so many local and also international friends to talk and hang out with and I felt very positive. They only said good things about each other and my self confidence increased. I loved their way of thinking and I loved their confidence. Looking at their Instagram, they post themselves taking poses like a model. They are very gorgeous. I came to think any appearance is beautiful. And I loved myself more than I used to, and I knew, the more confidence you have, the less fear you have for making mistakes.

After 2 years, I came back to Japan, and I was surprised at how negative and passive people are about themselves here. They are often talking about negative things of others. Then I became scared to express my opinion. I found that I'm influenced by someone else's opinion now. I care too much about what others think of me, or if they are talking about me in a negative way.

Everyone asks me which I like best, Japan, Mexico, or the U.S. I always answer, "Japan is the best to live in." Delicious food, clean roads, the language, all of these great things make Japan the best. Japanese people are faithful, kind and considerate to others but they have a lack of self confidence.

I think the best personality is in the middle of the U. S. and Japan. The balance between moderate confidence and objectivity is important. To make Japanese people more confident, I want to tell the teachers that there should be more opportunities to express our opinions, and you shouldn't judge them if they are right or wrong. Every idea is right so we should respect individual opinions. If there are more chances to "think" about our ideas, it would be helpful to have more confidence in ourselves. I hope that Japanese can come to be full of self confidence, which would lead us to loving ourselves and making our life happier!

【要旨】

住んでいる国や環境が性格に影響すると思いますか。私の場合は、10歳からメキシコで3年、アメリカで2年過ごした結果、性格がずいぶん変わったと実感しています。失敗を恐れるがゆえに引込み思案になったり、現地で友達を作るためによく話すようになったり、また周りの目を気にするようになったり。大切なことは自己肯定感であり、自分に自信があればあるほど失敗を恐れないということを学びました。それらは学校生活の中でも育めることだと思います。

日本語弁論【外務大臣賞】

「かなちゃん」と「ペートン」が生きる社会

仙台育英学園高等学校 2年 カナヌラック ピアンジャイ

まず始めに、「かなちゃん」と「ペートン」は、どちらも私のことです。タイ人は本名と一緒に、全員がニックネームを持っています。タイのニックネームは日本のニックネームと違って、ほとんど本名として使われています。私のニックネームは「ペートン」です。このニックネームを、日本でも本名のように使っていいのか考えたとき、日本では認められないのではないかと勝手に思った私は、日本では私の名字であるカナヌラックから「かな」というニックネームをみんなに覚えてもらおうと決めました。留学して初めて日本人のクラスメートの前に立った時、できるだけみんなに良い印象を与えたくて、自己紹介のセリフを、日本に来るまでずっと何度も繰り返して練習していました。

最初はなかなか日本人の友達の会話にもついていけないし、先生の話も聞き取れなかったし、それにクラスにも馴染めていない気がしました。そこから私は日本語の勉強はもちろん、頑張って日本のエチケットを学んだり、髪型や、服のスタイルなど、全体的な「私」のイメージを変えました。そうしてだんだん「かなちゃん」は日本の生活に慣れてきて、上手く人間関係を築けて、たくさん友達ができました。あっという間に日本人のクラスという社会の中に馴染み、目立たなくなりました。しかしその後の出来事によって、今回のことを考えるきっかけになりました。

ある日、同じタイ人の友達が教室に私を探しに来て、「すみません、留学生のペートンちゃんいますか。」と私のクラスメートに聞きました。もちろん私のタイのニックネームのことを知らないクラスメートは、「え、このクラスに留学生はいないですよ。」と答えました。意外な返事ですよ。この話を友達から聞いたわたしも結構驚きました。別の日本人の友達にこの話をしたら、「かなちゃんはさ、すっかりクラスに馴染んでるもんね。」と言われました。それを聞いた私は、嬉しい気持ちと同時に不安な気持ちが生まれました。ずっとこの日本人のクラスに溶け込みたかったのに、なぜか日本人だと思われると自分は不安になる。どうしてだろう…。もちろん、日本人と勘違いされたのは別に悪いことではないですが、不安な気持ちは、「タイ人の留学生」としての本来の私のアイデンティティが徐々に失われていることにやっと気づいたからなのかもしれません。それなら、どこまで自分を変える必要があるのでしょうか…。

よく考えてみると、社会に馴染むことと自分らしさを出すこと、この2つのバランスは非常に重要です。『郷に入れば郷に従え』ということわざが日本にもタイにもあるように、私たちは社会の中に存在する一人の人間として、環境に慣れるため、周りの迷惑にならないため、平和に暮らすため、他の人に合わせなければならないことが多くあります。しかし、周りに合わせてばかりいて「自分」を失っていくのは良くないことです。社会に馴染むことは大切ですが、馴染むために本当の「自分」を完全に变える必要はないと気づいたのは、学校生活で「かなちゃん」だけじゃなく「ペートン」も出していくことにしました。

最近では、学校で「ペートン」と呼んでくれる友達も多くなりました。もちろん今まで作り上げた「かなちゃん」のおかげで新しい立場から違う経験も味わえて、より深く日本の文化も理解できたと思います。私はこれからも、今馴染んでいる社会の中で「かなちゃんとしての自分」「ペートンとしての自分」、どちらの自分もしっかり表現し、伝えていきたいです。

最後に、みなさんにも考えてみてほしいです。みなさんは、社会に馴染むことばかりを気にするのではなく、本当の「自分」を表現できていますか？

日本語弁論【文部科学大臣賞】

人生の変曲点、未来に向かって

宮崎学園中学校・高等学校 3年 朴 仁敬

中学在学中のある日、それまで通っていた塾が嫌になりました。大学進学以外の人生は認められず、インプットするだけの学習を繰り返す授業に嫌気がさして、何か新しいことをやってみたくなりました。

それでふと日本に留学することにしました。

来日するまで知っている日本語は「こんにちは」だけでした。初めて登校した日、教室に入って、話したいことは多かったのですが、「こんにちは」とだけ言って、あとは笑って時間を消化しましたが、悔しい気持ちでいっぱいでした。でもそのとき、ある友達が私に「アンニョンハセヨ」という言葉を寄せてくれました。「アンニョンハセヨ」は韓国語で「こんにちは」という意味です。異国で緊張していた当時の私にはとても嬉しく感じました。そのあと私たちは韓国の文化や食べ物について手振り身振りで一生懸命語り合いました。その姿が面白かったのでしょうか。他のみんなが真似しだして、今、私の学校では登校すると、お互いにアンニョンハセヨという気前の良い言葉であいさつする文化ができました。

他の生徒とも話したくて、まずは日本語の勉強をやらねばと思いました。だけど人生は思った通りにはいかないものなのか、丁度コロナ禍になり、人と話すこともできず、突然島の上にポイ捨てされたかのように思うこともありました。しかし、愛の力は強いのでしょうか。その当時、気になっていた人がいて、どうしても話したいという願望ができて、言葉を覚えるために、一枚ずつ書いていた日本語の単語カードが、振り返ってみると、およそ一万枚近くになり、思はず、宮崎弁までも話すようになっていました。日本語を学んだことは、ただ単に言葉話せるようになることだけではなく、ものごとを最後まで諦めずに、自分で成し遂げたという経験となり、私の人生の見方に大きく影響しました。

何か新しい学びを求めていましたが、同時に色々な苦難もありました。日本の学校の厳しい校則や、母国とまったく異なる風習などに嫌気がさし、自分の選んだこの道が本当に正しいのか、という疑問を感じ、自分の選択を疑ったこともありました。

そんなとき、突然、私の人生の変曲点が現れました。何気なく参加した国際セミナーでの経験が、こんなにも人生を変えてくれるとは想像していませんでした。国籍の違い、さまざまな地域から参加した人々と意見を交わし、私の世界がどんどん広がって行くのを感じて興奮しました。もちろん、共感だけではありませんでした。理解しづらいこともありましたが、そんな時は、そのまま聞いて学び、色んな情報を受け入れました。共感は難しくても、理解することはできます。そんな風に、たくさんの人たちと共に生きていくことが大事だと思います。それから、面白い発見もありました。私は理系を選択しています。だからグローバルには活躍できないと思い込んできました。しかし、数学の修士課程を終えて、青年海外協力隊としてエクアドルに行き、数学教育の向上に励んでいる人の話を聞いて、理系だからグローバルに活躍できないのではなくて、どんなことだって世界に繋がっている、自分の足元は必ず世界とのつながりを持っているのだということに気が付きました。自分が頑張っている方向の中で、解決すべき課題を探して、突き進むことの大切さを学びました。

私は日本の言葉で「一期一会」が好きです。日本に来て、この言葉の意味を知りましたが、本当にその通りです。一回一回の出会いの機会を大切に心がけ、楽しみたいと思います。

人生はn次関数のようです。今から歩む道は、混乱や思い通りに行かないこともあるでしょう。しかし、そんな時も、私には新しい変曲点がきつと現れると信じています。ここまでで味わえた最高の経験を頭において、私だけのへっちゃら顔で、頑張りそのものを楽しみながら堂々と未来に向かって進みます。

日本語弁論【国際協力機構理事長賞】

私が感じた日本語の心

翔凜高等学校 2年 関 越童

皆さん、こんにちは。翔凜高等学校から参りました関 エツドウと申します。本日この場で発表させていただけることを大変光栄に思っています。私は日本語を勉強し始めてから、日本語と中国語の表現の仕方に多くの違いがあることに気が付きました。例えば、中国語では主語は欠かせない存在ですが、日本語では主語がよく省略されています。例えば、自己紹介をする際、中国語では「我是関越童。」つまり、「私はみんな えつどうです」と言います。それに対して、日本語では「私は佐藤です」というよりも「佐藤です」と言った方が自然です。自己紹介のみならず、多くの場面で「私」という主語が省略されています。協調性を重要視する日本人はあまり自分の存在を強調したがるが、自己主張を抑えた方がいいという考えが背景にあると思われる。もう一つ例として挙げられるのが、「させていただく」という言い方です。例えば、中国人は何かについて聞きたい場合は、ストレートに「お聞きしたい」と言います。分かりやすく効率がいい言い方だと思います。しかし、日本語では「聞きたい」より「聞かせていただきたい」という言い方のほうが丁寧です。「聞きたい」のは自分なのに、なぜ相手が主語になる「聞かせる」という言い方を使うのか、分かりにくかったです。しかし、実際に日本の文化に触れてみることで、私は少しずつ理解できるようになりました。自分の行為でも相手を動作主にとってくることで、相手への敬意を表します。また、学校の先生は「次に使う人のために」という指導をよくしています。町の中でも多くのところで「次に使う人のために」という貼り紙を目にします。中国人は友だちや家族、親戚にとっても親切ですが、誰なのかも分からない「次に使う人」のためにという言い方にあまり説得力を感じないです。それに対して、日本で生きる日本人は相手をよく思いやり、自身より常に相手のことを気遣います。日本語の勉強や日本での生活を通して、私はこのような素晴らしい日本文化に触れることができ、次第にももの考え方も変わってきました。些細なことでも相手の立場に立って物事を見ることができるようになりました。例えば、自慢話をする人に対して、昔の私は「そのぐらいなら誰でもできる」と思っていたかもしれませんが、今の私は「大したことではなくても、相手がそれで満足しているなら、それでもいい」と思えるようになりました。先日留学生の日本語授業で敬語の練習がありました。複雑で覚えられないという意見もありましたが、尊敬語でも謙譲語でも相手への敬意を表す言い方で、日本語の心なのだとして理解しました。私はそのような敬語をととても美しく感じ、一生懸命覚えました。こうした美しい言語に出会えてよかったと心から思いました。

あっという間に日本に留学して半年が経ちました。この長くも短くもない期間で、日本語と日本文化の勉強を通して私は人間として大きく成長したと感じております。かつて実家で両親に世話をしてもらったことを当たり前のように考えていましたが、今になって両親の立場に立って振り返ってみたら、彼らの苦勞に気付くことができました。日本に留学する中で、ものの見方や考え方が変わり、相手の立場に立って物事を考えることの大切さを学ばせてくれました。当たり前のような毎日でも、多くの人々の支えがあるからこそ存在するのだと改めて実感しています。今後も感謝の気持ちを持って前向きに留学生活を過ごし、多くの日本文化を学び、将来日本文化の素晴らしさを多くの人に伝え、社会に貢献できる人間になりたいと思います。

日本語弁論【国際交流基金理事長賞】

UAE と日本の共生について

東海大学付属高輪台高等学校 2年 アフマド アルシェッヒ

突然ですが、アラブ首長国連邦について知っていることはありますか？ 僕は、アラブ首長国連邦のアブダビから来た留学生です。日本に来て1年と2か月が経ちますが、母国で日本語を勉強したおかげで、日本での一人暮らしには慣れました。今までなかった大変さや楽しさを感じながら過ごし、今も毎日ワクワクしながら日々生活を楽しんでいます。

日本での生活で気になったことや不思議に思ったことは数多くあり、そのことを友達や先生などに聞くと笑顔で説明してくれます。日本のことになると、日本人は笑顔で話してくれるのです。「そんなにうれしいのかなあ」と最初は何回も思いました。そんなある日、担任の先生にイスラムの断食「ラマダーン」について聞かれたとき、思わず30分もしゃべってしまい、「みんな変わらず、自分の国の話になると楽しくなるのだな」と思いました。

その日から僕は、しゃべるたびにアラビア語を入れるなど、日本人にアラビア語を教えるようにしました。最初は、楽しく話すことができたのですが、話す相手が増えるたびに僕は違う面のアラブを知ってほしいと思っていたことに気づきました。「アラブ首長国連邦について知っていることはありますか？」という最初の質問を日本人にすると、みんな「アラブ首長国連邦は金持ちの国だ」または「石油国だ」と答える人ばかりです。もっとアラブ首長国連邦の文化を知ってほしいと僕はとても思います。

アラブ首長国連邦には、いろいろな文化の種類があり、時代とともに発展しながら、今では世界で必要とされている国の一つとなりました。アラブ首長国連邦には、7つの首長国がありますが、約52年前に結合した国だということを知っていましたか？ 意外だと思うかもしれませんが、この52年の間に人々は世界を渡り、砂漠の砂しかなかった国が、今では色々な建物が建てられています。3年前には、ドバイ万博・EXPO2020が開かれました。発展とともに観光者が増え、世界でも発展率の高い国と言われてきました。しかし、このような情報を知る人は数少ないと思います。

ところで、僕の国、アラブ首長国連邦の国教はイスラム教のスナナなのですが、日本にも多くのイスラム教徒がいると思います。一日5回のお祈りが行われ、神アッラーから伝えられたコーランを読むのが日常的なのですが、このことについてどれだけの人々が知っているのか不思議に思い、友達に聞いてみると、「知っているわけないでしょ」と言われました。ショックを受けました。このような細かいことを知ることで、日本が経済発展する機会が増えると思います。例えば、イスラム教徒の人には、お祈りをするための時間が必要であり、お祈りをする場所、モスクが必要なのです。また、コーランの買える施設などを作ることもつながります。僕が特に困っているご飯も豚肉や酒が入っているせいで、食べられないのです。イスラム教徒でも食べられるよう、羊肉などを使ったメニューも作ってほしいです。

アラブ首長国連邦で暮らしている日本人に「何か困ったことがありますか？」と聞くと「UAEはUAE国民のためだけの国ではなく、みんなのための国で暮らしやすい」と多くの人が言ってくれました。日本でもアラブ人が楽しく困ることなく過ごすために、アラブ首長国連邦のことをまず知ってもらい、お互いが助け合い、協力し合う必要があります。身近な学校の友達や先生、近所の人と積極的に話し、僕がアラブ首長国連邦と日本を繋ぐ最初の架け橋になりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

日本語弁論【日本国際協力センター理事長賞】

環境で人は変わる

広島県立瀬戸田高等学校 2年 岡本 アンシャリー

皆さんこんにちは。私はタイの首都バンコク近くにある国内最大規模のクメール遺跡が残る町にある全校生徒約1,200名の大規模校から、尾道市にあるレモン生産日本一の生口島にある全校生徒約350名の小規模校に、小学6年生のときに転校してきました。

タイのクラスメートの多くが小学校卒業後、海外の学校に留学することが一般的だったので、私も日本で勉強できることが決まったときは、とても嬉しくてワクワクしたのを昨日のこのように覚えています。ところが、日本に来た当時は、日本語が全く分からず大変苦労し、いろいろな場面で、言葉の壁を感じていました。しかし、近くに住む年配の男性の方がボランティアで、高校へ入学するまでの4年間、日本語の読み書きから言葉の使い方まで、ゆっくりと丁寧に教えてくださり、今では日本で生活することにほとんど不便を感じることはなくなりました。感謝の気持ちでいっぱいです。さて、タイと日本には、さまざまな文化の違いや生活様式の違いがありますが、その中の一つに「学校給食」があります。私が通っていた日本の小学校や中学校には給食がありましたが、タイの学校はいわゆる「給食」というものがありませんでした。では、生徒たちはどうやって昼食を取っているのでしょうか。実はタイの学校には、屋台風のお店が何軒も立ち並ぶ場所があり、自分の好きな料理を選んで食べることができるんです。だから日本に来て初めて給食を食べたときには、とても不思議に思いました。私が日本の給食について強く印象に残っている献立があります。それは、キノコやニンジンなどの野菜がたっぷり入ったクリームシチューというメニューです。それを口にした瞬間「味薄っ！」と思い、正直まずいと感じました。ところがその後、タイに住む兄に会いに行った際に、久しぶりにトムヤンクンやパパイヤサラダなどのタイ料理を食べた際、「味濃いつ！」と感じました。

色々調べた結果、日本食は味が薄く栄養バランスが良い一方、タイはどれも味が濃く野菜も少なめなため偏食になり、体調を崩しやすくなってしまう傾向があるようです。住む場所や環境の違いから味覚が変わるという大変貴重な経験をしました。私の母は今でもタイ料理を好んで食べていますが、私は今では日本の食事の方が口に合うようになりました。そして、もう一つ貴重な体験をしたことがあります。それは、中学校の先生との関係です。私は中学時代ある先生に苦手意識を持っていました。その先生に対してどのような態度で接したらいいのか分からず、なかなか自分から話しかけることができませんでした。しかし、高校へ入学してしばらくたった頃、中学三年生のときの担任の先生に会いたくて、友達と一緒に中学校を尋ね、廊下で立ち話をしているとき、たまたま私が苦手意識を持っていた先生が通りかかりました。そこで、勇気を出して自分から挨拶をし、当時私が抱えていた高校生活での悩みについて話をしました。私としてはほんの軽い気持ちで話をしたつもりですが、その先生は私の話を最後まで真剣に聞いてくださり、私の話を全て聞き終わった後、的確なアドバイスをしてくださりました。正直、聞き流されると思っていたのでとても驚きました。私が苦手意識を持っていた先生が、実は生徒思いのとても素晴らしい先生だということが分かった瞬間でした。今思えばその先生に対して私自身の中に「思い込み」や「決めつけ」があったのだと思います。

人と人が真剣に向き合い、本音で対話をするすることで、人に対する見方や感じ方が変わっていくという大変貴重な体験をしました。日本に来て5年。私はこの2つの貴重な体験を通して「環境で人は変わる」という大切な学びを得ることができました。「変わる」ことは私にとって、それだけ喜びや幸せが広がるということであり、私自身の成長につながると思います。

私はこれからも新しい環境に積極的に飛び込んでいき、さまざまなことにチャレンジしていきます。そして、観光的にも経済面でも友好的な関係を築いているタイと日本の橋渡し役になることが、将来の私の夢であり目標です。

【第 43 回高校生英語弁論大会 講評】

文部科学省初等中等教育局情報教育・外国語教育課 教科調査官
国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官
富高 雅代

Thank you, everyone, for your inspiring speeches. I would like to reflect on the speeches you made today.

Each speech was truly remarkable, reflecting your day-to-day learning experiences within and outside the classroom, as well as your unique international exposures. What stood out this year was the profound integration of personal experiences into your speeches. Moreover, each speech offered valuable insights into addressing various challenges, both personal and global.

While your individual experiences and perspectives varied, a common message resonated throughout: fostering a better society begins with genuine dialogue and communication. Respecting the culture behind the language, embracing diverse ways of thinking, demonstrating an understanding of diversity, and nurturing self-esteem—all emerged as foundational steps toward a more harmonious world.

Living in an era characterized by intertwining uncertainties, where predicting the future is exceptionally challenging, it becomes imperative for individuals worldwide to collaborate and coexist. This involves asking, "What can I do?" instead of saying, "I can't do this." It calls for thoughtful consideration of how we can actively engage with society and take meaningful actions.

In every winning speech from the preliminary rounds across different regions, a powerful message echoed—a commitment to addressing serious issues, a desire to act, and a dedication to improving the world from the unique perspective of high school students. I encourage you to hold onto the sentiments expressed in your speeches and persist in contributing to a better world and a brighter future.

Undoubtedly, you possess the ability to think critically, identify solutions, and contribute to positive change. I eagerly anticipate witnessing your success in all your future endeavors.

Thank you.

TOMITAKA Masayo

【第23回高校生日本語弁論大会 講評】

外務省国際協力局審議官 日下部英紀

英語弁論・日本語弁論において、皆さん素晴らしい発表をされました。
これより、日本語弁論の講評をさせていただきます。

今回の弁論大会は、国際理解・国際交流・国際協力・国際ボランティア活動等をテーマにしています。その上で、国際協力、国際交流などに関する生徒自身の体験を通じて考えたことを述べているか、地球環境や世界平和などに関して自分の考えを述べているかといった観点から審査いたしました。また、自分の経験と世界の諸問題などに関連させた弁論を行っているか、単なる感想や異文化体験でなく、本人の体験を通して、態度や行動に変容があり、多文化共生のための国際相互理解を深める視点や地球的な視点で述べられているかといった観点からも審査いたしました。

まず、どの発表者も流暢な日本語で堂々と弁論を披露されたことに、大きな感銘を受けました。また、母国とは異なる文化的・社会的環境である日本での生活の中で、自らの経験を通じて芽生えた感じ方や考え方、行動の変容について、自分自身の言葉で語られたことは、大変意義深いと感じました。

さらに、どの発表者も自分と異なる文化に寛容であるだけでなく、積極的に良いところを吸収しようと意欲に満ち溢れている姿が大変印象的でした。今後の国際協力の担い手として皆さんの存在をととても頼もしく感じました。これからも、国籍や民族等の違いがあっても、互いを理解し合い、関係を深めていこうとする姿勢を大切にしていだきたいと思います。皆さんにとって、これからの日本での生活が一層充実したものとなることを心より願っております。

研究発表【国際協力機構四国センター所長賞】

「ラオスと高知をつなぐ幸せの青いお茶」

高知商業高等学校 生徒会執行部
土居加歩 原 菜瞳 岡田 咲
橋田愛加 山崎心南 上岡優斗

1. 本研究の経緯・社会課題

(1) 高知商業生徒会のラオス学校建設活動【いつから活動が続いており、何を大切にしているか】

私たち高知商業高等学校生徒会が取り組むラオス学校建設活動は今年で30年目を迎えた。ラオス国ビエンチャン県庁と連携し、右図にあるように今までに9校の学校を建設してきた。目的は、「ラオスの子どもたちが質の高い教育を受けるために必要な環境を整えること」である。しかし、学校を建設するだけでは国際協力とは言えない。毎年8月にラオス現地の建設した学校を訪れ、地域の課題や学校の現状について調査活動を継続してきた。このように私たちは調査により各地域の課題を解決することを大切にしている。



(2) 高知が抱える社会課題【近年、どのような活動をおこなってきたのか】

コロナ禍の影響により令和2年からの3年間、ラオス現地での調査活動や交流活動は中止となっていた。その間、購入型クラウドファンディングの実施やオンラインによる交流を継続してきた。しかし、どれも持続可能な活動には繋がらず、単発的な取り組みとなっていた。そこで「ラオスと高知双方の持続可能な発展」につながる取り組みをすべきではないかと模索するようになった。そのような中、地元高知にも後継者不足という社会課題があることを知った。「両国の課題を解決できる持続的な取り組みとは何か」この思いが新たなプロジェクトをはじめのきっかけとなった。



(3) 動き出した新プロジェクト【今年、どのようなプロジェクトを計画、実行したのか】

商業（ビジネス）を学び、その力を活用し、国際協力活動を展開する。私たち高知商業生の強みはそこにある。そして1年の歳月をかけて完成した商品が右図の「さわたりラオ茶」である。この商品を活用し、私たちは今までにない新たなプロジェクトに挑戦する。それは「ラオス国内での持続的な商品流通」である。

本商品がラオス国内にて持続的に流通することができれば、ラオスの課題をラオス現地で解決することができるのではないかと考えた。しかし、そのノウハウは私たちにはない。そこで助けられたのは行政機関、日系企業、県内企業など様々なプロの方のアドバイスやご指摘だった。ラオスと高知、人と人がつながる幸せの青いお茶が両国の課題解決につながる商品になるよう私たちは挑戦する。



2. 研究の目的や解決すべき課題

(1) ラオス学校建設活動のきっかけ【なぜ、ラオスなのか】

そもそも、なぜラオスに学校建設しているのか。そのきっかけは1994年に掲載された一片の新聞記事だった。当時、ラオスには学校が3000校足りないこと、12万円で簡易な学校が建てられることなどを先輩が知った。それ以降、NGO法人「高知ラオス会」の支援のもと、私たちのラオス学校建設活動が始まった。

翌年、1995年ラオス現地へ訪問。子どもたちや地域の方々との交流を通して、ラオスの子どもたちが学校に通うことに喜びを感じていることを知った。はじめてのラオス訪問をきっかけに私達の国際協力活動は始まった。以降、校内に模擬株式会社を設立。ラオス現地での仕入活動を行い、地元高知で販売。得た利益をラオス学校建設活動に充てるというサイクルで活動してきた。



▲1994年「高知新聞朝刊」



▲模擬株式会社の活動サイクル



▲建設資金贈呈の様子(2023.5.2)

(2) 地元高知の地域課題【高知県の中山間地域が抱える課題とは】

学校建設に必要な資金は主に商品開発により獲得している。下図(左)のグローバルバウム沢渡茶は、私たち高知商業生が地元生産者、地元企業と2018年に開発した手のひらサイズのバウムクーヘンである。しかし、沢渡茶を生産する茶農家の減少とお土産需要の減少が重なり、開発した商品は生産中止となった。地元高知で一体何が起きているのか。その現状を知るため、沢渡茶を生産しているビバ沢渡岸本社長を訪問。現状について学習会を実施した。そこで、生産者の高齢化によりお茶の生産が減少しているという現状を知った。この経験から、私たちは、ラオスの課題だけでなく、地元高知の課題も解決すべきであると考えようになった。「両国が抱えるそれぞれの課題を解決するためにはどうすればよいか」これが私たちの課題設定となった。

両国がそれぞれ抱える問題点と課題設定

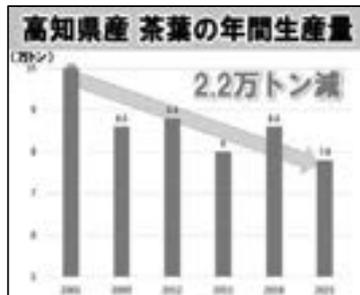
問題点	〈ラオス〉 幼稚園、その他教育施設がまだ足りていない 〈高知〉 沢渡茶の生産者・生産量が減少している
課題	〈ラオス〉 学校建設に必要な資金をどのように集めるか 〈高知〉 後継者不足を解消するためにはどうすればよいか



▲グローバルバウム沢渡茶



▲沢渡茶の学習会(ビバ沢渡)



▲年間生産量の推移(高知県産茶葉)

3. 発表者が関わった1年間の取り組み

(1) 資金調達と長期的サイクル【どのように資金を集め、どのようなサイクルで行うか】

私たちは両国の課題を解決するためにまずは「資金」をどう得るか話し合いを行った。そこで、新商品を開発し、販売活動で得た利益をラオスと高知の双方の課題解決に活用することを決めた。また、両国が抱える課題を解決するために私たちが大切にすることがある。それは「持続可能であるか」というポイントである。地元高知での取り組みとラオス現地での取り組みを持続可能なものにするためにはどうすればよいか考えた。そこで右図のサイクルにて活動を行い、得た利益を両国の課題解決に充てようという結論に至った。



(2) 企業との連携【どのような企業と商品を開発するのか】

長期的なサイクルを継続するためには「誰とどのように連携するか」が大切である。また、高校生だからという甘えではなく、社会人レベルで取り組みたい。まずは3年間の活動計画書を作成した。そして、国内外で持続的に商品を流通している沢渡茶の生産者であるビバ沢渡の岸本社長と老舗旅館「城西館」の物販事業部長である高島田様の両者に協力を依頼した。企業様からは「ビジネスは皆さんが思っている以上に難しい。思いだけではうまくいかない。だが、皆さんの本気が伝わった」とご賛同いただき、県内企業・生産者との連携が決定した。

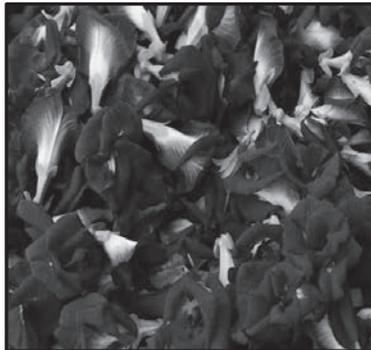


▲企業へのプレゼンテーション

商品案について、ラオスと高知の友情を象徴する商品を目指し、私たちが自ら育てた「沢渡茶」とラオス国内でも栽培されている東南アジアの花「バタフライピー」をブレンドしたお茶を開発しようと考えた。また、高知県産の柚子の輸出量が増えていることに着目し、高知県産の柚子もフレーバーとして追加した。



▲高知商業生が生産した沢渡茶



▲バタフライピー（ラオス産）



▲出典元 JETRO 高知（資料）

(3) ラオスと高知をつなぐ幸せの青いお茶【どのような商品なのか】

1年の歳月をかけて右図の商品「さわたりラオ茶」が完成した。名前の由来はラオスと高知をつなぐお茶になってほしいという願いから名付けた。バタフライピーの特徴である鮮やかなエメラルドグリーン色彩と、沢渡茶のすっきりとした味わいを引き立て、ほんのり柚子の香りがする。パッケージデザインも私たち自身が行った。真ん中の木はラオスの国花であるチャンパーの木を描き、ラオスの布でラオスの方と高知商業生を繋げることで、30年間紡いできた両国の友情を表している。



▲完成したさわたりラオ茶

4. 今後の課題と展望

(1) 持続可能な仕組みづくり【日系企業・行政機関との連携】

1 ツジコー株式会社との連携

つぎに「どうすればラオス国内で持続的な流通ができるのか」その課題を考えた。そこで注目したのが右図に示したラオスに進出した日系企業数である。近年、日本からラオス国内に進出する日系企業が急増している。そこで、日系企業と連携し、ラオス国内での流通についてそのノウハウを学ぶことができると考えた。

そこで「さわたりラオ茶」で使用したラオス産のバタフライピーをラオス国内にて生産、製造、販売しているツジコー株式会社社長に連絡をとり、ラオス現地とのオンライン会議を実施。プロジェクトの協力を依頼した。

ツジコー株式会社の社長からは、ラオス国内で商品を流通させることの難しさを学ぶとともに「ぜひ、商売の難しさも知ってほしい」とラオス現地での商品展開に向けた準備を進めることが以下の通り、決定した。

- ①ラオスを訪れる観光客をターゲットに商品に関する聞き取り調査及び商品分析を行う（友好橋付近の免税店）
- ②農園、工場の視察（障がい者支援・農福連携も学ぶ）

2 行政機関への協力

8月上旬にビエンチャン県庁と在ラオス日本大使館、JICA ラオスを訪れる。そこでラオスの情勢及び近年の経済状況、ラオス国民の慣習、文化等を学んだうえで、ラオス国内にて商品が受け入れられるためにはどうすればよいか等、聞き取り調査を行う。同様にラオスの人々は商品についてどう思うのか学校建設を行っている地域の村人、子どもたちへの聞き取り調査を行う。

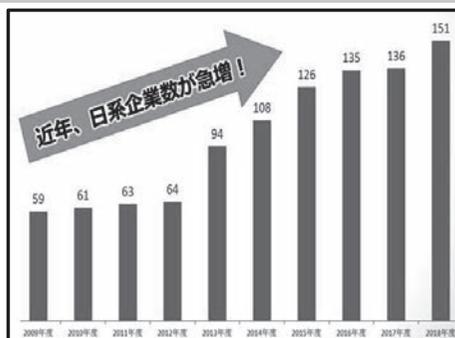
3 高知市役所との連携

本プロジェクトについて高知市役所を訪れ、松島副市長にプロジェクトを提案した。国内での流通を目指し、次の2点の実現に向けて連携することを確認した。

- ①高知市のおもてなし茶として採用していただく
- ②高知市のふるさと納税品に採用していただく

最後に

商品を流通させることが目的ではない！
さわたりラオ茶を通して、両国の課題を解決するために私たちは挑戦を続ける！



▲ラオスに進出した日系企業数の推移



▲オンライン会議の様子（2023.7.5）



▲ツジコー株式会社 社社長（左3人目）



▲松島副市長への提案（高知市役所）

研究発表【国際交流基金賞】

愛媛の海ごみ Our Challenge!

愛媛県立東温高等学校 国際理解研究同好会

渡部花奈 後藤里奈 大政琢幹 東 龍信
奥村 勝 越智大史 松田悠也 越智 龍

1 本研究の経緯・背景や背景となる社会課題

部員の渡部さんが、小学生のときに海洋環境整備船「いしづち」に乗り、海の汚れにショックを受けたが、何もできなかった経験から。その後、渡部さんの家族は、オーストラリアからジャスミンとレイチェルをホストファミリーとして受け入れ、それ以来、交流が続いている。連絡を取り合う中で、オーストラリアの二人も、同国で2019年に起きた大規模森林火災の影響による環境問題等に焦りや不安を感じてはいるが、状況を改善するための行動がとれていないこと、つまり、自分と同じ問題を抱えていることに気が付いた。高校生になった今、環境問題を目の当たりにしながら何もできていない自分自身と向き合い、今できることを、同好会の仲間とともに探し始めた。

Having friends on the other side of the world changed our environmental consciousness.

2 研究の目的や解決すべき課題

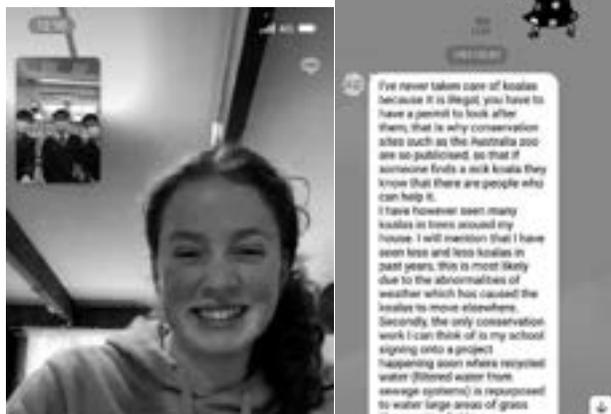
- ① 愛媛の海洋汚染、オーストラリアの森林火災について学び、できることを考え、実践する。
- ② オーストラリアの友人と環境問題について情報を共有・交換する。
- ③ 「プロジェクトマナティ」を普及する。
- ④ 「Clean up Australia」など、世界の「仕組み」から学ぶ。

3 発表者が関わった1年間の取組

- (1) 活動の時期・期間 2022年夏～現在
- (2) 活動への参加者・人数 同好会員 7名
- (3) 主な活動場所 本校図書館等
- (4) 具体的な活動・研究内容方法と成果

2022年 7月 被害状況聞き取り、意見交換

オーストラリアの二人とLINEで連絡を続け、被害状況を聞き取り、環境問題について意見交換をした。野生動物の保護活動は支援が必要なことが分かり、同好会として支援していくことにした。



オーストラリアのレイチェルとLINE電話交流

2022年 10月 文化祭にてステージ発表・募金活動

環境問題について考えたことをスピーチにまとめ、文化祭で披露し、部員が演奏するギターに合わせ、オリジナル啓発ソングも歌った。募金はWWFオーストラリアのコアラ保護へ送ることができた。2人にもLINEで報告をし、文化祭の雰囲気も動画で紹介した。活動を共有したり、お互いの悩みを伝え合ったりすることで、毎回新たな発見があり、これは私たちの活動の励みになった。



梅津寺海水浴場での自主清掃

2022年 11月中旬 自主ビーチクリーニング活動

A L T のジゼル先生と海洋汚染と私たちの生活について話し合い、松山市清掃課の協力を得て、松山市中心部に近い梅津寺海水浴場で自主清掃をした。一見、海岸はきれいだったが、よく見るとテトラポットに大量のごみが挟まっており、2時間半でゴミ袋4つがいっぱいになった。海ごみの問題は想像以上に深刻で、危機的な状況であることを感じた。同時に毎週自分たちが継続して拾い続けるのも現実的ではなく、一度や二度ゴミ掃除をしたところで解決できる

問題ではないとも感じた。中心地に近い海でこの汚れ具合であれば、その他の海岸はどうなのか。実態を知り、解決策を探るため、離島経済新聞社主催「人口500人未満以下小規模離島の海ごみ問題を考える勉強会」にオンライン参加した。



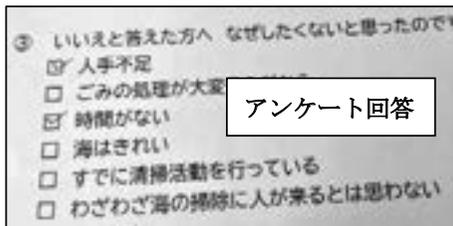
2022年 11月下旬 「離島の海ごみ問題勉強会」オンライン参加

勉強会では、3県の離島（福岡県の地島、愛媛県上島町の魚島、山口県周防大島町の浮島）の事例が紹介され、次の3つの課題が共通していた。①人手不足・高齢化 ②回収ごみの処理（島外搬出）③資金不足。特に担い手不足は深刻で、生活するのに精いっぱい、そこまで回らないという切実な声もあった。そして、これらの問題解決に挑む団体の1つとして、海ごみを掃除してほしい海辺の商店とビーチクリーニングに挑戦してみたい人を楽しくつなぐ、「プロジェクトマナティ」が紹介されていた。海を訪れた観光客は、500円で協力店より掃除セットを買い取り、ビーチクリーニングが体験できる。掃除後は協力店にごみを出して、手ぶらで帰ることができるので、手軽にいつでも誰でも参加することができる。海ごみ清掃を継続的にアウトドアレクリエーションとして観光客に提供できる素晴らしい仕組みだと感動した。四国にはまだ協力店がないので、このプロジェクトを県内に広めていくことにした。

2022年 12月～2月 協力店の呼びかけ

学校公式Instagramで協力の呼びかけをし、県内の海辺の商店やレストランに手作りのチラシを郵送した。1回目は全く反応がなく、2回目はアンケートを同封した。回収したアンケートからは、「人手不足」や「余裕がない」といった離島の事例と同じような課題がわかった。

愛媛県では難しいのか、とあきらめかけたとき、堀江町のお店から「協力できる」と返事をいただいた。



アンケート回答



学校公式Instagramでの呼びかけ

2023年 3～5月 マナティ@堀江海水浴場！

店長の伊藤さんは、オープン以来ずっと海岸のごみに悩まされておられ、私たちも堀江海水浴場の清掃を行い、ビン、缶、ペットボトル、ビニール袋、弁当殻、たばこの吸い殻、バーベキューの網、釣り針、灯油缶…海岸の膨大な量のごみに驚いた。3時間の作業で10袋を超え、ごみはまだまだあった。

私たちは、伊藤さんのごみ処理の負担が減るように、お客さんに使ってもらう「ごみ分別表」を作成した。そして地域の方にも周知できるように、チラシを作り、小学校へ送付し、周辺の商店にチラシ掲示の協力をしてもらった。愛媛のマナティは始まったばかりだが、これからも、協力店に寄り添いながら、2号店も募集し、マナティの輪を広げていきたい。



マナティ in 愛媛チラシ作り



オリジナル
紹介動画

2023年 6月～現在 動画でマナティ紹介→世界へ

店長の伊藤さんにも協力してもらい、マナティの紹介動画を作成した。動画によって、マナティを簡単に英語で紹介できるようになった。レイチェルをはじめ、ALTのジゼル先生の世界各国の友人に共有してもらった。レイチェルからは、お返しにオーストラリアで清掃活動を推進している「Clean up Australia」を紹介してもらった。この中で、私たちが特に気に入った言葉を紹介する。

“Saving the planet is a big deal.
But there is a lot we can do.
If everyone joins in together
And if we all did a little bit to help every day
We could make a real difference.

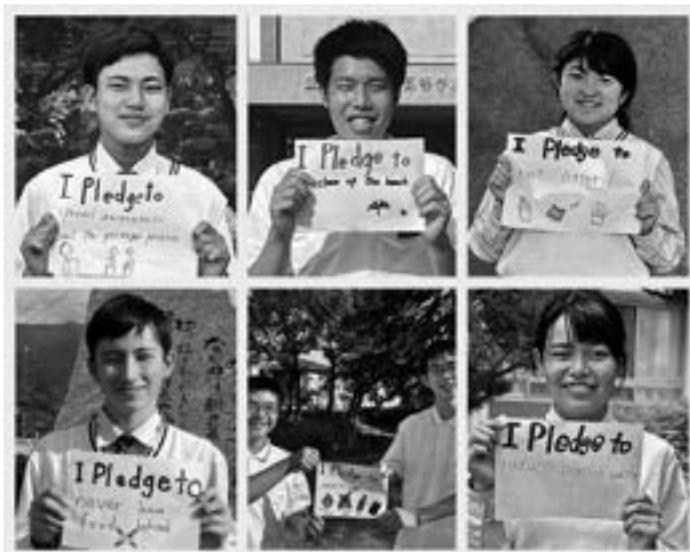
Because many small actions create big change.”

(<https://www.cleanup.org.au/about-us> より)

Country	Organization
Australia	Clean up Australia
Canada	Clean Marine Program
Jamaica	International Coastal Cleanup
Norway	Fjord CleanUP
The Phillipines	Ocean Care Movement
Sweden	Häll Sverige Rent
USA	Earth Day

各国の環境問題と人々をつなぐ団体

私たちも自分にできることを考え、「Clean up Australia」に各自の環境宣言を送った。



私たちの環境宣言 (environmental pledge)

ジゼル先生の友人達からも多くのフィードバックをいただくことができた。そして、掃除コンテストや清掃キャンペーンなど、世界中に清掃や啓発活動をイベント化し、地域や学校などたくさんの人を環境問題とつなぎ、楽しく関わ

↓マナティホームページ



私たちの取組が、あいテレビのニュースで放送されました！♪

りながら、環境を考える仕組みがたくさんあることが分かった。

そして、7月に和歌山県で開催される「世界との対話と協働 アジア・オセアニア高校生フォーラム」の環境問題の分科会会場にて意見交換を行い、マナティの紹介を行い、各国の取組について調査をする予定である。

4 今後の課題と展望

研究を通じて、オーストラリアの環境も愛媛の海も危機的な状況であると、実感した。一方で、この現状を知らない人、知っていても行動できない人も多い。プロジェクトマナティ代表の金城さんは、環境問題は、アイデア1つで解決する問題ではなく、関わる人を増やす、増やし続ける仕組みを作ることが大切とおっしゃっていた。私たちにできることは無数にある。これからもオーストラリアの友人達と励まし合いながら、各地の仕組みから学び、自分たちにできることを実践していきたい。

海ゴミ拾いを「観光」に!
Hello! 初めました! 東温高校の国際理解研究同好会です!
突然ですが「プロジェクトマナティ」をご存じですか?
この企画に参加してみませんか?
MANATII BEACH CLEANING IS FUN!
私たちがおすすめします!
これは、海沿いにある施設やお店、もしくは個人でプロジェクトの協力をしていたら、ぜひ参加して活動を広げたいです。
【マナティのやりかた】
① マナティのポスターを貼ります。
② マナティのポスターを貼る場所を指定します。
③ マナティのポスターを貼る場所を指定します。
④ マナティのポスターを貼る場所を指定します。
ごみ分別表
MANATII KaRuu 回収ルール
プロジェクトマナティにご協力いただきありがとうございます!
手袋等をつけて安全にビーチクリーニングをお楽しみください!
袋① 燃えるゴミ burnables
吸い殻 ビニール袋 紙・プラスチック 花火
袋② 分別ゴミ recyclable trash
PETボトル ビン・缶 ガラス
回収できません Please do not collect:
流木、石、砂、海藻、魚など天然のもの、タイヤTVなど大型ゴミ
その他、袋に入らないもの、危険なものはご遠慮ください。
協力店呼びかけチラシと発送作業
初期費用はかかりません!
加盟 フォローお願いします^^!
東温高校 公式 Instagram
協力店 KaRuu の店長の伊藤さんと
レイチェル
堀江海水浴場ビーチクリーニング

研究発表【日本国際協力センター賞】

「地域×世界」歌と動画で世界を繋ぐ！

東京都立五日市高等学校 ESS 国際交流部 中島 凜 小幡 凜
中井川 成人 菊地 真早斗 石原 匠 今野 剛志

1 本研究の経緯・背景や背景となる社会課題

日本の精神であり、英訳できない「もったいない」という言葉が、現在、世界で生じている課題を解決するための糸口となると考え、より多くの人に「もったいない」精神を伝え、「もったいない」行動をしてもらうべく、曲作成に取り組んだ。

2 研究の目的や解決すべき課題

研究の目的は、私達が作成した曲を通じて、環境問題や「もったいない」を自分事として捉える人を増やし、世界的な課題解決に向け、共に行動するパートナーを増やしていくことである。

「もったいないこと」や「世界の森林破壊、持続可能でない森林経営」を多くの人に身近に感じてもらわなければ、世界で生じている環境破壊や気候変動などの問題は解決することが難しいと思われる。

まずは、多くの人が身近にある「もったいないもの」に気づき、持続可能な森林経営につながるような消費をするといった行動変容がなされれば、間接的にでも、世界の森林に関わる諸問題の解決につながるのではないかと考える。

3 発表者が関わった1年間の取組

(1) 活動の時期・期間 : 2022年9月～2023年4月(現在)

(2) 活動への参加者・人数 : 3年生5人、2年生2人、1年生1人

(3) 主な活動場所

東京都立五日市高等学校・学校周辺の山や川(東京都あきる野市)・MOKKI NO MORI(東京都檜原村)・大久野保育園(東京都日の出町)

(4) 具体的な活動・研究内容

「もったいない精神」を世界に訴えかけるために、部員全員で言葉を紡ぎだす作詞作業を行い、地域のシンガーソングライターである羅久井俊介さんに作曲していただいた。曲のタイトルは「MOTTAINAI」で、昨年度の関東合同研究大会で昨年7月にレコーディングした曲を披露した。曲を聴いた審査員や保護者から、「歌が音痴である」といった辛辣な意見も頂いた。世界に発信するためには歌唱力の向上が必要不可欠だと考えた。そこで、音楽の先生の力を借り、歌の練習をして、昨年12月に部員全員で再レコーディングを行った。何度も撮り直しを行い、やっと満足いく歌が収録できた。そこで、より多くの人に届く曲とするため、音楽の先生にも協力して頂き、部員間で歌を何度も練習し、再レコーディングを行った。2023年の2月、SpotifyやiTunesでも曲の配信が開始された。配信された曲は全校生徒にも披露した。



しかし、曲だけでは世界に発信するには弱いと考え、この曲を多くの方に知って頂く為、歌に合わせたミュージックビデオの作成を始めた。公開した動画は2パターン作成した。

まず1つ目は、私たちが以前から活動のフィールドとしている MOKKI NO MORI から生まれた「森をつくる太鼓」を用いて、部員の和太鼓経験者が太鼓で曲のイントロを作成した。「森をつくる太鼓」とはこの森の間伐材を一本丸ごと用いて作られ、世界初の FSC 認証を取得した太鼓である。その太鼓演奏の様子を、地域のドローン何でも屋の田中さんの協力を得て、動画で撮影することとした。太鼓演奏には、プロの山部泰嗣さんにもゲスト出演して頂くこともでき、プロの演奏も動画に収めることができた。動画を通して、持続可能な森林経営をしている製品に付与される“FSC”のことや、私たちの曲 MOTTAINAI のコンセプトである「使い切る」ことの大切さを体現している「森をつくる太鼓」を通して、「もったいない精神」がより明確に伝わるのではないかと考えた。

このプロジェクトを実現するために、昨年 12 月に、MOKKI NO MORI で行われた「森を作る太鼓イベント」に参加し、この太鼓を制作している宮本卯之助商店の宮本芳彦社長に直談判しに行った。提案内容は、MOKKI NO MORI で「森をつくる太鼓」を使って演奏したいと思っているので太鼓を貸していただけませんか、という相談である。また、MOKKI NO MORI 代表取締役の青木亮輔さんには、この森でのドローン撮影場所の提供をお願いした。この旨を野外ミーティングで伝えたとこ、宮本社長から快諾して頂くことができた。太鼓演奏は地域のお囃子など、太鼓経験のある部員3人が演奏することになった。

太鼓演奏はイントロとエンディングで流し、歌とともに動画を流し、字幕もつけて FSC や私たちのプロジェクトについて説明する動画を作成した。

2つ目の動画は五日市高校のある地域の五日市に隣接する、日の出町大久野にある大久野保育園に協力して頂いた。リモートで園長先生に私たちが行うプロジェクトについてお話しし動画撮影に協力していただけないかとお話すると、快く承諾して下さった。後日、園児達を集めてこのプロジェクトについて、園児や保護者に発表する場を設けて下さった。歌のサビの部分に「もったいないダンス」という子供でもできる簡単でキャッチーな振り付けを園児にもらった。この振り付けは、森のシンガーソングライターである羅久井俊介さんや部員の繁がりなどで知り合ったもったいないアートアクセサリーを制作している高木美穂さんに助言を頂いて完成したものである。撮影日までに保護者の同意を得た園児と共に、私たち高校生が「もったいないダンス」を行い、動画撮影を行った。



FSC動画！



(5) 研究の成果

私達が行っている五日市高校の生徒、教員に向けて FSC マークの認知度調査を行った。生徒 70 名、教員 4 名が回答に協力してくれた。校内でのアンケート回答者への問いかけ、回答として、①FSC マークについて、何のマークであるか知っている、②FSC マークを知らない、③FSC マークについて聞いたことがあるが、何のマークであるかは知らない、という 3 つの選択肢を用意した。



↑もったいないダンス

結果は、アンケート回答者計 74 名に対し、①の回答者の割合は 6%、②は 80%、③は 14%という割合だった。この結果から私達は、校内だけの結果だけではあるが、ほとんどの人が FSC マークのことを知らず、認知度がかなり低いことに気がついた。私たちの動画をきっかけに FSC 認証のことや持続可能な森林経営、もったいないものを無駄にしないこと等のメッセージが伝わればと考えている。

今年の 2 月には、MOKKI NO MORI の野外フィールドで「森をつくる太鼓」を用いて演奏作成した曲「MOTTINAI」を地域のイベントである五市マルシェで発表する場を設けてもらい、羅久井俊介さんと来場者に向けて歌を披露した。会場でももったいないダンスを踊ってくださる人がいたり、最後に音楽サイトに繋がる QR コードを読み取ってもらう方法で曲の宣伝をし、盛り上がった。また、大型ショッピングモールである立川グランデュオでは、もったいないアートアクセサリーを作る高木美穂さんのイベント会場に参加させて頂き、部員自作の「もったいないの木」を設置

してもらった。来場者に「自分が思うもったいないとはなんですか」と問いアンケートを取り、木に付箋を貼ってもらった。「もったいない」は多義的で人によって捉え方が幅広いことに気づいた。「もったいない」という言葉に込められたメッセージは課題解決につながる精神になることを感じた。また、読売新聞や西の風新聞にも掲載していただけることになり新聞記者の方にインタビューを受けた。実際に 2023 年 7 月 5 日発行の読売新聞朝刊 (4 ページに記載) では、私たちの取り組みが大きく取り上げられた。配信した曲は配信サイト Spotify で約 2,339 回再生、東京都立五日市高校 ESS



国際交流部公式 YouTube チャンネルで、6 月 9 日に投稿された動画は約 242 回再生・視聴 (2023 年 7 月 6 日現在) されている。FSC ジャパンの HP (<https://jp.fsc.org/jp-ja/20230619>) にも私たちの動画が掲載されている。

様々な地域のイベントで曲を披露してきたが、曲を聞き興味を持ってくださり、「活動に協力したい」、「また曲を聞きたい」などの声も聞くことができた。

4 今後の課題と展望

今後は、私たちの成果物をより多くの人に発信していくことが課題である。FSC に協賛している企業の力も借りて、動画を発信してもらう場所を増やす。また、私たちの作成した曲を知ってもらう為に、地域の人に知ってもらう為に夏と秋に行われる地域のイベントでの曲披露、地域向けに五

日市高校で行う五高フェス、五日市祭りのヨルイチ、駅の前で行うマルシェ、駅のショッピングモールでの特設会場におけるライブやワークショップに出演する予定だ。また、世界中の人にこの曲を聞いてもらい、もったいないという言葉



↑ 曲のアンケート



世界に広めるために歌詞を英訳し、新たに「MOTTAINAI 英語 ver」を YouTube や Spotify などのインターネットを通じて曲を配信していくことが新たな課題だ。世界中の多くの人々が曲を聞き、環境問題を自分ごととして捉え、環境に配慮してもったいないと感じる行動をしない人、行動に移す人が1人でも多くなることを



願い、多くの人に曲を聞いてもらうことで身近なもったいないに気づくきっかけになれば良いと考えている。

13 2023年4月17日発行

SDGs @スクール

東京都立五日市高校ESS国際交流部

「もったいない」世界に発信

Vision
環境を守る歌に思い込め

Action
環境を守る歌に思い込め

Challenge
環境を守る歌に思い込め

もったいない (MOTTAINAI)
もったいない (MOTTAINAI) は、環境問題をテーマにした楽曲です。この楽曲は、環境問題を自分ごととして捉え、環境に配慮してもったいないと感じる行動をしない人、行動に移す人が1人でも多くなることを願い、多くの人に曲を聞いてもらうことで身近なもったいないに気づくきっかけになれば良いと考えています。

環境を守る歌に思い込め
環境問題を自分ごととして捉え、環境に配慮してもったいないと感じる行動をしない人、行動に移す人が1人でも多くなることを願い、多くの人に曲を聞いてもらうことで身近なもったいないに気づくきっかけになれば良いと考えています。

環境を守る歌に思い込め
環境問題を自分ごととして捉え、環境に配慮してもったいないと感じる行動をしない人、行動に移す人が1人でも多くなることを願い、多くの人に曲を聞いてもらうことで身近なもったいないに気づくきっかけになれば良いと考えています。

環境を守る歌に思い込め
環境問題を自分ごととして捉え、環境に配慮してもったいないと感じる行動をしない人、行動に移す人が1人でも多くなることを願い、多くの人に曲を聞いてもらうことで身近なもったいないに気づくきっかけになれば良いと考えています。

研究発表【全国国際教育研究協議会賞】

美しい海を守ろう ～From Aoshima and beyond, The Ocean Ties Us Together～

宮崎県立宮崎南高等学校 ユネスコ部 甲斐彩音・立川さくら・矢田朱美・河野礼愛

1 本研究の経緯・背景や背景となる社会課題

我々UNESCO部は、宮崎県高文連「国際・ボランティア」部門に所属しているが、一昨年部門主催のユネスコ研修セミナーに参加し、青島のビーチクリーンを体験した。そこで、砂浜には多くのゴミが落ちていたり漂着したりしていることが分かり、本校 UNESCO 部がビーチクリーン活動を継続していくことにした。活動を続けていく中で、ゴミのほとんどがプラスチック製であること、また、海水浴客やサーファーの方々が利用する日焼け止めが海の水質汚染に加担していることも分かった。現在、宮崎の海は水質判定では最高の AA であるが、将来海洋汚染が深刻化するかもしれない。更に、このままいくと 2050 年には海のプラスチックの量が魚の量を上回ると推定されている。

2 研究の目的や解決すべき課題

「海は世界中で繋がっている」ということを意識しながら、宮崎の海岸から自分たちにできることを実践していく。ゴミ問題については、プラスチック製のものや煙草の吸殻を海に出さないようにすることが最重要課題である。同時に目には見えない水質汚染対策にも取り組むべきだと考えている。青島は、宮崎を代表する観光地である。その美しい青島を次世代に残すための保全活動の一役を、私たちが担うべきであると考えている。更に、微力ながらも海洋ゴミ問題や海洋汚染対策に取り組むことで、青島の海、そして世界中の海を守りつつ、SDGs 14 の目標達成の一助となることを目指している。

3 発表者が関わった 1 年間の取組

- (1) **活動の時期・期間** 2020 年 7 月にビーチクリーンを経験し青島清掃を開始。2022 年 7 月～南高ユネスコ部として渚の交番の方々とビーチクリーンを継続中。イベントの主催も開始。
- (2) **活動への参加者・人数** 宮崎南高校 UNESCO 部（現在の部員数 19 名）
- (3) **主な活動場所** 青島周辺（ビーチ・渚の交番・青島神社・野島神社）
- (4) **具体的な活動・研究内容**
 1. 「海洋プラスチックゴミ問題対策」
 2. 「日焼け止めによる海洋汚染対策」
 3. 「海つなぎプロジェクト 青島×渚の交番×九州大学×南高 UNESCO 部（の連携）」の 3 つの観点において活動している。

① 海岸ビーチクリーン活動

日曜日の朝にライフセーバーの方々と清掃を行う。たばこの吸い殻・ペットボトル・劣化した発泡スチロール等のプラスチックゴミが目立つ。特に大雨や台風後は大きな漂流物（流木等）も漂着しているので、地域住民や市の職員の方々も協力して撤去する。



② 渚の交番にてイベント開催

渚の交番のスタッフやライフセーバーさんと協力してイベントを開催する。南高 UNESCO 部主催のワークショップを行ったり、沖縄の GLE 合同会社のサンゴを守る日焼け止めや、地元の生活介護支援施設の方々が作ったクッキー等を販売したりすることで青島の魅力を発信し、海洋プラスチックゴミ問題や日焼け止めによる海洋汚染から海を守る活動を PR している。



③ 日焼け止めによる海洋汚染

日焼け止めの海に与える影響を調べているうちに、海洋汚染につながる原因物質を含まない日焼け止めを作成している、沖縄のGLE合同会社代表の金城さんにたどり着いた。

日焼け止めの成分によるサンゴの大量死が多く目立った沖縄で開発された日焼け止めを販売している。「サンゴに優しい日焼け止め」

は市販に含まれているオキシベンゾンなどの紫外線吸収剤を含んでいないため、自然界にも人体にも大変優しい日焼け止めである。GLE 合同会社の協力を得て販売した。また、正規の値段より少し高く販売させて頂くことで得た資金を「青い羽募金」として日本水難救済会に寄付した。



④ 海つなぎプロジェクト 青島×渚の交番×九州大学×南高 UNESCO 部

渚の交番の提案で始まった、「海つなぎプロジェクト」に参加させていただいた。九州大学の清野教授や、地元の青島少年自然の家、野島神社、プロパーカッシュニスト谷口さん方と交流。今後、研修会、ビーチヨガや英会話教室、プロアスリートの強化合宿等を協働されるとのこと、その中で UNESCO 部が関わられることを企画することで合意。



(5) 研究の成果

- ・ビーチクリーン活動で宮崎の観光地である青島周辺をきれいにし、その環境や訪れる方々の現状を把握できている。
- ・沖縄のサンゴに優しい日焼け止めの存在を、ライフセーバーやサーファー、青島商工会の方々をはじめ、海を訪れる地元の方々や観光客に知ってもらうことで、海に与える日焼け止めの影響を周知できた。
- ・地元の方の賛同を得て、渚の交番以外にも販売場所を確保できた（野島神社）。
- ・日焼け止め販売で得た利益を日本水難救済会に寄付した。



- ・青島を訪れる方々との交流をとおして南高 UNESCO 部の活動を知って頂いたり、地元の作業所と観光客の橋渡しとなったり、地元の方々のための交流の場を提供できた。

4 今後の課題と展望

1. 定期的なビーチクリーンを行うことで、海へのゴミの流出を最小限に抑え、青島を訪れる人に海のゴミ問題を意識してもらう。またビーチクリーンをイベント参加者や、県高文連「国際・ボランティア」専門部の仲間にも呼びかけ、日曜午前中に気軽に訪れることができる「交流の場」を作ったり、更なる活動に繋がったりしていきたい。
2. 日焼け止めの販売を海開き前の早い時期から始めることで、よりたくさんの方に海への意識を高めてもらうとともに、水質維持に貢献する。また、販売場所も今後更に増やしていきたい。
3. これまでの活動で繋がった方々と協働しながら、様々なイベントを企画運営し、南高 UNESCO 部の活動を知ってもらうとともに、地元の方々同士が繋がる機会や場所を提供していく。
4. 海洋保全活動をする台湾やイギリスの高校生や教育機関と繋がり、活動を共有していきたい。

研究発表【国際理解・国際協力奨励賞】

ミャンマーと日本の相互理解促進プロジェクト！

和歌山県立日高高等学校 ミャンマーとつながりたい！ 芝田 葵依 早田 朱里

1 本研究の経緯・背景や背景となる社会課題

新型コロナウイルス感染拡大の影響で他国との学びの機会が十分になく、国際交流をしたくても機会がほとんどない中で、JENESYS 2022 ミャンマー高校生オンライン派遣プログラムの募集が学校であり、これだ！と思った。ミャンマーに関してほとんど何も知らない状態だったので、純粋に知らない国を知りたいという気持ちでこのプログラムに参加した。そこで私たちはミャンマーが置かれている状況を知った。現在、ミャンマーの社会情勢は深刻で、「何が起きているのか」「私たちは何をすることでミャンマーの助けになれるのか」を、現地の人から詳しく聞きたいと思った。また、この活動に参加したという経験を活かし、今後も様々な国際交流や地域のボランティア活動に参加する力を伸ばさせたいと考えた。

2 研究の目的や解決すべき課題

JENESYS のオンライン派遣プログラムを通して、多くのミャンマーの人とつながりを持つことができ、また外国の人と直接意見を交換するといった貴重な経験をする事ができた。これらを SNS を通して国境を越えてシェアし、社会全体がミャンマーに関心を持つような環境を形成していくことが、私たちの課題である。近年、あらゆる国でグローバル化が急速に進行し、それに適応するためには多種多様な意見を取り入れられる社会の基盤が必要である。オンラインで国際交流を行うという現代の技術を利用した方法で、円滑に外国とコミュニケーションをとり交流を深めたいと思った。ミャンマーは同じアジアの国でありながら日本人にはあまり馴染みがなく、相互理解や交流の機会、ミャンマーについての情報が少ないのではないだろうか。ミャンマーは他国に負けず劣らず素晴らしい文化や伝統や歴史を持ち、日本と共通している部分も多くある。そして、私たち日本の将来を担う若者がミャンマーから学べることは数多く存在する。そういったことも同時に SNS を通してシェアし、多様性を受け入れられる日本を実現していきたい。そして、私たちの発信する情報が少しでもミャンマーの役に立てるようにしていくことも、今後の私たちの課題である。

3 発表者が関わった1年間の取組

(1)活動の時期・期間

10月上旬～12月22日、3月15日

(本プログラム：12月8日、9日、19日、20日、22日)

(2)活動への参加者・人数

11人(当時 高校2年生：4人 高校1年生：7人)

(3)主な活動場所

学校(オンライン活動)

(4)具体的な活動・研究内容

=プレプログラム=

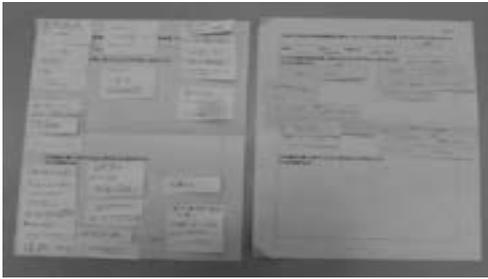
10/5	JICE の方による派遣国理解テーマ関連の講義
11/11	JICA の方による技術協力に関する講義 
12/6	学校交流のリハーサル

- ・在ミャンマー日本国大使館の方からミャンマーの政治や文化について講義を受けた。また、今後ミャンマーの人と活動するにあたって使えるミャンマー語を教えてもらった。
- ・JICA の方から技術協力プロジェクトやボランティア活動の講義を受け、先進国としての日本の役割を知る。また、ミャンマーの経済的な国際課題について深く知る。

=本プログラム=

12/8	日本国大使館表敬訪問
12/9	動画で市内視察 現地ガイドの方による質疑応答
12/19	英語で日本の魅力紹介プレゼンテーション・実演 英語でミャンマーの学生による自己紹介・ミャンマー紹介 ミャンマーの学生と質疑応答・ディスカッション
12/20	・12/19 とは異なるミャンマーの学生と英語で日本の魅力紹介プレゼンテーション、実演 ・英語でミャンマーの学生による自己紹介、ミャンマー紹介 ・ミャンマーの学生と質疑応答、ディスカッション 
12/21	12/22 に向けてのワークショップ 
12/22	プログラム中の学び、アクションプランについて日本国大使館へ報告

- ・動画にて市内観察を行いミャンマーの日常や文化を学び、ミャンマーの人から実際にお話を聞く。
- ・学校交流では、日本からは日高高校の紹介、寿司・百人一首・折り紙の説明と書道や箏の説明と実演を行う。ミャンマーからは実体験も交えたお話を伺い、質疑応答にて互いの文化をより深く知ることができた。



・ワークショップでは上の写真のように、まず日本について学んだこととミャンマーについて学んだことなどを思いつく限り書き出し、それらをどのようにして広めていくかについて考えた。また、主なアクションプランとして、5つの活動を考えた。

1. 和歌山県高校生探究活動発表会でミャンマー高校生オンライン派遣プログラムの活動を報告する
2. 地元新聞社による取材を受け、新聞に記事を掲載してもらう
3. SGH ネットワーク通信（学校ホームページ）に私たちの活動を掲載してもらう
4. 日高高校国際交流 SNS 等で情報発信
5. 生徒個人で TikTok や Instagram での情報発信



=アクションプランの実践=

- ・ JENESYS の方から紹介していただいたミャンマーの学生と電子メールを用いてコミュニケーションをとり継続的に連絡を取り合い、ミャンマーの文化や私たちが知らなかったミャンマーを代表する有名なものを、それがなぜ有名なのかという説明とともに知ることができた。
- ・自分たちで地元在住のミャンマー出身の人たちとつながりを作り、学校に来ていただき直接会った。そして、実際にどういった生活を送っているのか、なぜ日本に来るようになったのかなどを詳しく聞いた。また、LINE を交換してつながりを維持している。
- ・ Instagram で専用のアカウントを作成し、ミャンマーに関する情報、ミャンマーの人を知ってほしい日本文化について英語と日本語で発信している。
- ・地元新聞に、ミャンマー高校生オンライン派遣プログラム活動についての記事を掲載してもらった。

(5) 研究の成果

- ・できる限り多くのミャンマーの人とつながりを作り、ミャンマーに関する情報を得ることができた。
- ・ミャンマーから見た日本はどうか、日本ができることや私たちができるとはいったい何なのかについて教えてもらい、考察することができた。
- ・英語を実用する機会が多く、英語力の向上を感じた。
- ・ミャンマーの人と連絡先を交換し、つながりを維持していくことができている。

4 今後の課題と展望

私たちがミャンマーの方と直接意見を交換したときに、質問の一つとして「ミャンマーのために日本は何ができるのか」と聞いたところ、「国と国という規模が大きすぎる話で想像ができない」という返事をいただいた。つまり、国単位の助けよりも個人単位の助けが重要であるということだった。私たちが互いの国について十分に理解し、一人一人の声を聞いてつながり維持し、その上でミャンマーのために活動していく必要があると感じた。そして、交流



をしたほとんどのミャンマーの方が「ミャンマーについて知ってほしい」と言っていたのが印象的であった。私たちの研究課題の一つでもあるように、もっと多くの情報を発信し、より多くの人にミャンマーについて知ってもらい、そういった活動がミャンマーへのボランティア活動につながっていくと考えている。もちろんミャンマーに貢献するために、ボランティアで私たちでもできる募金活動などは積極的に行っていく必要がある。これらが今後の私たちの活動及び研究の課題である。

私たちは学校近くに在住しているミャンマーの方2名と直接的な関係を維持している。そして、他にもミャンマーの方が近くで生活されていると聞き、その人たちとも連絡を取り合い、御坊市内そして和歌山県内のミャンマーの人たちと交流を行っている。また、Instagramでもっと多くの情報を発信していき、私たちが物理的に会うことが困難なミャンマーの人とつながりを持ちたい。そうすることにより、より多くのミャンマーの人から意見を聞き、より意味のある活動にしていきたいと考えている。一方、ミャンマーは政治クーデターにより危ない国、怖い国という印象を持っている日本人が多いように感じる。実際私たちが直接交流したミャンマーの方も同じように感じていたそうである。私たちも JENESYS のオンライン派遣プログラムに参加するまでは、ミャンマーと言えばクーデターというイメージしか持っていなかった。しかし、今回の活動及び研究を通してミャンマーの素敵などところをたくさん知った。長い歴史に育まれた非常に興味深いこの国をもっと広く知ってもらえるように、今後も積極的に活動を続け、情報発信に尽力していきたい。そして、ミャンマーへの間接的なサポーターになれるよう頑張っていきたい。これらが私たちの今後の展望である。

【第12回高校生国際理解・国際協力に関する研究発表会 講評】

独立行政法人国際協力機構 四国センター 所長 山村 直史

受賞された高校の皆さん、おめでとうございます。まずはお祝いを申し上げます。この研究発表会は、高校生の国際理解・国際協力・国際ボランティア等の活動報告または研究発表です。私からはこの発表会の審査員長として若干の講評を申し上げます。

まず全体を通してです。今回発表された5校の皆さんは台風6号の影響によりオンラインでの発表を余儀なくされましたが、どの高校の発表もきちんと準備されており、創意工夫と情熱を感じられる素晴らしい内容でした。現状や課題についてよく勉強し、それを踏まえた研究・活動がなされ、よくまとめられていました。日頃から忙しい高校生にとって、このような研究活動を実施することは困難を伴うチャレンジであると思います。しかし、社会問題に対し、高校生として何ができるのかを考え、仲間同士で自由に語り合い、自分達で行動を起こすことは大事です。このようにチャレンジする姿勢を保ち続けられ、あらゆることに上達していくことができますので、今後とも是非頑張ってください。

研究のテーマは、高校生の国際理解・国際協力・国際ボランティア等に関する内容である限り自由です。その上で、今回我々が評価のポイントとしたのは、生徒自身が主体性または独創性を持って活動を行っているか、成果は理論的・客観的に検討されているか、その取り組みはその地域・学校ならではの活動であるか、そしてその活動を自分達の考えをしっかりとって的確に表現できているかということです。

JICA 四国所長賞を受賞された高知商業高等学校の「ラオスと高知をつなぐ幸せの青いお茶」はいずれのポイントも高いレベルで満たすものであったと思います。特に、以前からの継続性がありつつも、今年ならではの取り組みも示せたこと、また、商業高校ならではの特色と地元の特徴をよく活かした取り組みであることが高く評価されました。今後、国際貢献をしつつ地域創生を図る内外一元化の取り組みがますます重要になってきます。高校生が中心となって「ラオスと高知双方の持続可能な発展」につながる活動を、行政機関、日系企業、県内企業を巻き込みつつ実施していることに感銘を受けました。まだプロジェクトは完了していませんが、今後の活動・成果に対する期待も含め、高い評価を得ました。

JICA 賞以外にもそれぞれ地元の特徴を踏まえた独創性や面白みを感じさせてくれる発表がいくつもあり、優劣をつけるのに審査員の皆さんが苦勞をした部分もありました。多くの人に「参加したい」と思わせる力作もありました。是非また次の機会に頑張ってください。

私にとりまして、高校生の皆さんの考えや活動に触れることができたのは、大変貴重な経験になりました。この機会を与えていただいた大会役員および事務局の皆様にお礼を申し上げ、講評とさせていただきます。

令和6(2024)年度 第61回全国国際教育研究大会(宮城大会)改訂版

「平和とは何か。今だからこそ実践したい国際理解教育とは。」

～曇りなき心の月を先立てて浮世の国際社会を照らしてぞ行く～

◆会場 トークネットホール仙台（仙台市民会館）小ホール
〒980-0823
宮城県仙台市青葉区桜ヶ岡公園4-1
仙台市営バス「定禅寺通市役所前経由 交通局東北大学病院前」行き
（JR仙台駅前仙台TRビル前60番乗り場より、約15分）
「市民会館前」下車すぐ
TEL 022-262-4721

◆大会日程 ※大会日程は変更の場合もあります。

第1日 令和6年8月1日（木）

9:30～10:00 受付
10:00～10:30 開会行事
10:40～12:00 第44回高校生英語弁論大会
13:00～14:00 第23回高校生日本語弁論大会
14:20～16:00 記念講演会
16:10～17:00 講評・審査結果発表・表彰式

第2日 令和6年8月2日（金）

8:30～9:00 受付
9:00～10:10 第13回高校生国際理解・国際協力
に関する生徒研究発表会
10:30～11:30 参加生徒交流会（ワークショップ）
分科会（教員による研究発表）
11:50～12:40 講評・審査結果発表・表彰式・閉会行事
13:00～16:00 震災遺構巡り（希望者対象）

◆問合せ先

第61回全国国際教育研究大会 宮城大会事務局
（宮城県仙台東高等学校内）
担当 千葉 明彦
TEL 022-289-4140
FAX 022-289-4383
Mail chiba-a289@td.myswan.ed.jp

※「英語弁論大会」、「日本語弁論大会」、「国際理解・国際協力に関する研究発表会」に参加して、自分の意見や考えを発表しませんか。
興味のある方は各都道府県の事務局までお問い合わせください。

ESS 国際交流部における地域と連携した SDGs の課題解決につなげるプロジェクト

東京都立五日市高等学校

主任教諭 中村 俊佑

1 本校の概要

本校は、今年度で創立 76 年を迎える伝統校で地域の関係機関や企業と連携した探究活動等の経験的な学びを通して、地域社会で活躍できる人材の育成を目指している学校である。東京の最も西部にある山々に囲まれた 1 学年 4 クラスの小規模校である。以前は、普通科と商業科の併置校であったが、令和 3 年度より特色ある普通科に改編された。2 年次から、生徒の希望進路や興味関心に応じて、マネジメントコース・アウトドアコース・アドバンスコースに分かれてより専門的に学習する環境が整っている。現在、地域探究推進校・自立支援チーム継続派遣校・学力向上研究校・スキルアップ推進校・エンジョイスポーツプロジェクト指定校・海外学校間交流推進校に指定されている。

2 ESS 国際交流部 第 1 期の活動

2.1 英語同好会の発足 (2018 年)

現在、精力的に活動している ESS 国際交流部であるが、部活としては 5 年目である。筆者が 2018 年に現任校に異動し、立ち上げた部活である。

当初は、自然豊かな立地環境に恵まれた学校であるにも関わらず、地域に開かれた学校となっていなかった。また、英語が苦手な生徒が大半を示す学校で、教員間でも生徒の力を伸ばすために何が必要かを議論する場は少なく、土日も活動している部活はほとんどなかったように思う。

そんななかで、真面目に学習に取り組む生徒の自信をつけるため、毎週土曜日に「英検対策講習」として始めたのが、部活の始まりのきっかけである。また、当時の 3 年生で英語に関心がある生徒が放課後、常駐している外国人英語講師 (JET) と自主的に英会話の練習をしていた。こうした生徒に声をかけ、まずは「英語同好会」として毎週 1 回、英会話練習を行い、生徒が交代で英語日記をつけて、交流を始めた。

2.2 ESS 国際交流部の発足と地域に根差した活動の開始 (2019 年)

活動が定期的に行われるようになり、人数も揃ってきたことから、同好会から ESS 国際交流部に格上げされた。地域性豊かで外国人観光客も多く訪れる地域で求められていることは、外国人を高校生が英語でガイドし、英語マップや飲食店英語メニュー、英語看板を充実させて、外国人観光客も不自由なく楽しめる環境を作ることであると考えた。そこで、部員の 1 人に「外国人おもてなし語学ボランティア育成講座」を紹介し、夏休みの期間に受講させた。受講した生徒は、「このボランティアでの経験を活かして、地域のために活動したい」という意欲を伝えてくれた。そこで、まずは地域のためにできることは何かを部員と共に考え、まずは活動目標を以下の 3 点に定めた。

- (1) 地元の高校生が地域の魅力を英語で紹介する地域の観光マップ【英語版】の作成
- (2) 外国人向け英語 PR 動画の作成
- (3) 外国人向け飲食店メニュー【英語版】の作成

そこで、地域のニーズを探るため、生徒が地域の商店街を回り、インタビュー活動等を行った。地域マップ作成のためインタビューで五日市の地域の魅力聞き、画用紙にその魅力をキーワードで書いていただき、写真を撮った。Itsukaichi English Map は表面に地図とアイコン付きで飲食店を紹介し、裏面にはインタビューで聞いた飲食店の魅力を掲載した。JET の先生の協力を得て、分かりやすい英語表現にしていくように工夫した。

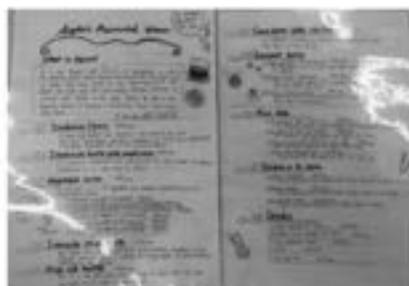
【表面】



【裏面】



また、季節ごとに五日市の魅力を伝える生徒自作の動画も作成して You-tube チャンネルにアップロードしている。インタビューの中で、実際に英語メニューの作成の依頼も受け、協力した。実際に飲食店では外国人訪問客が英語メニューを見て写真を撮ったり、注文する人がいたなど大変助かったという店主さんのお言葉も頂き、生徒も励みになったようである。こうした取り組みを外部に発表するために、東京都国際教育研究発表会に出場した。まだ活動途中の内容ではあったが、大学の先生方から「地域に根差した良い取り組み」という評価を頂き、生徒もさらに活動を発展させていきたいと意気込んでいた。



2.3 地域飲食店英語マップの改訂 (2020年1月～6月)

作成した Itsukaichi English Map を地域の飲食店や武蔵五日市駅前に置き、好評で多くの方が手に取ってくださった。そこで、あきる野市の協力も得られるというお話も聞き、カラーで本格的な MAP を作ったらどうかという提案を頂き、Ver.2 として以下のマップを作成した。

【表面】



【裏面】



アイコンの工夫や情報の整理、動画へのQRコードの記載やより見やすいように、イラストが得意な生徒の力を活かし、漫画を載せた。各店舗を訪問してもらいやすいように、おすすめポイント・開店閉店時間に情報を整理して記載した。こちらも配布範囲を拡大して市役所等にも置いていただいた。

2.4 「地域×国際交流」の活動(2020年7月～10月)

地域新聞である「まちづくり通信」への記事の寄稿やこうした地域と連携した取り組みが広まっていき、五日市に移住してこられたチェコ出身の方との交流や、アメリカのレークブラドック高校、姉妹校になった台湾竹林高校とのオンライン交流を通じて、地域の魅力を外国人にも広めていく活動を始めた。



2.5 地域観光動画の作成・大学教授や映画監督との連携(2020年7月～12月)

観光甲子園2020に出場し、「訪日観光部門」で訪日外国人に地域の魅力を伝える動画を作成した。あきる野市や秋川流域Eツーリズム推進検討会などの地域の方々との協働により準備をした。訪日外国人向けということで、字幕にも英語をつけた。3分の動画であるが、生徒が脚本を考え、オリジナルストーリーにして生徒が外国人に紹介したい地域の魅力ある場所を回って撮影を行った。ストーリーの概要としては、



五日市から都会に引っ越した高校生がふとしたことから、五日市に戻り、友人と再会。友人と街や山を歩き、懐かしい店を訪問する。その中で、「また戻ってきたいと思える街、五日市」を実感して帰るというストーリーである。高校生が魅力だと思う場所や守っていききたい大切な街の風景を動画で伝えた。この動画は観光学専門の横浜市立大学有馬貴之准教授や五日市高校OBでもある小林仁監督にも来校頂き、専門的な見地から助言を頂いた。

こうした取り組みを「第24回ボランティア・スピリット・アワード」に応募し、全国の高校生部門から「地域ブロック賞」に入賞し、全国表彰式に参加した。

また、高大連携の取り組みも行い、生徒4名が東京経済大学の「比較文化論」を科目受講生として受講し、単位を取得した。オンラインでの授業受講やレポート作成を通じて、専門的な知識の獲得と文章作成力等を向上させた。そのうちの1名は総合型選抜で合格を勝ち取り、この大学に進学した。

3 ESS国際交流部 第2期の活動

3.1 活動のキーパーソンと共に地域クリーンプロジェクトの開始(2021年4月～)

コロナ禍での活動の制約があった2020年であるが、2021年から少しずつ制約が緩和されるようになり、部活動も従来通りの活動が行えるようになってきた頃である。2020年3月に2018年入学の第一期メンバーが卒業した。私は本校に赴任して2回目の学年担任を

持つことになり、クラスや学年の生徒に ESS 国際交流部への活動への参加の声掛けを行った。まずは、これまでも何度か行ってきた地域の清掃活動イベントに体験入部の形で参加してもらい、総勢 15 名が参加した。

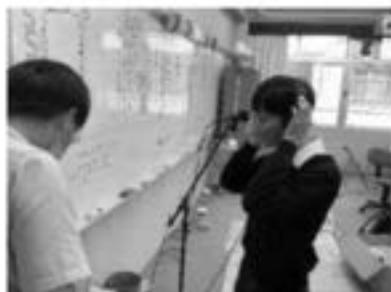
これまでは、生徒のみで行っていたこの活動だが、この時から地域在住で、地元で働かれており、環境問題に深い関心を持って活動されている羅久井俊介さんに活動に参加して頂いた。

羅久井さんは、ESS の活動を、まちづくり通信などを通じて知ってくださった方である。高校生と共に地域や社会のためになる活動を共に行いたいという熱い思いを持って声をかけてくださった方で、今では活動に欠かせない強力なパートナーとなっている。また、日本の在来種のコットン育てる・守る・つくる・暮らしの中で楽しむ、～無農薬無化学肥料・国産在来種コットン～「和綿の種 ひろがるプロジェクト」をメイドインアースの協力を得て、他校と協働してプロジェクトを開始した。校舎前のプランターを使って栽培をし、SDGs やエシカル消費、環境について和綿の栽培を通して考えるプロジェクトである。



3.2 森の音楽プロジェクト・歌の作成 (2021 年 6 月～10 月)

活動のパートナーとなった羅久井俊介さんと全国各地を回っている森のシンガーソングライターである山田証さんが活動に加わることになり、地域の魅力を伝える音楽を作ろうということになった。タイトルは「The 森」で部員が作詞作曲を行い、本格的なセットでレコーディングまで行った。作成した曲は文化祭でも披露し、50 名以上の方からアンケートに協力して頂いた。ここで 3 年生が引退をし、1 年生に活動がバトンタッチされた。



3.3 どうぶつの森アラスカ音楽プロジェクト開始 (2022 年 12 月)

羅久井さんと共に活動を行っている山田証さんとの初対面のミーティングが Zoom を利用して行われた。提案されたアラスカ音楽プロジェクトの概要を共有できた。日本の森の 6 割が人工林であり、動物が住めない場所となっていること、土壌流失などの環境問題につながっていることなどを学んだ。このプロジェクトを通して、人工林を動物の住める自然豊かな場所に変えていくことや日本の原生林を守っていくために、日本の森の魅力を映像とともに、音楽やダンスを合わせて、日本や世界に発信していくということ等の方向性を共有した。こうした活動に加わってくださる方の想いを聞き、生徒たちなりに何ができるのかを考えて実行に移していくためのプランを考えていくこととなる。



3.4 取り組みの発信 ～麗澤大学・産経新聞高校生プレゼンコンテストへの参加、第3回 FSC アワード最終審査会への出場～ (2022年12月～4月)

麗澤大学・産経新聞の高校生プレゼンコンテストに応募し、書類審査を通過することができた。このコンテストに向けた、プレゼンテーションを作っていく過程で、大学の教授陣や学生に様々な助言を頂きながら、プレゼンの仕方まで学んでいくという教育的効果も狙ったものである。テーマは「日本の“あたり前”と世界をつなげて何ができるか」であった。山田さん・羅久井さんと共に取り組む音楽プロジェクトの提案を行うことは決まっていたが、「日本的な精神」をどう世界につなげていくかに生徒は苦心していた。オンラインでのミーティングで大学の先生方から「何を伝えたいのかわからない。」等の厳しいコメントと宿題を頂いて、生徒たちは悔しい思いをしながら、生徒同士でディスカッションを重ねていた。歌を作って発信というテーマのなかにもどのようなコンセプトを入れて発信していくのか。議論を重ね、翻訳できない日本的な精神である「MOTTAINAI (もったいない)」に定めることになった。大学の先生とのミーティングを3回ほど重ねて、本番を迎えた。オンラインの発表ではあったが、当日は思わぬ「最優秀賞」を受賞することができた。60校から選ばれた8校のうちの最優秀賞に輝けたことは生徒にとって大きな自信となった。あの時の生徒の喜んでいる姿は今でも忘れられない。ここで受賞経験が活動の原動力となったことは間違いない。

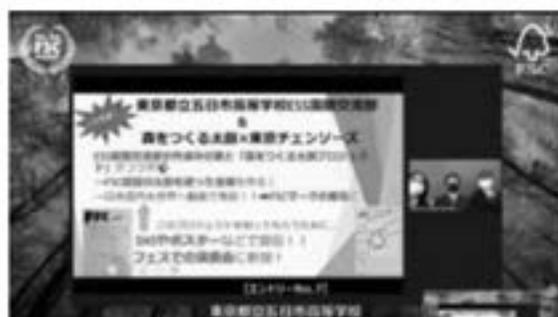


このプレゼンテーションの結果は産経新聞、東京新聞、西多摩新聞、西の風新聞でも取り上げられ、あきる野市長にも表敬訪問に伺い、活動が広まってくいきっかけにもなった。



この取り組みをさらに発展させ、企業の協賛を得るために、「第3回FSC Award」に応募し、最終審査会に、全国 97 組から 10 組の中に出選されて、最終プレゼンテーションを行った。地域の資源を活かすということで、学校近くの FSC 認証を取得している MOKKIKI NO MORI の

「もったいないもの」である間伐材で作製された和太鼓が世界初の FSC 認証を取得していることに注目してアイデアを発表した。



結果は残念ながら入賞には至らなかったが、悔しい気持ちをバネにして、実際にアクションを起こそうということになった。6月にはMOKKI NO MORIを訪問し、共同代表の青木亮輔さん・渡部由佳さんに「森をつくる太鼓×音楽プロジェクト」を生徒から提案させていただいた。青木さん、渡部さんからは「面白い提案なので、是非実現してほしい。協力していきたい」という力強いお言葉を頂くことができた。和太鼓を扱っている宮本卯之助商店さんにもこの話をし頂くことになった。



3.5 「もったいない音楽プロジェクト」の歌詞の作成・レコーディング (2022年4~6月)

日本的精神である「もったいない」は人によって定義が異なるのではないかと考え、言葉の定義を高校生で話し合ってみるとともに、生徒や教員、各種イベントでアンケート調査を行った。主に、人々の関心がある項目は、以下の3点であった。

- ①食べ残し：本当に必要なものかどうかをしっかりと考えてから購入し、苦手な食べ物を少しでもいいから挑戦してみるなど食べきる工夫をすることが大切であること
 - ②使えないと思っていたものが使えるということ：普段使えないと思って捨てていたお米のとぎ汁は、お皿に付着した油を落とすことができる
 - ③使えるものは捨てずに使いきる工夫をして再利用できるということ：私たちが普段使っている鉛筆や消しゴムなどを最後まで使いきることも大切である
- このうち、高校生が「自分事」とし、歌詞で伝えたい「もったいない精神」を話し合い、③に焦点を定めて、歌詞を作成することになった。部員間で歌詞リレーを行い、1人1人が想いを言葉にしてつないで



いく活動を行った。羅久井さん、山田さんと何度もミーティングを重ね、歌詞が完成した。

～完成した歌詞～

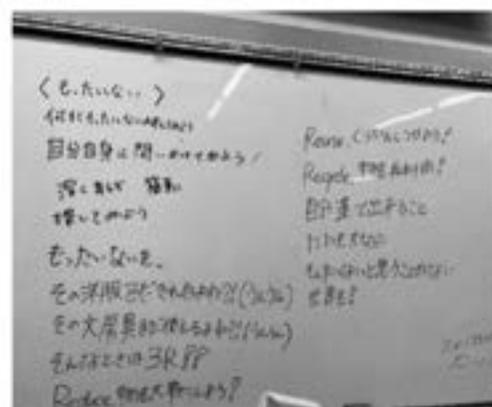
何がもったいないか、考えてみよう
自分自身に 問いかけてみよう
深く考えず 簡単に
探してみよう もったいないを
その洋服 まだ着れるよね？
その文房具 まだ使えるよね？
工夫しよう 無駄遣いしないように
Yes! Japanese Unique words
**もったいない もったいない
もったいないと思うことのない 世界を描こう
もったいない 諦めない
少しの工夫で変わるはずだから 感謝しよう
もったいない もったいない**

その雑草だって いいところあるよね
誰でもいいとこ 絶対あるよね
見つけよう いろんないいところ

Yes! Japanese Unique words

** (繰り返し)

Reduce モノを大切に使用 Reuse 繰り返し使おう Recycle モノを再利用
自分たちにできること1つ1つを大切に もったいない もったいない



この取り組みは全国国際教育研究大会（2022年8月）でも発表を行った。特に、「少しの工夫で変わるはず」というフレーズが高く評価された。1人1人が日々の生活の中での「もったいない」に気づき、「工夫する」行動をとってもらえれば、少しでも世界は良い方向に代わるはずというメッセージを込めた。レコーディングした歌詞も大会で同時に披露したが、「歌が音痴」という辛辣なコメントも頂いた。生徒は傷ついたようだが、闘志を燃やし、歌練習をして、再レコーディングをすることに決めた。悔しさをバネに改良したプロジェクト案を、東京都国際教育研究大会（2022年12月）で発表し「拓殖大学学長賞」、SDGs探究アワード2022（2023年3月）で「審査員特別賞」を受賞することができた。

3.6 地域と連携した動画PVの作成（2022年12月～2023年3月）

より多くの人に歌を聴いてもらうために、歌に合わせた動画を作成することとなった。動画は2種類作成した。

- (1) 「森を作る太鼓」を用いた本格的なPV動画の作成
- (2) 「もったいないダンス」を取り入れた生徒オリジナル動画の作成

まず、(1)については「森をつくる太鼓プロジェクト」の一環で、動画に「もったいない木」である間伐材を1本丸ごと利用した「森をつくる太鼓」を動画に使用したいという旨を MOKKI NO MORI で宮本卯之助商店の社長である宮本芳彦様や青木様、FSC 認証関係者等にプレゼンを行った。ここで、太鼓の貸し出しと動画での使用等を快諾して頂き、プロの太鼓演奏家の山部泰嗣様にも出演して頂けることとなった。本番は地域の「ドローン何でも屋」の田中栄治さんに依頼し、本格的なドローン撮影を行った。この取り組みは第4回 FSC アワードで発表し、優秀賞を獲得した。



(2)の動画は五日市高校のある地域の五日市に隣接する日の出町大久野にある大久野保育園に協力して頂いた。リモートで園長先生に私たちが行うプロジェクトについてお話しし動画撮影に協力していただけないかとお話しすると、快く承諾して下さった。歌のサビの部分に「もったいないダンス」という子供でもできる簡単にキャッチーな振り付けを園児にしてもらった。この振り付けは、森のシンガーソングライターである羅久井俊介さんや部員の繋がりなどで知り合ったもったいないアートアクセサリーを制作している高木美穂さんに助言を頂いて完成したものである。ここでの取り組みは全国国際教育研究大会(2023年8月)で発表し、「国際協力センター賞」を受賞した。



3.7 「もったいないアクション」としての「もったいないアクセサリーワークショップ」の実施(2023年1月～)

歌を発信するだけではアクションになっていないと考え、エシカル消費に深い関心を



持って活動されていてももったいないものをアクセサリーに変える活動をされている高木美穂さんにペットボトルからアクセサリーを作るワークショップをして頂いた。「少しの工夫で変わるはずだから」という歌詞の通り、校内で毎



目消費されているペットボトルを小さく切って、ペンで装飾を加え、トースターで丸めて紐を通してアクセサリーにした。「もったいないもの」が「宝物」になる経験ができた。これを広めるため、地域のフェスティバルや学校の地域向けイベント、商業施設でのSDGsワークショップ、子供向けの高校生イベント等で生徒主催のワークショップを実施した。思いのほか、幼児や小学生にも人気のワークショップで常に満席であった。この取り組みを通して、1人1人が「もったいないアクション」をしてもらうことが狙いである。生徒は子供にもわかりやすいように、子供向けの説明書なども作った。



こうした取り組みは読売新聞の朝刊全国紙（2023年7月5日）や読売SDGs新聞11月号（2023年11月）にも掲載された。



3.8 もったいないライブ・取り組みの発信（2023年3月～）

2023年のもう1つのテーマは取り組みの発信である。自分たちが作成した曲をより多くの人に知ってもらうため、地域のフェスティバル、地域向けの学校のイベント等で地域のパートナーである羅久井さんが率いるバンドの方と共に歌と踊りを発信するライブを行った。歌の間奏部分には聴衆の方にもMOTTAINAIの振り付けを行ってもらうように参加型の工夫をした。また、別の間奏部分には、生徒の聴衆へのメッセージを入れるなどの工夫を行った。



4 今後の活動（2023年8月～）

「もったいない音楽プロジェクト」に関わった3年生5名も引退となり、現在、2年生2名、1年生1名に活動のバトンが引き継がれた。これまでの地域との関わりを継続しつつ、どのような取り組みが可能かを生徒間で議論しているところである。

2年生を中心に地域振興のための観光プランを地元企業の方と連携して作成し、観光甲子園2023に応募し、全国509チームから20チームに選出され、準決勝に出場できた。このプランを応用し、現在の2年生の看護志望の生徒が自分の進路と関わる視点を加えてプランを実行していきたいと提案してくれた。よりプロジェクトを「自分ごと」にするためには、自分の興味関心と関連させていくことが重要である。SDGsの3や10にある「健康や福祉」、「平等」等に注目し、「バリアフリーな五日市を目指して～誰でも安心して五日市の魅力を楽しめる高校生観光プロジェクト～」というテーマを設定した。五日市は山や川のレジャー客といった健全者向けの観光が中心であり、高齢者や肢体不自由・視覚障がいのある方には、敬遠されてしまう地域であることに注目した。誰もが安心して安全に地域の魅力を感じ、楽しめる地域を目指し、高校生が観光ガイドをして案内していくというプランである。このプランは、今年度の「SDGs みらい甲子園」でも提案している。

5 おわりに

本校に赴任して6年が経とうとしている。国際理解教育・探究・英語教育・部活動等、様々な取り組みをしてきたが、今回はその原点であるESS国際交流部の取り組みを紹介した。いつかはこの取り組みを振り返り、書面の形で出していかなければならないと思っていたが、先延ばしとなり、このタイミングとなってしまった。

課題を抱える生徒が多く在籍する学校でこうしたプロジェクトを継続させていくことにはかなりの困難と労力を要した。生徒の可能性を拓くためには「本物の活動」をすることが重要である。学校の中だけに学びがあるのではない。活動を充実させることで、応援して下さる地域の方々や外部の大人が応援して下さるようになった。こうした関わりがプロジェクトを方向づけ、生徒を本気にさせていった。現在、この部活を設立した当初は想定していなかったプロジェクトが日々進行している。まさに、ESS国際交流部の取り組みは探究のプロセスそのものである。多様な人との協働により、課題が更新され、生徒も教員も変容していく。生徒は時にぶつかり合いながらも、最後まで諦めずに取り組んだ。高校入学時には目標がなかった生徒が、部活を通して進路目標が明確になり、中学校時代には考えられないほどの成長ができたと述べてくれた。今後も、この部活を通して困難にも挑戦し、自分の可能性に気づき、伸長させ、進路開拓できる人材を育成していきたい。

本校での国際交流活動・国際理解教育の取り組み

和歌山県立星林高等学校
国際教育部 山田 一騎

0. はじめに

本校では、国際化時代の進展に対応し、国際間の理解や交流を促進するとともに個性豊かで国際感覚を備えた人材の育成をめざして「国際交流科」が昭和63年4月に設置された。「コロナ禍」という言葉を耳にする機会が減り、これまでの国際交流活動を再開できるようになりはじめたこのタイミングで、本校での取り組みを紹介したい。

1. 姉妹校交流

【姉妹校】中華人民共和国「山東師範大学附属中学」



【交流校】タイ王国「カセサート大学附属マルチリンガルプログラム チョンブリー校」



両校とは毎年交互に訪問交流を実施している。コロナ禍以降、タイの交流校とはすでに訪問団の受け入れ・派遣ともに実施することができたが、ホームステイは行わずにホテル泊になるなど、完全に元の形態に戻ったわけではない。また、中国の姉妹校とは交流を再開することができておらず、来年度からの交流の再開を目指している。

2. 短期訪問団の派遣・受け入れ

和歌山県や和歌山市が主催する青少年海外派遣事業が多くあり、本校から多くの生徒が参加している。コロナ禍以降では「スペイン・ガリシア州への青少年代表団派遣」や「日韓高校生交流（派遣）事業」（文部科学省主催）などがある。学校独自で短期訪問研修を実施することは難しいので、こうした事業をこれからも積極的に活用していきたい。

短期訪問団の受入は、多くの機会をいただいている。最近では、「JENESYS 太平洋島嶼国訪問団」「メキシコ和歌山県人会子弟」「マレーシアからの研修旅行団（今年度だけで3校）」「スペインガリシア州訪問団」「中国・山東師範大学訪問団」の受け入れをした。



3. 長期留学派遣・受け入れ

以前は毎年3～4名の本校生徒が1年間の長期留学をしていた。今年度、アメリカに1名を派遣し、来年度も2～3名程度の長期留学派遣を予定している。

今年度に関しては、ドイツから1名、イギリスから1名の長期留學生を受け入れている。学校からの紹介ではなく、自分で留学制度を見つけてくる生徒や、海外の専門学校へ転学する生徒もいるので、多様化するニーズに応えられるようにしていきたい。

4. 国際理解教育

海外との交流だけでなく、国際理解を深めるための事業を年間行事の中に組み込んでいる。以下は例年の主な行事計画である。

- 4月：「国際交流セミナー」1年国際交流科
- 6月：「国際理解講演会」1年生全員・2、3年国際交流科
- 10月：「和歌山大学出前講座」1年国際交流科
- 11月：「わかやま国際ネットワーク全体交流会」2年国際交流科
- 2月：「第2外国語レシテーションコンテスト」2年国際交流科
- 2月：「外務省高校講座」2年国際交流科



5. 今後の展望

これまでにも多くの事業に取り組んできたが、その多くは国際交流科が中心となっている。しかし、普通科の生徒に国際交流の機会があった際に、彼らの積極性に驚かされた。国際交流活動が学校全体の取り組みになるようにしていきたい。

「学校から始まる多文化共生社会の実現」

宮崎学園中学校・高等学校
伊東 望

【教育活動の概要】

私たちの学校は、建学の精神である「礼節」「勤労」を基盤に掲げており、これは本質的に「自他尊重」を重んじることと関連している。今年度は、『学校からひろがる多文化共生社会の実現』を掲げ、みんなが幸せになるための学びを展開した。この活動のねらいは、異なる背景や文化を持つ人々が共存する社会を実現することである。

具体的な取り組みとして、2年生の「多文化共生」の授業において、在留外国人の状況について入国管理局の職員や地元新聞記者、在日外国人協会の方を招聘して、直接学び、在留外国人の置かれている立場や課題を理解し、寄り添ったサポートをしていくための土台を学んだ。(資料1) また、やさしい日本語の習得に向けた取り組みも行い、異なる言語や文化を持つ人々とのコミュニケーションをより円滑に行える環境を整えた。これらの学びを活かして、学校内掲示物を見直し、「みんなにやさしい掲示」を実現するために、学校図書館内の掲示内容の変更を行った。さらに、外国人だけでなくLGBTQ+の理解を深めるため、生徒会生徒らによる、校則見直しや、校内での啓発活動、LGBTQ+活動家で僧侶の西村宏堂さんを招いた講演などを実施した。これらの取り組みは、単なる多文化共生の枠を超え、真の意味での自他尊重を育み、ダイバーシティ社会の実現に繋がっている。

私たちの活動の独自性は、異なる背景を持つ人々との実践的なコミュニケーションを重視し、その経験を通じて相互理解を深める点にある。また、学校全体で包括的な取り組みを行うことで、異なるコミュニティ間での共生を促進することに焦点を当てた。また、このことにより、国際社会におけるリーダーとなる生徒の育成を目指している。

このように、異なる文化やバックグラウンドを持つ人々の共存を目指した、「自他尊重」と「共生」の理念を学びの中心に据えた教育活動の展開により、多様性を尊重し合いながら、みんなが幸せでいられる社会を築くためのリーダーの育成を行う。また、生徒一人ひとりが、身近なところにある課題に気づき、「ジブンゴト」として、主体的に解決していこうとする多文化共生社会におけるエージェンシーを育む教育を実践している。

【「持続可能な社会づくり」のために設定したテーマ】

宮崎県の総人口 1050208 人に対し在留外国人は 8309 人で比率 0.80%。コロナ禍により一時は減少したが、この半年間の増加率は 1.4% で、全国 3 位であった。(県内に住む外国人のうち、技能実習生が占める割合は去年末の時点で 40% を超え、全国で最も高い。) 今後も増加が予想される。地域の多様なステークホルダーとのつながりを持ち、彼らの置かれている現状を知り、共に生きていくために私たちがどうあるべきかを学ぶことで持続可能な社会にむけたエージェンシーの獲得を目指す。

【活動によって児童生徒が身に付けた資質・能力】

異なる文化やバックグラウンドを持つ人々との接点を通じて、多様性を受け入れ、尊重することで、柔軟な考え方や対応力が身に付いた。また、それぞれが置かれている現状を

把握することで、問題解決能力が育まれ、自ら考え、行動しようとする、リーダーシップ性が養われた。このような資質と能力を身に付けた生徒は、今後も、生涯を通して、地域社会での多様性を尊重し、共に生きるためのエージェンシーを持ち、持続可能な社会の実現に向けて積極的に貢献していくことが予想される。

【活動を通して変容した児童生徒の態度や価値観】

異なる背景や文化を持つ人々との交流を通じて、対話と共感の重要性を理解し、相手を尊重し、その違いを認める姿勢が養われた。また、在留外国人やLGBTQ+コミュニティに対する理解を深める中で、彼らが直面する課題を「ジブンゴト」として捉え、共に生きていくために、解決のためにどのような行動をとっていきべきか考えるようになった。

また、やさしい日本語の習得や掲示の改善など、実践的な取り組みを通じて、コミュニケーションや共生のためのスキルを向上させ、行動を起こしていくことが、他者との良好な関係を築くことにつながることを学んだ。

【活動を通して変容した教員の意識や学校体制】

本校は令和4年にユネスコスクールとなり、授業の中でESDを意識した授業展開を行う教員が増えたり、校内掲示が変わったりするなど、教員の意識や学校体制が変容してきた。そのことに加えて、今回の活動により、「多文化共生」＝「国際交流」というスキーマを超え、もっと深い次元で相手を理解し、異なる文化やバックグラウンドを超えて、それぞれの生活や信念、価値観を尊重し、根源的な違いを認識した上で、協力し合っていくことが大事であると考えられるようになった。

一部の教員から始まった国際理解・開発教育の手法を取り入れた授業であったが、現在は本校の教育活動の中心となり、ひいてはこども園、短大、大学を巻き込み、学園全体での取り組みにまで広がりを見せている。

【次年度に向けた課題と展望】

本年度の授業は、ゲストによる授業が大きな割合を占め、その多くの交渉を宮崎県国際交流協会のサポートで進めたが、来年度は同様のサポートが確実ではないため、早い段階で新たな協力や支援を模索する必要がある。

また、やさしい日本語の学びを継続し、地域に在留外国人が増加する中、公的なサポートとは別に、ハードルを下げ、気軽に参加できる交流やサポート体制を構築し、地域社会全体での相互理解を育むことのできる場を創っていきたい。

さらに、海外にいる宮崎出身者や移住者に関する学びを深め、彼らの視点や経験を通じて、異なる文化や環境での生活について理解を深めることで、より包括的な視野を育み、地域との絆を強化していきたい。ユネスコスクールとして地域との連携を活かし、多文化共生社会の実現を推進していきたい。

○中間発表会



←やさしいにほんご実践

入国管理局出張講座→



「世界で起こっている問題を自分事に一平和と共生と希求する国際理解教育」

北海道教育大学 石森 広美

(元 宮城県高等学校国際教育研究会事務局長・東北地区高等学校国際教育研究協議会事務局長・
全国国際教育研究協議会理事)

1. はじめに一当事者意識を育む

罪のない民間人、特に子どもが傷つき、泣き叫ぶ姿に胸が張り裂けそうになる。多くの命が失われていく現状に連日心を痛めながらニュースを見つめては、いてもたってもいられない気持ちになる。自分には何ができるのだろうか。傍観者でいいのか。常に考える。

ここ数年だけでも、ミャンマーの軍事クーデター(2022年)、ロシアのウクライナ侵攻(2023年)、そしてイスラエルとガザの紛争激化(2023年)…。そのたびに、国際理解教育を標榜し実践し続けた私は胸を痛めながら、考える。教育者として、地球市民(グローバル・シティズン)として、とるべき行動を考えて実行に移す。SDGs達成の鍵も、国際理解教育やグローバルシティズンシップ教育の目指す先も、目標に向かって「行動すること」にある。画面越しで眺める上記のような景色は、多くの生徒、いや教員を含む大人にも、「遠くの、自分には関係のない問題」と映っているかもしれない。

「当事者意識」をどうもたせるのか、様々な問題をどう「自分事」にしていくのか。これは国際理解教育において、これまでも中心的課題として議論されてきた課題である。

2. 多角的なものの見方

2023年10月以降、連日のようにパレスチナ自治区ガザ地区での被害状況が報じられている。イスラム組織ハマスとイスラエルの戦闘開始から11月7日で1か月が経過。ハマスの奇襲に対し、イスラエルは連日の空爆などで大規模な報復を続けている。容赦ない空爆により、血を流して泣き叫ぶ子どもたち。がれきの下敷きとなった人を必死で救助する人々の姿。ほこりと血まみれになって助け出されたけが人が運ばれても、手当てを待つ人であふれかえり、燃料や薬品不足で医療崩壊を起こす病院。麻酔が不足し、ほんの少しの痛み止めだけで足を切断する手術を受ける子ども、それを目の前で見ながら次の手術を待つ兄弟。こうした光景が報道されてきた。ガザ地区の死者の多くは子どもであり、国連のグテーレス事務総長がガザは「子どもたちの墓場」と形容したことばが、胸に刺さる。

イスラエルとパレスチナの対立、紛争の背景には長い歴史があり非常に複雑である。どちらにも言い分はあろう。イスラエルの建国によって土地を追われたパレスチナ人は難民となり弱い立場にあることから、国際協力関係者はパレスチナ人への支援に関心を抱く。

私自身、そのひとりである。2022年3月まで宮城県の公立高校に勤務していた私は、仙台でパレスチナ支援を行っていたNGOからパレスチナオリーブオイルや石けん等のフェアトレード商品を購入したり、また上記オイルを使用したフェアトレードクッキーを文化祭で販売したりするなどして、パレスチナ支援活動に協力していた。

一方で、イスラエルにも興味があった。今から30年以上も前だが、学生時代に南米を旅していた時、標高4000mのアンデス山脈(ボリビアからペルー)を走る高原列車の中で、吐き気や頭痛、悪寒などの高山病に苦しんでいた私に優しく手を差し伸べくれたのは、同

じく一人旅をしていたイスラエル人旅行者であった。イスラエルにはユダヤ教・イスラム教・キリスト教それぞれの聖地が密集する宗教的にも重要な場所があり、異文化理解の面からも興味深く私の中に刻まれていた。政情不安定でタイミングを逸していたのだが、ついに2018年、イスラエルとパレスチナ（ヨルダン川西岸）の両地を訪問する機会を得た。

嘆きの壁で真剣に祈るユダヤの人々の姿を目の当たりにした時、世界中から迫害されてきた彼らがようやく自分たちの国を所有できた安堵のような空気を感じた。一方で、長年イスラエルの占領下に置かれ、自由がなく貧困状態にあるパレスチナ人に対して、人道支援が必要不可欠であるとの思いも強くある。複雑な事情がある故、どちらかが絶対的な悪人というわけではない。ただし、ハマスとは無関係の、ただ平穏な日々を家族と一緒に暮らしたいと願うだけの無実の一般人を殺戮していいはずがない。

国際理解教育では、多角的なものを見方を涵養し、多様な考えを尊重する姿勢を養うことが重視されている。単なる二項対立ではないこの問題をまずは知ろうとし、関心を持ち続けることが肝要であると考え。

3. 「平和」への思い

ここで、今から8年前、仙台で出会ったあるガザ出身のパレスチナ人アーベットさんを紹介したい。彼を当時の勤務校（宮城県仙台二華高等学校）に招いて、一緒に平和を考える「命の授業」を実践したことを思い出す。

パレスチナ問題には昔から関心を寄せていたが、格段に身近な問題と感じるようになったのは、2015年9月9日、ガザから来日していたアーベットさんとの出会いであった。当初、名取市に事務所を構えていたNPO法人「地球のステージ」（現在の事務所は神奈川県海老名市、代表理事は桑山紀彦氏）との繋がり、英語通訳としてパレスチナ事務所で働いていたアーベットさんが来日しており、来仙予定があるという情報を得た。ちょうどその時、教えていたコミュニケーション英語Ⅱの教科書に、次のような実話が扱われていた。

パレスチナの難民キャンプで暮らしていた12歳のパレスチナ人の子どもがおもちゃの銃で遊んでいたところ、イスラエル兵に撃たれて重傷、パレスチナの病院に運ばれたのだが、設備が不十分のため対処できず、検問所を超えてイスラエルの病院に救急搬送しないと助からない、と言われる。しかし、検問所を超えるのも面倒な手続きや時間がかかる。イスラエルの病院に搬送されたが、すでに重篤な状態。命は助からないと告げられ、医師に臓器提供を勧められる。悩んだ両親は、子どもの命が誰かの命に役立つなら、と臓器提供を決心する。その結果、イスラエルの子ども5人を含む6名に臓器移植が行われた。その決意には、憎しみの連鎖を断ち切り、平和へのメッセージを世界に届けたいという思いが込められている。そして、このメッセージには、戦争を終わらせたいと願うイスラエルとパレスチナ双方から共感の声寄せられた。

教科書でこの英文を扱った時、「遠いところ」で起こっている問題ではなく、平和な世界を築きたいという気持ちを生徒たちに共有してほしい、との思いから、なんとかしてアーベットさんを学校に呼びたいと考えた。そして、たった二日間の仙台滞在日程から貴重な時間を捻出してもらい、私が担当していた当時の高校2年生向けに、「命の授業」を実践したのである。アーベットさんは2008年のガザ空爆の時の写真を見せながら、空爆で

娘さんを失った悲しみを、生徒がわかるよう平易な英語で語ってくれた。ガザの困難な日常の中にも、家族と過ごす何気ない日々やおしゃれをする女の子たちの写真など、笑顔を見せる人々の写真も提示され、私たちと変わらない人々の日常生活を垣間見せてくれた。

・「教科書に書かれていることは、今この世界で起きている真実なのだという事を、本当に感じました。自分の置かれている環境に感謝し、パレスチナの人々にできることは何かを考えて、微力でも力になりたいです。(S. A.)」

・「アーベットさんは悲しい経験もしているけれど、悲しみに暮れることなくまっすぐに平和を願っているところが強いと感じました。私もパレスチナと世界の平和をあきらめることはできないから信じていたいです。そして、アーベットさんがくれたメッセージのように、失くしたものだけに目を向けて悲しむのではなく、あるものを信じて進んでいきたいと思いました。(T. K.)」

これらは、その時の授業後の生徒の感想の一部である。翌年以降も、この単元を教える際はアーベットさんが来校した特別授業の話をした。平和と共生を希求する心を共有し、国際理解を深め、授業後にはパレスチナの人々に英語でメッセージを書くというという活動を継続してきた。生徒たちのこの単元への関心は高く、授業後にもパレスチナ問題をもっと知りたい、と聞きに来る生徒もいた。アーベットさんの話を直接聞いた教え子は現在25歳になり、様々な分野で活躍していることだろう。アーベットさんは8年前仙台の地で、高校生たちに向かって、平和な世界を築くことと希望をもって生きることの大切さを訴え、「私たちのことを忘れないでほしい」と語った。その後もSNSで連絡を取り続け、私たちは友情を深めた（※後述の北海道新聞2023年11月19日朝刊参照）。

4. 最後に—教育の可能性

2023年10月末、8年前の教え子からメールが届いた。私の新しい連絡先を恩師の一人から入手し、ガザのニュースを見て当時の授業を思い出した、と連絡をくれたのである。

石森先生に3年間英語と国際理解教育をご指導いただきました。世界のさまざまな問題を学び、視野を広げることができました。その考え方は今の仕事にも生きています。現在はガザ地区での戦闘が大変心配です。犠牲者が1万人を超え、子どもの被害も多いとの報道を見て、言葉にならないほど悲しいです。石森先生が授業にパレスチナ人のアーベットさんを招いてくださったことを覚えています。「ないものではなく、今あるものを大事にしてほしい」との言葉が重く感じられます。社会課題はさまざまですが、仙台の足元からひとつひとつ発信したいと考えています。いつかお目にかかることを楽しみにしております。

国際理解教育はじわじわと効いてくる人間教育である。現在は教員養成課程で学ぶ学生に英語教育と国際理解教育を教授しており、地域の先生方とも関わりながら多様な活動を展開している。ゼミ生もグローバル・イシューへの当事者意識が向上している。

【参考文献等】石森 広美 (2019) 『「生きる力」を育むグローバル教育の実践』明石書店。
連絡先 北海道教育大学函館校 国際地域学科・地域教育専攻 石森 広美研究室
Email:ishimori.hiromi@h.hokkyodai.ac.jp TEL/FAX 0138-44-4278 (研究室直通)

「ガザは笑顔を忘れた」

南部ラファの男性函教大・石森さんにメッセージ



上東日時のモスタファさん（左）と、仙台市の高校で英語教師をしていた頃の石森広美さん

＝2015年9月（石森さん提供）
生水が配給されるのを待つガザ地区の子どもたち（モスタファさん提供）

イスラエル軍によるパレスチナ自治ガザへの攻撃が続く中、ガザ南部ラファの英語教師フ・モスタファさん（44）が、友人で進教大副校長教授の石森広美さん（55）との関係サイト（SNS）でメンションを交わしている。10月7日に起きた襲撃はすでに多くのガザ地区人の死傷を押し、深刻化している。「襲撃を受けてしまった。襲撃を阻止できなかった石森さんは」「ガザで起きていることを関心を保持してほしい」と訴えている。

石森さんは仙台的高校の英語教師だった。2015年9月、モスタファさん（左）と、仙台市の高校で英語教師をしていた頃の石森広美さん（右）が、友人で進教大副校長教授の石森広美さん（55）との関係サイト（SNS）でメンションを交わしている。10月7日に起きた襲撃はすでに多くのガザ地区人の死傷を押し、深刻化している。「襲撃を受けてしまった。襲撃を阻止できなかった石森さんは」「ガザで起きていることを関心を保持してほしい」と訴えている。

やまぬ空爆／遺体散乱

その空爆に巻き込まれた遺体のニュース、石森さんは10月10日、友人のモスタファさん（44）とSNSでメンションを交わしている。10月7日に起きた襲撃はすでに多くのガザ地区人の死傷を押し、深刻化している。「襲撃を受けてしまった。襲撃を阻止できなかった石森さんは」「ガザで起きていることを関心を保持してほしい」と訴えている。

「ガザは日々空襲を受けている。水を止められたり、襲撃されたり、遺体も散乱している。襲撃を阻止できなかった石森さんは」「ガザで起きていることを関心を保持してほしい」と訴えている。

「ガザは日々空襲を受けている。水を止められたり、襲撃されたり、遺体も散乱している。襲撃を阻止できなかった石森さんは」「ガザで起きていることを関心を保持してほしい」と訴えている。



石森さんにメッセージを送るQRコード

教育関係者の皆様へ



国際理解教育／開発教育のための プログラム案内

Japan

Cooperation

International

Agency



1 JICA国際協力エッセイコンテスト

2 国際協力出前講座

3 教員向け研修・セミナー

4 国際理解教育／開発教育のための教材

5 JICA地球ひろば訪問

独立行政法人 国際協力機構

世界のことを考えるきっかけに!

1 JICA国際協力エッセイコンテスト

対象：中学生・高校生
募集期間：6月～9月上旬 結果発表：12月下旬

活用先 □夏休みの課題 □作文指導、小論文対策 □授業、特別活動、探究学習 □出前講座の事後学習

学校で習ったことやニュースで聞いたこと、
自分の体験から感じたことをエッセイで伝えよう!

JICAでは、開発途上国の現状や国際協力の必要性について理解を深め、自分たち一人一人に何ができるのかを考えることを目的に、中学生・高校生を対象としたエッセイコンテストを毎年実施しています。上位入賞者には、途上国で国際協力の現場を視察したり、現地での生活を体験できる海外研修が贈られます。夏休みの課題や作文指導としてもご利用ください。

後援：外務省、文部科学省、各都道府県教育委員会、
日本私立中学高等学校連合会など

詳しくはコチラ [JICA エッセイコンテスト](#) [検索](#)

一人一人が小さな行動を起こして、
いくとて誰かの悩みや辛い現状、
世界中に響いていくと思う。
ゆき之介 (愛媛県) 山田 龍馬

身近な生活の中に押し込まれ
「いつとて想像しにくい行動」を
心がけるようにしていきたい。
高校2年 (愛媛県) 久保日内大

上位入賞者は、
海外研修の参加や
フェアトレード商品で贈賞!
応募者全員に参加賞、多数の作品を
応募いただいた学校には学校教育を
応援します。



海外研修の様子 (マレーシア)

いつもの教室で、世界を体験してきた講師と学ぶ

2 国際協力出前講座

開発途上国の現場で国際協力に関わったJICAの関係者を講師として学校や地域などに派遣し、国際理解教育/開発教育にお役立ていただいています。現場で活躍した人材だからこそ貴重な体験談をお届けし、受講者の質問にお答えします。ご希望のテーマに合わせた講座内容を組み立てます。



国際協力出前講座

1ヶ月前
までに
申込み

全国のJICA国内拠点、または各県の国際協力推進員(JICAデスク)にお問合せください。

申込みの
受付

申込みは JICA国内拠点ホームページから
[JICA 国内拠点](#) [検索](#)

活用法

- 総合的な学習の時間
- 道徳
- キャリア教育 (総合的な学習の時間)
- テーマ学習 (総合的な学習の時間)
- 教員研修・PTA講習会 など

内容

ご希望のテーマや内容に応じて、
講師を紹介します!

- 開発途上国の文化や生活を知る
- 開発途上国の暮らしや自分たちの生活を
見つめなおす
- 国際協力を通じて自分の生き方を考える
- SDGについて学ぶ

対象

小学生～1校

実施日・場所

実施日、時間ともご希望により調整可能です。
オンラインでの実施は要相談

費用

講師への謝金と交通費のご負担をお願いいたします。謝金の目安は講師1人1時間あたりおよそ5,000円です。詳しくはこちらをご覧ください。

世界を学ぶ授業づくりに!

3 教員向け研修・セミナー

●教員向け国内研修

JICA国内拠点では、国際理解教育/開発教育に興味のある先生方を対象に地域に特化した研修を実施しています。

詳しくはコチラ [JICA 教員研修](#) [検索](#)

●教師海外研修

国際理解教育/開発教育に関心を持つ先生方を対象に、開発途上国を訪問して研修を実施しています。研修後はその経験をもとに教材作成や授業実践を行います。
(一般教員向けコースと行政関係者および学校長等向けコースがあります。)

詳しくはコチラ [JICA 教師海外研修](#) [検索](#)

●開発教育セミナー

JICA国内拠点および地球ひろばでは国際理解教育/開発教育に関する各種セミナーを実施しています。

詳しくはコチラ [JICA 開発教育セミナー](#) [検索](#)

●国際理解教育/開発教育指導者研修

国際理解教育/開発教育への興味・関心の高い先生方を対象に指導者作成・授業実践の更なるレベルアップに取り組めます。研修後は国際理解教育/開発教育の推進のリーダーとして取り組んでいただくことを目指します。

詳しくはコチラ [JICA 指導者研修](#) [検索](#)



教材で学びを広げ、理解を深める!

4 国際理解教育／開発教育のための教材

JICAでは、国際理解教育／開発教育や総合的な学習の時間に役立つ教材を作成し、無料で提供しています。国際協力や地球規模の課題をテーマにした教材を、授業に合わせてご活用ください。

詳しくはコチラ [JICA 教材](#) [検索](#)

教材は、
JICA地球ひろばの
ホームページでも
ダウンロードする
ことができます。



映像教材



映像 小中学生向け／先生・教育関係者向け 世界につながる教室

ルワンダを舞台に「水と世界」「国際協力」が学べる映像教材です。2分～5分の短い映像なので、使い方・組み合わせは自由です。アクティブラーニング用の教材としてそのまま活用できます。授業で使うヒントも収録されています。

ルワンダ村西部に暮らす
ダニエリ君の一日



映像 パワーポイント 小中学生向け 地球ナビ

「地球ナビ」はSDGsの各ゴールについて、JICAの取組みも紹介しながら、データ、写真、クイズなどを駆使して分かりやすくまとめた動画コンテンツです。JICA地球ひろば1階にある体験ゾーンでは、大型スクリーンで楽しみながら学べます。



冊子教材



冊子 小中学生向け 共につくる 私たちの未来

学習指導要領にもある「持続可能な社会の創り手」の育成を見据え、子供たちの生きる力を育むために、JICAの国際協力を切り口にSDGsの取組みをまとめた教材です。



冊子 小中学生向け つながる世界と日本

途上国と日本とのつながり、世界共通の目標「SDGs」や国際協力について、クイズを交えながら分かりやすく紹介しています。「どうなってるの?世界と日本」のリニューアル版です。



冊子 教員向け 国際理解教育実践資料集

授業ですぐに活用できるように、地球の現状や気候変動、南北バランスなどの課題に関する資料(データ、写真など)をまとめました。アプリと自分たちのつながりや、教育の意味を考えさせるワークシートも収録しています。



冊子 小中学生向け ぼくら地球調査隊

環境、保健、教育、食料、水問題など、私たちの身近に迫っている地球規模の課題について、マンガを読みながら学ぶことができます。

先生・生徒のお役立ちサイト



JICAでは、国際理解教育／開発教育の実践や授業で活用できる教材・素材等、様々な情報を提供する「先生・生徒のお役立ちサイト」を立ち上げました。学校で活用できる(生徒・教員向け)JICA開発教育支援プログラムも紹介しています。

是非、ご利用ください。

詳しくはコチラ [JICA 先生・生徒のお役立ち](#) [検索](#)



JICA地球ひろば(東京・市谷)で、世界を体験!

5 JICA地球ひろば訪問

入場無料

団体訪問は
要予約

JICA地球ひろばでは、開発途上国の暮らしの現状や、地球が抱える課題、国際協力の実情などを、見て聞いてさわって体験できる展示と、途上国での活動体験談や開発教育教材を使った参加型学習(グループワーク)を組み合わせたプログラムを実施しています。

修学旅行や社会科見学、総合学習等で、ぜひご利用ください!

プログラム例 120分

※プログラム時間と内容についてはご確認ください。



適用法

- 社会科見学
- テーマ学習
- 修学旅行
- 教員研修 など

内容

ご希望のテーマや内容に応じて、
プログラム内容を組み立てます!

- 体験ゾーンの見学
- JICAと日本の関係性について
- 国際協力(青年海外協力隊等)の体験談
- 地球体験学習
- テーマ学習やなど
- 展示を通じた異文化理解

事前事後学習もご相談ください。

対象

小学校高学年～一般

人数

1名～60名程度
※団体での見学プログラムは要予約

実施日

通常 月曜日～日曜日
(第1・3日曜日、JICA地球ひろばの休館日も参照)

費用

無料

申込方法

希望日時、訪問者人数、希望内容等をお伝えください。予約状況は、
JICA地球ひろばホームページの「訪問カレンダー」で確認できます。
地球案内デスク直通フリーダイヤル
0120-76-7278 (TEL: 03-3269-9090)

申し込みは JICA地球ひろばホームページから
JICA地球ひろば 訪問 検索
申し込みの
送付
FAX または Eメールで送付してください。
FAX: 03-3269-3419 chikyuhiroba@jica.go.jp

JICA地球ひろば

市民参加協力事業(開発教育支援等)の全国拠点として、国際協力に関心のある皆さまを応援するさまざまな事業を実施しています。

〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5

☎ 代表番号 03-3269-2911

✉ 地球ひろば推進課 mptgp@jica.go.jp

※ 営業時間

体験ゾーン: 平日・土日祝 10:00～18:00
定休日 第1・3日曜日、年末年始

交流ゾーン: 9:00～21:30 定休日 年末年始

J's Cafe: 平日 11:30～14:00
定休日 日曜日、祝日、年末年始
(土曜日の営業はHPをご確認ください)

JICA図書館: 事前予約制
定休日 土日祝日、館内整理日(各月最終平日)、年末年始



※団体訪問等での駐車場の利用についてはお問合せください。

JICAのメールマガジンに登録しよう!

■ JICA地球ひろばメルマガ
JICA地球ひろばや開発教育の
イベント情報などを随時発信
目にご案内しています。



■ 開発教育メルマガ
国際理解教育/開発教育の
推進に向けて、実証に役立つ
情報を配信しています。



Twitter, Facebook, YouTubeでも最新情報を配信中!



国際協力に関する情報はこちらから

全国各地にJICAの相談窓口があります

本部

〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25
二番町センタービル
TEL:03-5226-6660～6663(代表)

JICA市ヶ谷ビル

〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5
TEL:03-3269-2911(代表) FAX:03-3269-2054
JICA 研究所のほか、国際協力に関わる人々の業務支援を目的とした
JICA 図書館や地球ひろばなどを併設。

●国内拠点・地球ひろば

①JICA北海道(札幌/ほっかいどう地球ひろば)

〒003-0026 北海道札幌市白石区本通16丁目南4-25
TEL:011-866-8333(代表) FAX:011-866-8382

②JICA北海道(帯広)

〒080-2470 北海道帯広市西20条南6丁目1-2
TEL:0155-35-1210(代表) FAX:0155-35-1250

③JICA東北

〒900-0811 宮城県仙台市青葉区一番町4-6-1
仙台第一生命タワービル15階
TEL:022-223-5151(代表) FAX:022-227-3090

④JICA二本松

〒904-8558 福島県二本松市永田字長堤4-2
TEL:0243-24-3200(代表) FAX:0243-24-3214

⑤JICA秋波

〒305-0074 茨城県つくば市高野台3-6
TEL:029-838-1111(代表) FAX:029-838-1119

⑥JICA東京

〒151-0066 東京都渋谷区西原2-49-5
TEL:03-3485-7051(代表) FAX:03-3485-7904

⑦JICA地球ひろば

〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5
TEL:03-3269-2911(代表) FAX:03-3269-9000

⑧JICA横浜

〒231-0001 神奈川県横浜市中区新港2-3-1
TEL:045-663-3251(代表) FAX:045-663-3265

⑨JICA駒ヶ根

〒299-4117 長野県駒ヶ根市赤穂1-5
TEL:0265-82-6151(代表) FAX:0265-82-5336

⑩JICA北陸

〒920-0853 石川県金沢市本町1-5-2 リファール(オフィス棟)4階
TEL:076-233-5931(代表) FAX:076-233-5959

⑪JICA中部(なごや地球ひろば)

〒453-0872 愛知県名古屋市中村区平池町4-60-7
TEL:052-533-0220(代表) FAX:052-564-3751

国内拠点の所在地や詳しい内容はこちら <https://www.jica.go.jp/about/structure/domestic.html>

各都道府県の窓口 ～国際協力推進員～

JICAでは、JICAと皆さんの地域を結ぶ窓口として、全国に「JICAデスク」を設け、「国際協力推進員」を配置しています。国際協力推進員の多くは青年海外協力隊や日系社会青年ボランティアの経験者で、現地で培った経験や知識などを皆さんの地域で生かし、JICA事業の推進に励んでいます。

主な活動

- (1) 自治体などと連携した国際協力事業の広報啓発活動の推進
- (2) 自治体・大学・NGOなどが行う国際協力事業と連携推進
- (3) 草の根技術協力事業の推進
- (4) 民間連携事業の推進
- (5) 開発教育(国際理解教育)支援業務の推進
- (6) ボランティア事業への市民参加促進、応募相談及び帰国ボランティアの活動支援・推進
- (7) 研修員受入先の開拓支援・推進

北は北海道から南は沖縄まで、個性豊かな推進員が全国各地で活躍しています!

全国50カ所で活動する国際協力推進員の連絡先などはこちら <https://www.jica.go.jp/about/structure/suishin/index.html>



① JICA関西

〒651-0073 兵庫県神戸市中央区臨海海岸通1-5-2
TEL : 078-261-0341 (代表) FAX : 078-261-0342

② JICA中国

〒739-0046 広島県東広島市鏡山3-3-1
TEL : 082-421-8300 (代表) FAX : 082-420-8082

③ JICA四国

〒760-0017 香川県高松市番町1-1-5 ニッセイ高松ビル7階
TEL : 087-821-8824 (代表) FAX : 087-822-8870

④ JICA九州

〒805-8505 福岡県北九州市八幡東区平野2-2-1
TEL : 093-671-6311 (代表) FAX : 093-663-1350

⑤ JICA沖縄

〒901-2552 沖縄県浦添市字前田1143-1
TEL : 098-876-6000 (代表) FAX : 098-876-6014



各国内拠点・地球ひろばのウェブサイト、
ソーシャルメディアをご活用ください。



イベントや最新ニュースを発信中です。

各ソーシャルメディアもご利用ください。



世界各国と国際交流を行う高校を募集中！

一般財団法人日本国際協力センター（JICE）では、日本と世界各国の高校生をつなぐ国際交流を実施しており、参加校を募集しています。初めて海外の高校生と交流する場合も、事前に担当者より丁寧に案内や説明をいたしますので、お気軽にご相談ください。



1. 対面交流

国際交流を目的に来日する海外の高校生等を、10～30人規模で受け入れていただきます。半日ないしは一日をかけて学校を訪問し、学校・地域・文化の紹介、授業・部活動・行事の体験、意見交換などを行います。現地の事情や各国語に精通した JICE のコーディネーターが同行し、より円滑な交流のためのお手伝いをします。訪日する高校生の出身国について理解を深めるため、各国の歴史や文化を紹介した冊子や外国語会話帳など、交流に役立つ参考資料を差し上げます。

また、日本の高校生を海外に1週間程度派遣する「派遣プログラム」も実施しています。



自己紹介



科学技術体験



部活動体験

2. オンライン交流

1回90～120分のオンライン交流では、Zoom等を用いて、学校生活や地域の魅力、日本文化について紹介する発表やグループ・ディスカッションなどを実施しています。オンライン交流を通じて、異文化についての理解が深まるだけでなく、英語学習への意欲も高まります。



出身国・地域の文化や学校生活についてスライドや動画を用いてお互いに紹介します。



ブレイクアウトルーム機能を使い、少人数で話し合いを行います。趣味や好きなものについて質問することもできます。

【参加した日本の高校生の感想】



初めて海外の方と交流できてとても楽しかったです。また、自分の英語が少しでも通じることを知ることができて良かったです。参加をきっかけに、もっと英語を勉強したいと思いました。



私は司会とプレゼンテーションを行いました。英語で行う機会はありませんので、とても良い経験になりました。日本の文化を紹介することで、自分の国の文化について改めて知ることができ、これから海外で質問されたときに答えられるようになったと思います。ブレイクアウトルームでの交流はとても楽しく、英語力以上にコミュニケーション能力を向上させる必要があることに気づけました。



書道体験



折り紙体験



母国文化についての発表

【JICE の国際交流に参加するには】

オンライン交流や派遣プログラムの参加校の募集情報は、随時、JICE の国際交流特設ウェブサイト (<https://www.jice.org/exchange/>) にて公開しております。募集が行われていない場合も、お問合せフォーム (<https://www.jice.org/exchange/faq/>) からお気軽にご連絡ください。



特設ウェブサイト

一般財団法人 日本国際協力センター(JICE)とは

日本国際協力センター (JICE) は、1977年3月25日に、日本国外務省と JICA (国際協力事業団、現・独立行政法人国際協力機構) が実施する開発途上国への国際協力 (ODA) に、民間機能を發揮して協力することを目的に設立されました。現在は先進国を含めた国際社会全体を対象に人材育成事業を展開しています。

実施事業は、研修生や視察者を招く国際研修事業、行政官や産業人材の学位取得支援を行う留学生受入支援事業、青少年などを対象とした国際交流事業、在日外国人を対象とした多文化共生事業のほか、日本語教育や通訳など多岐にわたります。

独立行政法人国際交流基金（JF）は、国際文化交流を総合的に実施する日本の専門機関です。日本と世界の人々がつながる「文化」、「言語」、「対話」の“3つの場”をつくることで、お互いの間に共感や信頼をはぐくみ、日本の友人をふやしていきます。

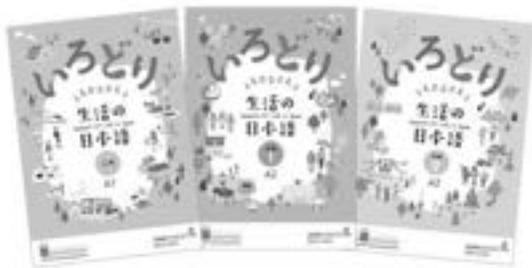
☆文化 [文化芸術交流]

海外の音楽やアートにふれて、その国に対する興味が広がった経験はありませんか？異なる文化や芸術に接したときの“感動”は、言葉のちがいを乗り越え、相手のことを知りたい、理解を深めたいという意欲を生み出してくれます。国際交流基金は、日本の文化を、美術や音楽、演劇、文学から映画など、幅広く世界の人たちに紹介しています。



☆言語 [海外における日本語教育]

海外の人たちに日本語を知ってもらうことは、日本への親しみや友情を広げる大きなきっかけになります。そこで私たちは、世界中のもっと多くの人に日本語を学んでもらえるよう、日本語教師や学習者への研修、教材の開発、日本語能力試験の実施など、各国の学習環境の整備を進めています。たとえば、令和2年に公開した日本語教材『いろいろ 生活の日本語』は、ウェブサイト上で無料ダウンロードができ、日本で生活や仕事をする際に必要となる基礎的な日本語のコミュニケーション力を身につけるのに役立ちます。国内外の多くの人々が利用しています。



☆対話 [日本研究・国際対話]



海外の人たちが日本について知りたい、学びたいと思ったとき、自国の身近なところに日本の専門家がいることはとても心強いことです。JFでは、海外の日本研究者を支援するほか、各国の有識者同士の対話が深まるように、シンポジウムや共同プロジェクト等を行っています。

高校生のみなさんの活動や好奇心に役立つ情報があります！

1. グループ訪問の受け入れ

広報部では、修学旅行や大学生のグループ（ゼミ等）の皆様をお迎えして、国際交流基金の活動をご説明します。詳しくは以下をご覧ください。

<https://www.jpf.go.jp/j/about/jfic/school/index.html>

2. 日中高校生対話・協働プログラム

JFでは、日中両国の高校生が、お互いの文化や社会についての理解を深めながら、学校生活や地域社会等の共通の課題の解決についてオンラインも活用し対話・協働することを通じて、両国青少年層に連帯や協力の意識を醸成する「日中高校生対話・協働プログラム」を実施しています。



<https://xinlianxin.jpf.go.jp/>

3. 海外での国際文化交流の参加者公募プログラム

JFでは海外で日本と日本文化を紹介してみたいという意欲のある人を募集しています。大学卒業以上、または20歳以上の方が対象ですが、将来の選択肢の一つとして考えてみてください。

(1) 日米草の根交流コーディネーター派遣 JOI (Japan Outreach Initiative)

米国南部・中西部・山岳部に日本文化を紹介。

<https://www.jpf.go.jp/j/project/intel/exchange/joi/outline/index.html>



(2) 日本語パートナーズ派遣事業

アジアの中学・高校等で日本語授業のアシスタントをし、日本文化を紹介。また、日本語パートナーズ自身も現地言語、文化、社会を学び日本社会に還元。 <https://asiawa.jpf.go.jp/partners/>

4. 日本語学習支援ウェブサイトの作成

JFでは海外で日本語を学んでいる人、教えている人に役立つウェブサイトを作成しています。将来海外で日本語を教えてみたいという人は、ぜひのぞいてみてください。

(1) エリンが挑戦！にほんごできます。 <https://www.erin.jpf.go.jp/>

(2) JFにほんごeラーニングみなど <https://mirato-jf.jp/>

(3) アニメ・マンガの日本語 <http://anime-manga.jp/>



5. ポータルサイト「JF digital collection」を通じた日本の文化紹介

JF digital collectionは、日本の文化にまつわるコンテンツを発信するポータルサイトです。美術や舞台芸術、ポップカルチャー、日本語学習など、多岐にわたるトピックを多言語でお届けします。

令和 4 年度の事業報告

～令和 4 年 4 月 1 日から令和 5 年 3 月 31 日までの記録～

1 事業概要

今年は、平成 22 年(2010 年)2 月 22 日に法人として設立認定を得て以来 13 年目となった。一般財団法人日本国際協力センター(JICE)との連携協力のもとに事業をおこなった。

一昨年、昨年に続く新型コロナウイルス禍のなかの一年であった。基本的活動としての定例常任理事会の開催に努めたが、12 回開催すべきところ、9 回の開催となった。国際協力に関する「エッセイコンテスト」事業に主として第一次審査を通して参画した。講演会を開催して研修した。地区委員会の拡充に努めた。ホームページの充実と強化を図った。

2 事業実績

(1) 常任理事会開催 第 3 木曜日 JICE 会議室

令和 4 年 4 月 21 日、5 月 19 日、6 月 16 日、8 月 18 日、9 月 15 日、11 月 17 日、
12 月 15 日、令和 5 年 2 月 16 日、3 月 16 日

(2) 理事会・総会開催

理事会 令和 4 年 5 月 26 日(木) 13:30～14:20 全商会館会議室

総会 令和 4 年 5 月 26 日(木) 14:30～15:20 全商会館会議室

(3) 国際協力に関する「エッセイコンテスト」事業参画

JICA が主催する国際協力中学生・高校生エッセイコンテストの応募作品について
令和 4 年 10 月 3 日(月)から 7 日(金)までの期間、第一次審査を分担した。

(4) 講演会・研修会の開催

第 1 回令和 4 年 4 月 21 日(木) 15:30～16:30 JICE 会議室

講演会テーマ:『『できない』を『できる』へコミュニケーションテクノロジーで
可能性を広げる分身ロボット Orii-lime(オリヒメ)』

講演者:株式会社オリィ研究所 巽 利紗様、児島 諒様

三好史子様←OriHime の操縦者(パイロットネーム:ふーちゃん)

第 2 回令和 4 年 5 月 26 日(木) 15:30～16:30 全商会館会議室

講演会テーマ:「やさしさの循環としての『あしなが運動』」

講演者:財団法人あしなが育英会アフリカ事業部 徳松 愛様

日本人奨学生大隅有紗(おおすみありさ)様

アフリカ奨学生ナイジェリア出身 Michael Okuwutu(マイケルオクワツ)様

第3回 令和4年6月16日(木) 15:30~16:30 JOCE会議室

講演会テーマ:「置くだけ簡単、見えるSDGs『ParaCanVas (パラキャンバス)』)

講演者:株式会社ウインドベル, 常住和弘社長、ディレクター 潮平寿賀子様

(これら3回の講演内容は当会のホームページに公開されている。いずれも高橋博文理事の手配により実施された。)

(5) 一般財団法人日本国際協力センター(JICÉ)との連携協力

(6) 地区委員会の拡充。

一~二県において、地区委員会を結成できる可能性があるので、矢田部正照理事長から関連資料を送るなどして、推進を目指した。

(7) ホームページの充実

齊藤宏理事の知見と尽力により、ホームページの充実が図られた。いまの時代のIT、AIなどのなしうる重要性の高まりに即すべく、その機能を強化した。

令和5年度事業計画書

事業の全体計画

本法人の主たる活動目標は、全国組織を確立することである。まずは、昨年度に引き続き地区委員会(支部組織)を拡充し、地盤作りをすすめていく。

そのためには、これまでの実績をもとにグローバル教育や開発教育に関する情報の提供や教具の開発に関する事業の一段の発展に努める。更に、関係機関と共に一般財団法人日本国際協力センター(J I C E)と提携している協定を基に、連携事業を一層進める。また、インターネットを活用した広報や知見の共有を拡充する。

1 特定非営利活動法人に係る事業

1) グローバル教育、開発教育などに関する人材育成、普及推進、政策提言など。

2) 講演会、講習会、研究会、研修会、発表会等の開催

- ・ 令和5年8月開催の「第60回全国国際教育研究協議会大会愛媛大会」に協賛し協力する。

3) 国内外の関係諸機関との連携

- ・ 独立行政法人国際協力機構(JICA)一般財団法人日本国際協力センターと連携して青少年交流事業や国際交流、教員派遣、その他の連携事業を行う。
- ・ 東南アジア諸国やアフリカ等の在京外交機関を訪問し、開発教育の推進を図る。
- ・ 小中学校、高等学校に於けるグローバル教育の推進のためのホームページの活用を図る。

4) その他、この法人の自的を達成する為に必要な事業

- ・ ホームページを活用した国際理解に関する広報活動の充実を図る。

全国国際教育研究協議会 紹介

1. 本会組織について

全国国際教育研究協議会（Japan Association for International Education/JAFIE 全国国際教/国際研）は、全国の高校（中等教育学校）約2000校の加盟校を有し、学校現場の教員が組織する唯一の全国組織の研究団体である。また、各都府県の研究会は教育委員会公認または高文連の組織となっている。研究内容は、国際教育（開発教育／国際理解教育）の研究、普及、実践交流等を目的とする。

本会は60年近い歴史のある研究団体で、発足当初より、海外移住事業団（現；JICA 国際協力機構）と密接な関係にある。

2. 全国国際教育研究協議会の歴史

1) 海外教育研究活動の開始

戦後、海外移住が再開され、農業独身青年の移住が盛んになり、その対象となる青少年に対し、海外移住の正しい理解と発展を促すための教育の必要性が論じられるようになってきた。県によっては、海外協会（県における海外移住実務機関）が海外に関心をもってクラブ活動などを行っている農業高校を「**海外移住モデル農業高校**」に指定し、資料配布や講師派遣などの助成をした。それらの高校では、学校行事や課外活動の中で、講演会や映画会などを開催し、中には拓殖講座を開設した学校もあった。

当時、中央の海外移住実務機関であった日本海外協会連合会でも、これらの教育活動を高く評価し、1958（昭和33）年「**海外移住指定高校**」（のちに海外移住推進高校と改称）を設定し、指導教師の育成と生徒のサークル活動に対し、側面的な援助をはじめた。このような動きは、漸次、全国的な規模へと拡大されていった。

その後、日本の経済は飛躍的な発展を遂げ、国際社会において日本の地位が向上し、国際人としての日本人の教養が論議されるようになってきた。一方、全国の指定高校代表者の研究集会などでも、国際理解・国際協力に関する学校教育のあり方とその方法が検討され、より実践的な国際活動を基盤とした「国際社会で活躍できる人材育成のための教育活動」を推進する必要が強調された。

その頃、国際化時代に即応した教育として「海外教育」をとりあげ、海外教育の指導手引書を作成し、実践教育を展開した。このことは、各県における海外教育の考え方や活動の方向に大きな影響をもたらし、全国の都道府県に「**高等学校海外教育研究協議会**」（県によっては、研究会などの呼称）が結成されるようになった。1963（昭和38）年「海外移住推進高校」は、海外移住事業団（現；国際協力機構）によって引継がれ、「**海外教育推進高校**」（当時500校）と改称された。

2) 全国高等学校海外教育研究会（指導教師連絡会議）の開催

海外教育研究活動が定着し、活発化するにつれて、各地区から、全国連絡会議開催の要請が強まり、1964（昭和39）年10月、神戸移住センターにおい

て、第1回全国高等学校海外教育研究会(指導教師連絡会議)が開催された。以降、この研究会は、全国高等学校海外教育連絡協議会として1969(昭和44)年8月の第6回まで開催され、いよいよ全国組織結成の機運が高まってきた。

3) 全国高等学校海外教育研究協議会の設立

設立年月日 1970(昭和45)年10月13日(969校加盟)

【設立趣意書】

今日、国際社会の進展は著しく、世界各国は日毎に緊密の度を増し、それに伴い相互理解と相互協力が、ますます必要となっており、“世界は一つ”というスローガンは名実ともに現実の姿となってきました。わが国と諸外国との交流も、政治、経済、文化などあらゆる分野にわたり多様化するとともに、海外雄飛や海外体験を望む青少年が急速に増大しつつあります。古来、わが国は地理的にも歴史的にも諸外国と接触する機会に疎く、海外の国情、文化、風俗、習慣、ものの考え方などについて正しく理解することができにくい環境におかれていました。したがって、望ましい国際社会の一員となるためには、国の内にあるか外にあるかを問わず、正しい国際理解と感覚を身につけ行動することが大切であり、その育成は学校教育に期待されるところが大きいと思われます。すなわち、国際的視野にたち行動できる青少年の育成は、国民的課題であり、海外教育の目指すところでもあります。そのためには、まず、教育にたずさわる教師自身が、積極的に海外教育の研究に努め、資料の収集や研修を行い、正しい国際感覚を学びとり、国際社会に対する理解と認識を深めることが急務であります。ここに、志を同じくする者が相集い、相互研さんと相互啓発の場とすることを趣旨とするものであります。

1970(昭和45)年10月13日

4) 全国高等学校国際教育研究協議会への改組と自立

1985(昭和60)年5月30日 会の名称と会則を変更

【設立趣意書】

学習指導要領の改正等、学校教育において国際理解と協調の精神を涵養し世界的視野をもって、国際社会に積極的に活躍できる人材の育成が強調されております。本会は第2次世界大戦後の海外移住について(農業移住)農業高校卒業後の移住に、正しい知識を体得させる指導に始まり、日本の急速な進展にともない、飛躍的に海外に進出するようになりました。農業高校の問題だけでなく、日本人として、国際人として、学校教育に期待されるところが大きく、本会は趣意の通り(1970(昭和45)年)設立されました。

その後、本会の「名称」・「目的および事業」等について度々の問い合わせがあり、また「海外教育」「国際教育」の内容については「設立の趣意」の解釈により同一の見解をとってきました。しかし、会員校の増加にともない、県協議会等より改訂の要望もありましたので、「名称」・「目的および事業」等について、会員の解り易いよう、改訂に踏み切りました。

目的および事業を達成するため、日本人として、国際人としての、国際教育の深化に当り、南北問題、開発途上国等の開発教育の問題も十分踏まえて、教材として十分生かした実践研究を推進することが、本会のあゆみであり、課題であります。会員の教科・科目等の指導に当り、一層具体的発展の推進を期待するものであります。

なお、本会は設立の経緯から、連絡先を「国際協力事業団総務部広報課」にしていたが、国際協力事業の需要性が急激に高まり、激務の国際協力事業団を本会の連絡先にしておくことが不可能になった。1988(昭和63)年2月に協議した結果、本会の自立が決定し、事務局長の勤務校を事務局とする事にした。

5) 全国国際教育研究協議会への改組

私立のみならず、公立も中高一貫校や高大連携、小中連携などが増えてきた。こうしたことから、2003(平成15)年度の全国総会で、あらゆる学校の国際教育に対応できるように、会の名称から高等学校を削り、全国国際教育研究協議会と改称し、一部会則を変更することを決定した。

6) 本会の業績に対する受賞

◆国際協力功労者(団体)感謝状受賞 1985(昭和60)年8月1日

1963(昭和38)年同協議会設立以来、国際協力教育実践モデル校を設置するなど教育の現場で国際協力、国際交流の教育実践に尽力また JICA エッセイコンテスト等への積極的な参加、国際協力にかかる講演会など高校生への国際協力についての知識の普及、啓発活動に貢献させてきた。



3. 2023(令和5年度)主な活動について

今年度は対面での全国総会・全国理事会を再開したが、全国総会は遠方参加者の便宜を図るため、Zoomでのハイブリッドの形で開催した。

1) 全国総会

2023年5月18日(木) 14:30~16:30 @JICA 地球ひろば

※ 英語弁論大会の規約の変更が承認された。

「英語を母語としない生徒(バカロレア校の生徒も含む)。かつ、英語による学校教育を原則3年以上受けていない生徒。」といった制限を設ける。

2) 第1回全国理事会

2023年8月8日(火) 13:00~15:00

※ オンラインでの実施

3) 第60回全国国際教育研究大会（愛媛大会）

2023年8月10日（木） @伊予農業高校からオンライン

⇒台風の接近により、急遽、対面で集合しての開催は見合わせ、1日で英語弁論・日本語弁論・生徒研究発表を全て実施し、オンライン上で審査を行い、表彰式まで行った。愛媛県事務局の尽力により、Zoomでのオンライン生配信で実施した。

※「国際理解・国際協力に関する研究発表会」の全国大会出場校6校については、当日の様子や取材した内容が『国際協力キャリアガイド（2023-24）』（国際開発ジャーナル社、p.36）で掲載されている。

4) JICA 高校生エッセイコンテスト 1次、2次、最終審査への協力

5) 第2回全国理事会 2024年2月3日（土）14:00～（予定）

6) 国際教育・開発教育インフォメーション（本誌）発行（3月）

7) 全国国際教育研究協議会 HP（ホームページ）を運営

8) 国際開発ジャーナル社との連携

* 高校生による平和構築に関する座談会の実施と記事の掲載（「高校生が JICA 緒方研究所を訪ねました」『国際協力キャリアガイド 2023-2024』国際開発ジャーナル社、p.35～36）

* 「国際開発ジャーナル」の「高校生の国際協力」に全国大会出場校を取り上げた連載記事の掲載

9) JICA との連携

* JICA 地球ひろばとの連携 全国事務局との定例協議等

* JICA 「教師海外研修」への応募勧奨等に協力

* JICA 国内機関と各県研究協議会「教員研修会」「生徒研修会」を共催

10) 各ブロック・各都道府県研究協議会の活動

11) 研究会の充実・発展のため「全国理事会」の強化

12) 中国ブロックの再組織化、中国地区大会開催に向けた準備会議

* NPO 国際研との連携

4. 全国国際教育研究大会の内容

JICA と共催。文部科学省、外務省、国際交流基金、日本国際協力センター等から来賓を迎え、各県の教育委員会等から共催・後援をいただいて実施。

◆ 高校生英語弁論大会

1981年より実施されている歴史ある大会。「文部科学大臣賞」「外務大臣賞」「JICA 理事長賞」「国際交流基金理事長賞」等を授与。国際協力等に関する英語弁論。在外経験は問わない。各都府県・地区予選を実施。

◆ 高校生日本語弁論大会

2001年より実施。「文部科学大臣賞」「外務大臣賞」「JICA 理事長賞」「国際交流基金理事長賞」等を授与。日本語を母語としない在日8年以内の

生徒（または留学生）の日本語弁論。各都府県・地区予選を実施。

◆高校生国際理解・国際協力に関する生徒研究発表会

2012年東京大会より実施。国際協力活動等の団体または個人での研究発表。2016年度より本格審査を行い、「JICA支部長賞」「国際交流基金賞」「JICE賞」などを授与。1月～3月に全国から公募。高校生の多岐にわたる活気あふれる活動の発表。

◆教員研究発表（全体会・分科会）

◆記念講演

◆生徒ワークショップ 他

1) 第60回全国国際教育研究大会 2023（令和5）年 愛媛大会 Zoomによるオンライン実施

「愛顔でつなぐ世界～持続可能な世界を目指して～」をテーマとして、コロナ禍明けの完全対面型開催を目指し直前まで準備を進めてきた。しかし、台風の接近により、やむなく対面型での開催は取りやめ、急遽、大会日程を1日に変更し、Zoomをつないでの実施を行った。愛媛県大会事務局は会場校である伊予農業高校に集まり、運営を行った。大会プログラムは、英語弁論大会・日本語弁論大会・生徒研究発表会に絞って実施し、オンラインでの審査を行い、表彰式まで行った。一部、回線が途切れる等のトラブルがあったが、再接続して発表してもらう等して対応することができた。これまでは台風接近により大会が中止というはなかったが、今後はそうしたことも想定した大会運営を行っていく必要があると強く感じた。

2) 第61回全国国際教育研究大会 宮城大会

第61回の研究大会は以下の通り、宮城県での開催を予定しております。詳細は決まり次第、HP等でお知らせいたします。

第61回全国国際教育研究大会（宮城大会）（案）

期日：2024年8月1日（木）～2日（金）

会場：トークネットホール仙台（仙台市民会館）

〒980-0823 宮城県仙台市青葉区桜ヶ丘公園 4-1（地下鉄東西線「大町西公園」駅 「西1」出口より徒歩10分）

TEL 電話：022-262-4721

内容：英語弁論大会／日本語弁論大会／国際理解・国際協力生徒研究発表会／基調講演／教員発表分科会／生徒ワークショップ／震災遺構ツアー

文責：全国国際教育研究協議会事務局長 中村俊佑（東京都立五日市高等学校）

全国国際教育研究大会(英語弁論大会／日本語弁論大会／国際理解・国際協力に関する研究発表大会)のあゆみ

回	大会名	年度	開催月日	開催場所
1	全国高等学校海外教育研究会	1964	S39 10.29～31	神戸移住センター、ぶらじる丸
2	第2～6回 全国高等学校海外教育連絡協議会	1965～1969	〃	〃 みるぜんちな丸
7	第7回～10回 全国高等学校海外教育指導教師連絡会議	1970～1973	12月、10月	横浜移住センター、ぶらじる丸他
11	全国高等学校海外教育研究大会			
	1974年徳島文化センター、1975年国際協力事業団青年海外協力隊事務局、1976年静岡県立磐田農薬高等学校			
	1977年千葉県市原市市民会館、1978年国際協力事業団青年海外協力隊事務局、1979年仙台市宮城県民会館、1980年経済協力センタービル			
18	〃 ならびに第1回英語弁論大会	1981	56 8.7～8	茨城県水戸市民会館
19	〃 ならびに第2回英語弁論大会	1982	57 8.20～21	栃木県真岡市青年婦人会館
20	〃 ならびに第3回英語弁論大会	1983	58 8.5～6	東京都立大森東高等学校
21	〃 ならびに第4回英語弁論大会	1984	59 8.24～25	愛知県勤労会館
	全国高等学校国際教育研究大会(以下名称)			
22	〃 ならびに第5回英語弁論大会	1985	60 8.20～12	東京都府中市市民会館
23	〃 ならびに第6回英語弁論大会	1986	61 8.21～22	国際協力事業団青年海外協力隊事務局
24	〃 ならびに第7回英語弁論大会	1987	62 8.21～21	兵庫県神戸市・六甲荘
25	〃 ならびに第8回英語弁論大会	1988	63 8.18～19	神奈川県・横浜郵便貯金会館
26	〃 ならびに第9回英語弁論大会	1989	H1 8.21～22	国際協力事業団・青年海外協力隊事務局
27	〃 ならびに第10回英語弁論大会	1990	2 8.8～9	青森県・古牧温泉第2グラントホテル
28	〃 ならびに第11回英語編論大会	1991	3 8.23～24	国際協力事業団・国際協力センター
29	〃 ならびに第12回英語弁論大会	1992	4 8.24～25	滋賀県・彦根プリンスホテル
30	〃 ならびに第13回英語弁論大会	1993	5 8.24～25	岐阜県・岐阜観光ホテル十八楼
31	〃 ならびに第14回英語弁論大会	1994	6 8.22～23	東京都・国際協力総合研究所
32	〃 ならびに第15回英語弁論大会	1995	7 8.22～23	佐賀県・はがくれ荘
33	〃 ならびに第16回英語弁論大会	1996	8 8.19～20	群馬県・ホテル聚楽
34	〃 ならびに第17回英語弁論大会	1997	9 8.18～19	東京都・国立オリンピック記念青少年総合センター
35	〃 ならびに第18回英語弁論大会	1998	10 8.24～25	宮崎県・シーガイア
36	〃 ならびに第19回英語弁論大会	1999	11 8.5～6	福島県・華の湯
37	〃 ならびに第20回英語弁論大会	2000	12 8.8～9	北海道・ライフオート札幌
38	〃 ならびに第21回英語弁論・第1回留学生日本語弁論	2001	13 8.23～24	愛媛県・にぎたつ会館
39	〃 ならびに第22回英語弁論・第2回留学生日本語弁論	2002	14 8.19～20	東京都・青年海外協力隊広尾訓練研修センター
40	〃 ならびに第23回英語弁論・第3回留学生日本語弁論	2003	15 8.23～24	熊本県・水前寺共済会館
	全国国際教育研究大会(以下名称)			
41	〃 ならびに第24回英語弁論・第4回日本語弁論大会	2004	16 8.19～20	神奈川県・メルパルクYOKOHAMA
42	〃 ならびに第25回英語弁論・第5回日本語弁論大会	2005	17 8.22～23	宮城県・仙台ガーデンパレス
43	〃 ならびに第26回英語弁論・第6回日本語弁論大会	2006	18 8.24～25	長野県・駒ヶ根総合文化センター
44	〃 ならびに第27回英語弁論・第7回日本語弁論大会	2007	19 8.23～24	島根県・出雲市 ビッグハート出雲
45	〃 ならびに第28回英語弁論・第8回日本語弁論大会	2008	20 8.21～22	埼玉県・浦和コミュニティセンター
46	〃 ならびに第29回英語弁論・第9回日本語弁論大会	2009	21 8.21～22	青森県・八戸市 ウェルサンピア八戸
47	〃 ならびに第30回英語弁論・第10回日本語弁論大会	2010	22 8.20～21	茨城県・つくば市 筑波学院大学
48	〃 ならびに第31回英語弁論・第11回日本語弁論大会	2011	23 8.18～19	和歌山県・和歌山市 和歌山ビック愛
49	〃 ならびに第32回英語・第12回日本語・第1回研究発表	2012	24 8.23～24	東京都・渋谷区広尾 JICA地球ひろば
50	〃 ならびに第33回英語・第13回日本語・第2回研究発表	2013	25 8.22～23	宮崎県・宮崎市民プラザ
51	〃 ならびに第34回英語・第14回日本語・第3回研究発表	2014	26 8.7～8	福井県・福井市・AOSSA
52	〃 ならびに第35回英語・第15回日本語・第4回研究発表	2015	27 8.20～21	千葉県・千葉市・神田外語大学
53	〃 ならびに第36回英語・第16回日本語・第5回研究発表	2016	28 8.18～19	高知県・高知県立県民文化ホール
54	〃 ならびに第37回英語・第17回日本語・第6回研究発表	2017	29 8.8～9	岩手県・花巻温泉千秋閣
55	〃 ならびに第38回英語・第18回日本語・第7回研究発表	2018	30 8.7～8	東京都・JICA地球ひろば
56	〃 ならびに第39回英語・第19日本語・第8回研究発表	2019	31 8.8～9	奈良県・奈良文化会館
57	〃 ならびに第40回英語・第20日本語・第9回研究発表	2020	R2 8.6～7	三重県・シンフォニアテックノロジー響ホール伊勢 ⇒対面開催中止・大会報告書による紙面発表で代替
58	〃 ならびに第41回英語・第21日本語・第10回研究発表	2021	3 8.26	長崎県・創成館高等学校での審査会・You-tubeによるオンラインライブ配信
59	〃 ならびに第42回英語・第22日本語・第11回研究発表	2022	4 8.18～19	関東合同・JICA地球ひろば・Zoomでのオンライン中継
60	〃 ならびに第43回英語・第23日本語・第12回研究発表	2023	5 8.10	愛媛県・伊予農業高校にてZoomでのオンライン中継(台風接近により対面大会は中止)

※ 空欄の県は現在「休会」となっております。本研究会に関心のある方は、全国事務局までご連絡ください。

ブロック	長	県番号	都道府県	学校名	〒	学校住所	TEL
北海道 東北		1	北海道	休会			
		2	青森県	八戸西高等学校	039-0502	三戸郡南部町下名久井字下諏訪平1	0178-76-2215
	●	3	岩手県	専修大学北上高等学校	024-8508	岩手県北上市新穀町2丁目4番64号	0197-63-2341
		4	宮城県	宮城県仙台東高等学校	984-0832	宮城県仙台市若林区下飯田字高野東70	022-289-4140
		5	秋田県	休会			
		6	山形県	休会			
		7	福島県	休会			
関東 甲信 越静		8	新潟県	十日町総合高等学校	048-0055	十日町市高山461	025-752-3186
	●	9	茨城県	水海道第一高等学校	303-0025	常総市水海道亀岡町2543	0297-22-0029
		10	栃木県	黒磯南高等学校	325-0026	栃木県那須塩原市上厚崎747-2	0287-63-0373
		11	【群馬県連絡先】	伊勢崎高等学校	372-0033	伊勢崎市南千木町12670	0270-40-5005
		12	【埼玉県連絡先】	和光国際高等学校	351-0106	和光市広沢4-1	048-467-1311
		13	千葉県	柏市立柏高等学校	277-0801	柏市船戸山高野325-1	04-7132-3460
		14	東京都	農産高等学校	124-0002	東京都葛飾区西亀有1丁目28-1	03-3602-2865
		15	山梨県	休会			
		16	長野県	更級農業高等学校	397-0001	長野県木曾郡木曾町福島1827-2	026-292-0037
		17	神奈川県	休会			
	18	【静岡県連絡先】	吉原高等学校	417-8545	富士市今泉2160	0545-52-1440	
東海 北陸		19	富山県	休会			
		20	石川県	金沢辰巳丘高等学校	920-1397	金沢市末町二18	076-229-2552
		21	岐阜県	休会			
		22	愛知県	刈谷北高等学校	448-0846	刈谷市寺横町1丁目67番地	0566-21-5107
		23	三重県	名張青峰高校	518-0476	名張市百合が丘東6-1	0595-64-1500
	●	24	福井県	金津高等学校	919-0621	福井県あわら市市姫4-5-1	0776-73-1255
近畿		25	滋賀県	大津清陵高等学校	520-0867	大津市大平一丁目14-1	077-537-5004
		26	京都府	向陽高等学校	617-0006	向日市上植野町西大田	075-922-4500
		27	大阪府	茨木高等学校	567-8523	茨木市新庄町12-1	072-622-3423
		28	奈良県	国際高等学校	631-0008	奈良市二名町1944-12	0742-46-0017
	●	29	和歌山県	和歌山北高等学校	640-8464	和歌山市市小路388	073-455-3528
		30	兵庫県	青雲高等学校	651-0823	神戸市長田区池田谷町2-5	078-641-4200
中国		31	鳥取県	休会			
		32	岡山県	休会			
		33	島根県	浜田高等学校	697-0024	浜田市黒川町3749	0855-22-0042
		34	【広島県連絡先】	宮島工業高等学校	739-0425	廿日市市物見西2-6-1	0829-55-0143
		35	山口県	休会			
四国	●	36	徳島県	徳島県立名西高等学校	779-3233	名西郡石井町石井字石井21-11	088-674-2151
		37	香川県	高松第一高等学校	760-0074	高松市桜町2-5-10	087-861-0244
		38	愛媛県	伊予農業高等学校	799-3111	伊予市下吾川1433	089-982-1225
		39	高知県	高知県立高知東高等学校	781-8133	高知県高知市一宮徳谷23番1号	088-845-5751
九州		40	福岡県	休会			
		41	佐賀県	休会			
		42	長崎県	創成館高等学校	854-0063	諫早市貝津町621	0957-25-1225
		43	熊本県	休会			
		44	大分県	休会			
	●	45	宮崎県	宮崎学園中学・高等学校	880-8503	宮崎市昭和町3	0985-23-5318
		46	鹿児島県	屋久島高校	891-4205	熊毛郡屋久島町宮之浦2479番地1	0997-42-0013
		47	沖縄県	休会			
全国会長	中里 真一		東京都立北豊島工科高等学校	174-0062	東京都板橋区富士見町28-1	03-3963-4331	
全国事務局長	中村 俊佑		東京都立五日市高等学校	190-0164	東京都あきる野市五日市894	042-596-0176	

<あとがき>

2024年1月1日、能登半島地震が起り、多くの方々が被災され、3週間経った現在でも捜索活動や避難所での支援が行われています。また、雪の影響で、多くの人が寒さなどで困難を抱えている状況が報道されています。国際研は被害が大きかった地域でも活動が行われており、当会に関わる先生方や生徒の皆さんの無事を祈ると共に、復興に向けて長期的に寄り添うことの必要性を感じているところでございます。

今回の震災の影響を受けたのは日本人だけでなく外国人観光客や技能実習生なども含まれ、言語の面だけでなく、さまざまな面での支援が必要となっています。実習生の多くは、カニやエビの底引き漁に関わっている人も多いそうです。まだまだ余震も続く中、これからのように日常を取り戻すかについて目処が立っていない人も多いのではないかと推察します。直接的な支援は難しくても、被災地の状況や被災して困っている外国人に思いを馳せ、発信することは重要なのではないかと思います。当会の日本語弁論大会でも、海外につながるのある生徒による発表の機会を設け、外国人児童の声を多くの人に聞いてもらうという活動を続けています。災害時だけでなく、日頃の教育活動で発信していくことの意義を改めて感じます。

また、2023年にはじまったロシアによるウクライナ侵攻、イスラエル・ハマス衝突などの紛争はいまだに続き、戦闘によって多くの人々、子どもたちが犠牲になっています。今回の投稿の中にもこれらの地域に関連する発表・寄稿がありました。生徒・教員によるさまざまな発信により、少しでも現地で困っている人々に想いを馳せる機会を持つことが重要であると思います。

最後になりましたが、今回の報告書を発行するにあたり、国際協力機構 JICA 地球ひろば様には、多大なるご支援・ご協力をいただきましたことを心から感謝申し上げます。ありがとうございました。また、日本国際協力センター様、国際交流基金様、全国国際教育協会様から事業紹介をご寄稿いただき、ありがとうございました。更なる国際教育・開発教育が発展のために今後ともご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

NPO 法人全国国際教育協会 木村 光宏

表紙の絵 東京都立五日市高校・3年・高須愛花

2023年度 全国国際教育研究大会報告書

国際教育インフォメーション

2024年3月

発行 全国国際教育研究協議会

会長 中里 真一

事務局長 中村 俊佑 TEL: 042-596-0176

